

556

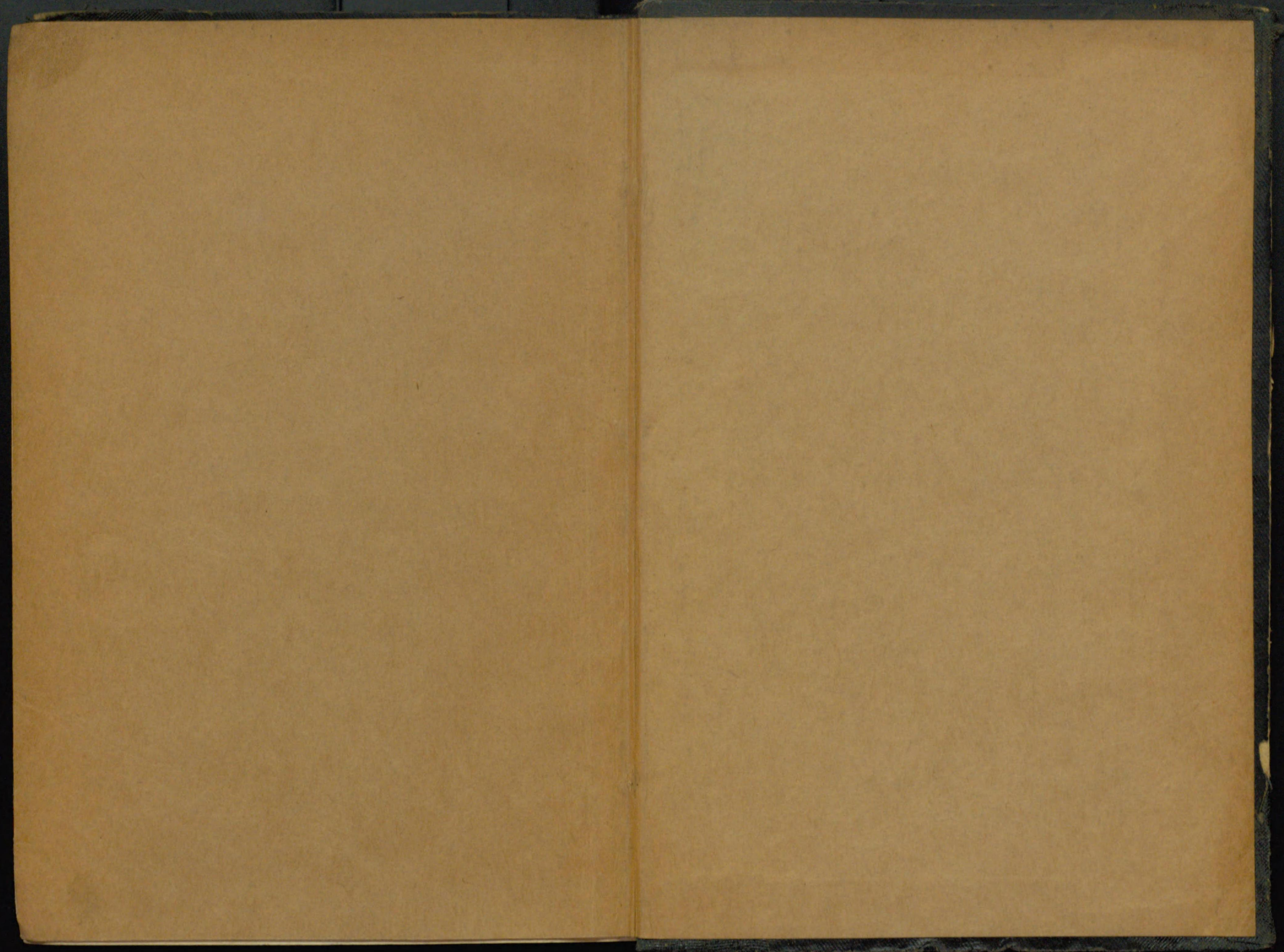
556-3581

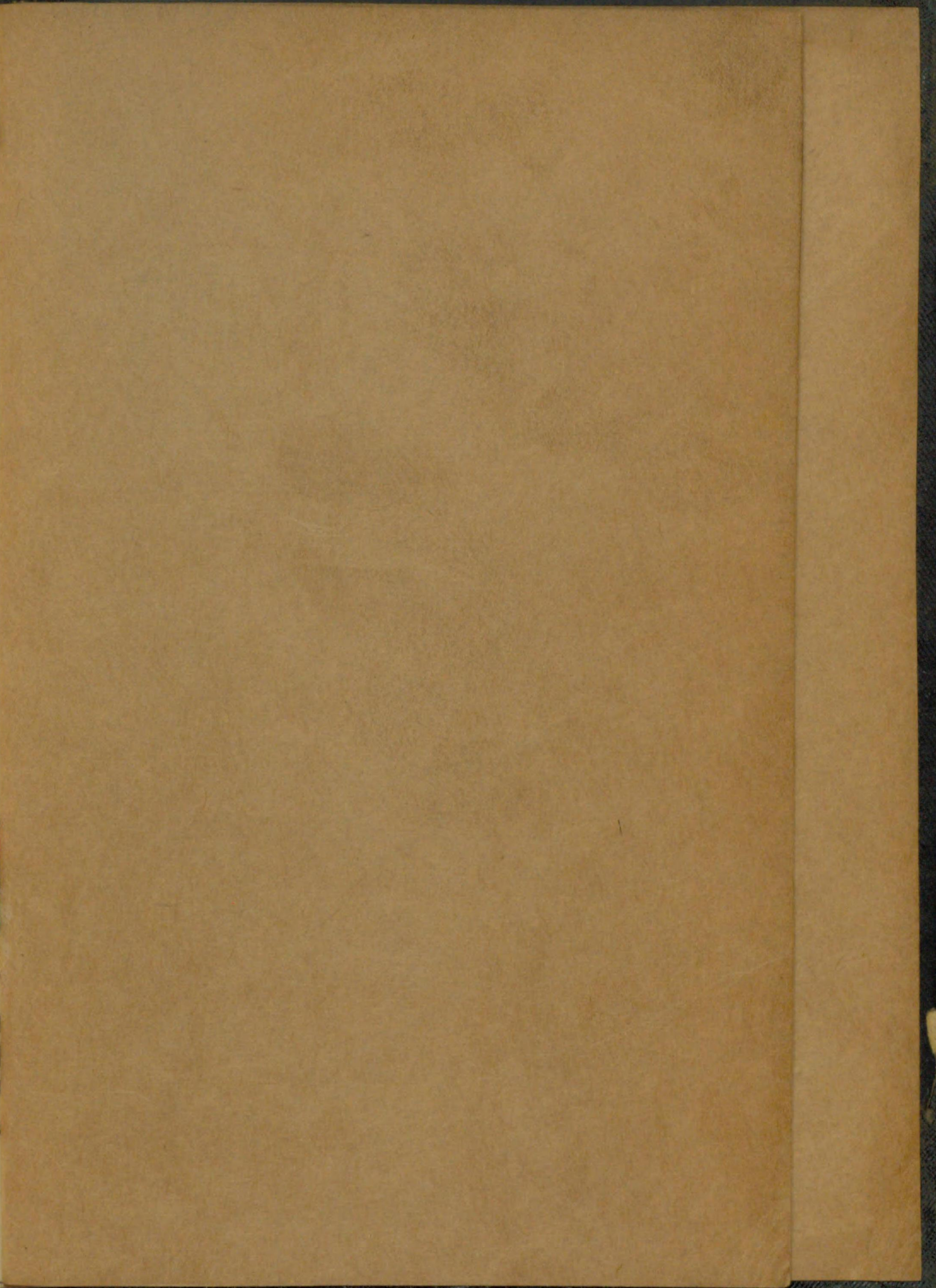
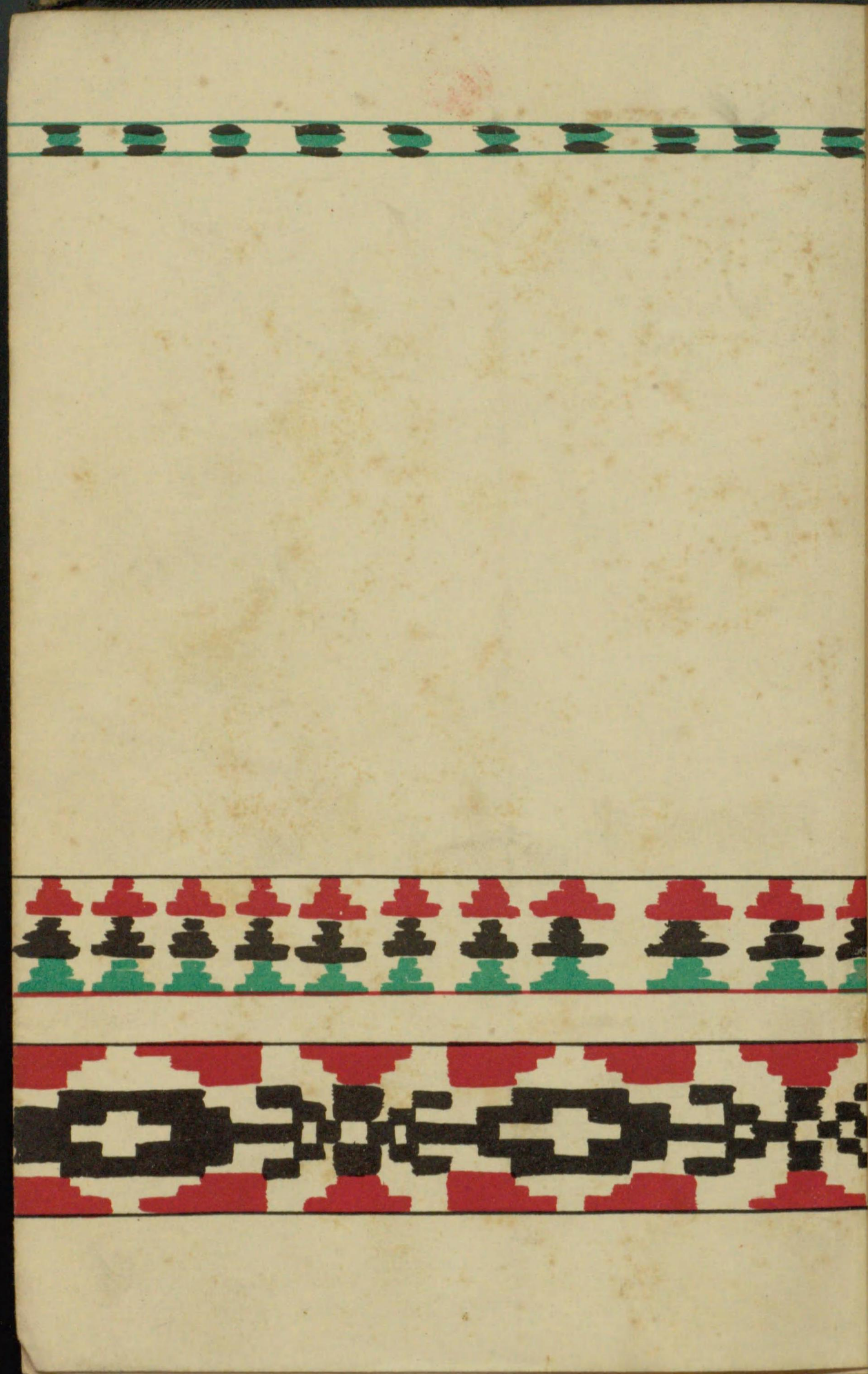


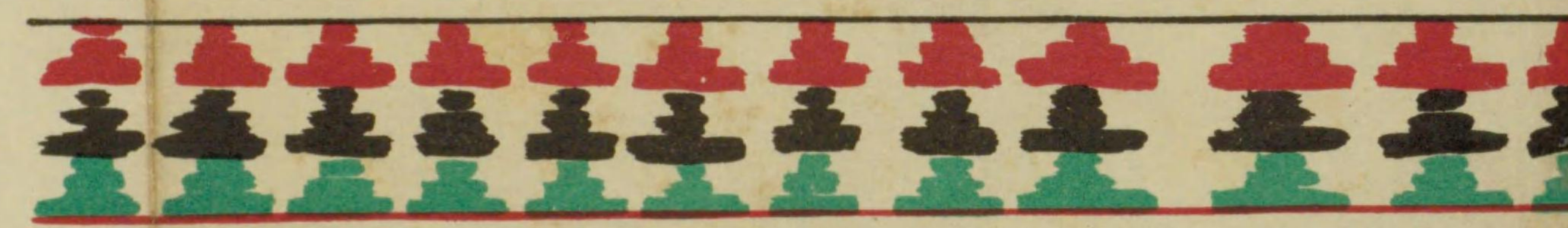
1200501511082

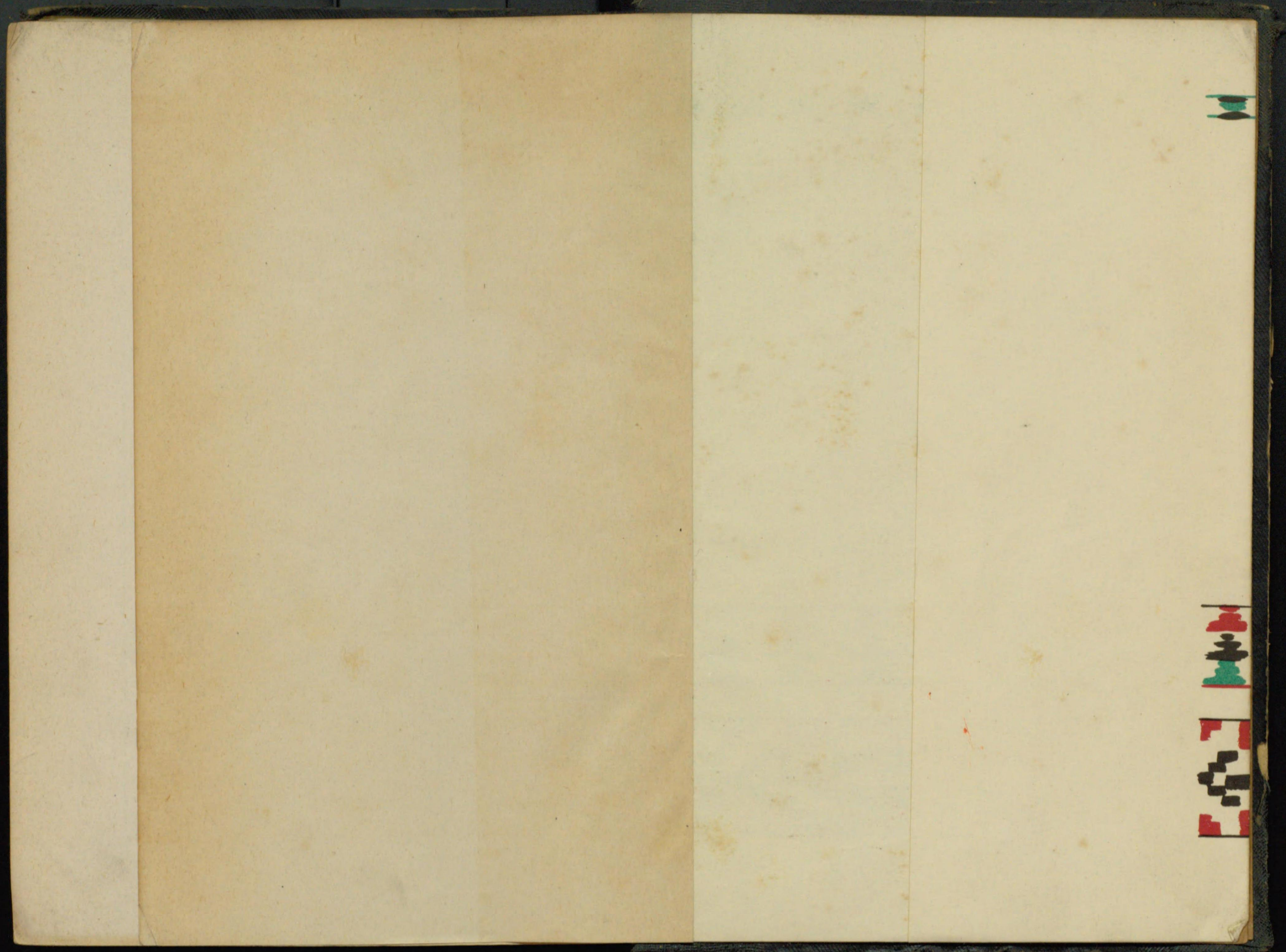
581

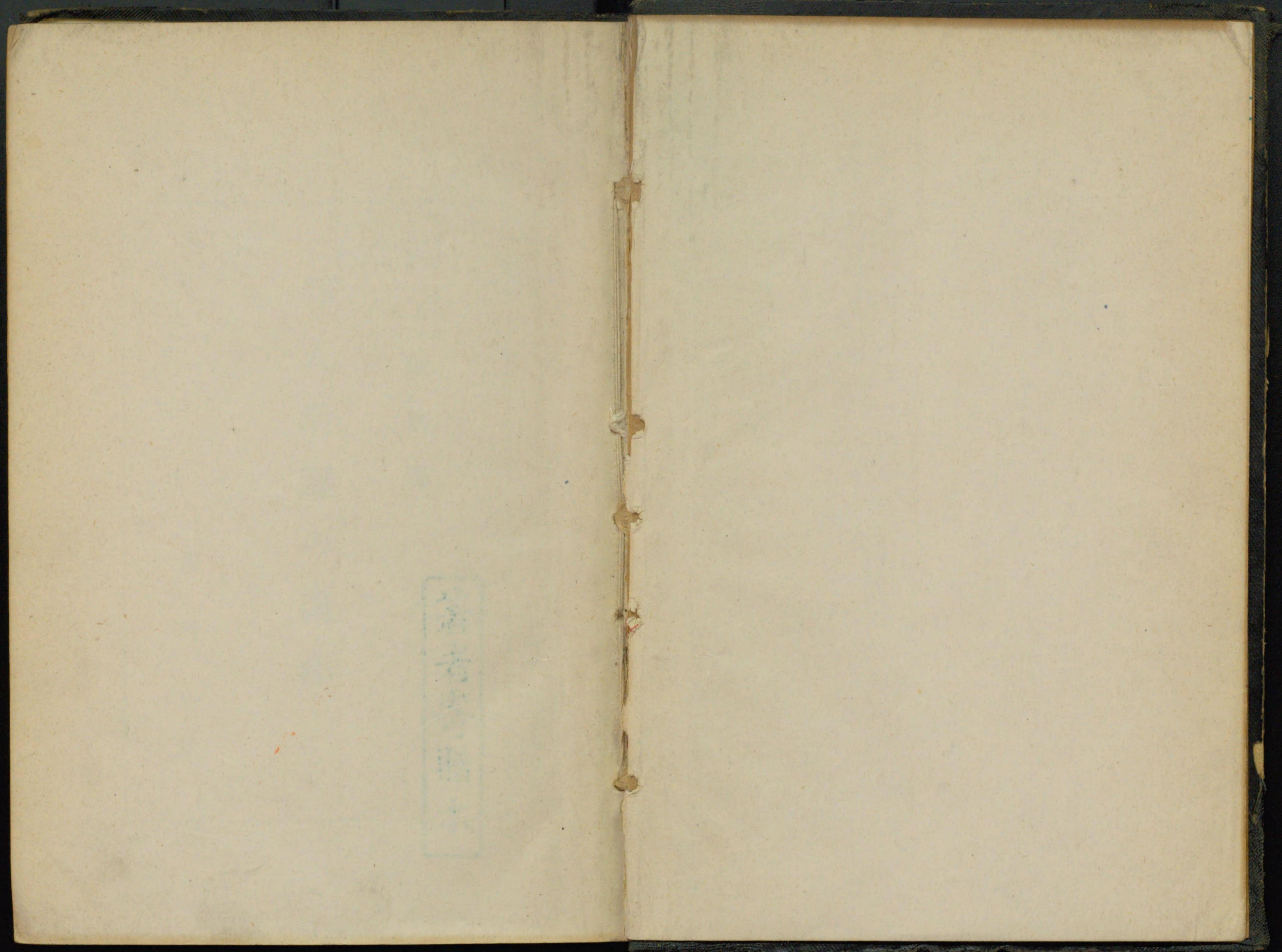
口
複
写



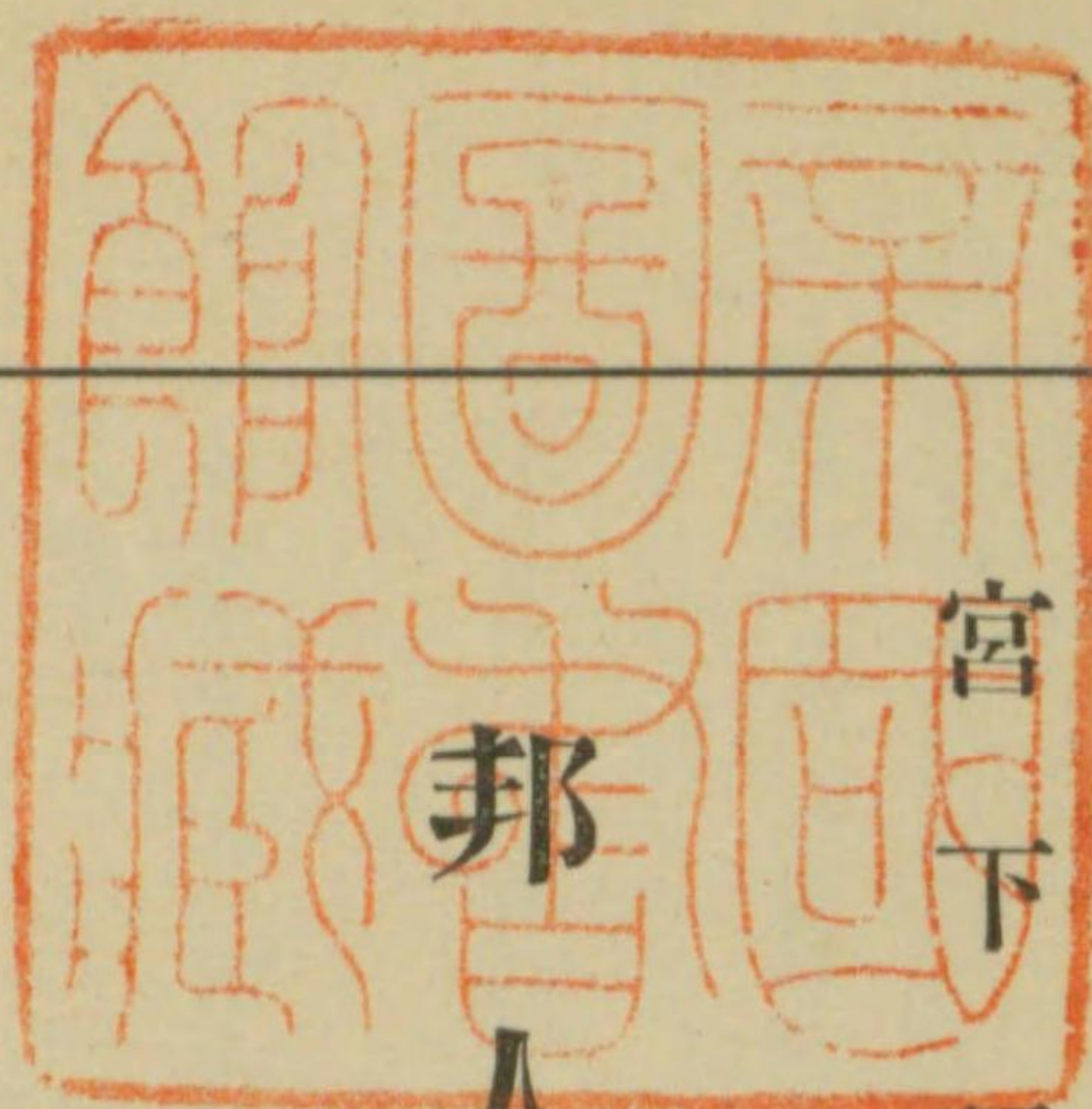








家藏書



宮下

邦

人

琢

磨

著

活

躍

の

南

洋

海外社版

著者寄贈本

装幀 石井柏亭畫伯



556-3581

自序

大正十四年ブラジルの視察に出かけてから、北米、滿韓、南洋と、この數年間旅から旅のあはたしき生活をつとけたので、資料整理のいとまもないうちに、最初のものからだん／＼感興が薄らいで來、印象の茫漠として來たのを否む譯にはまわりません。

それで南洋だけは、第一印象を纏めて見たいと思つて書いたのが本書です。南洋に於ける事情を紹介し、わが同胞奮闘の消息を傳へ、幾分でも將來民族發展上に寄與するところがあれば幸甚です。

旅行中に多大の便を御與へ下され、かつ、有益なる資料を提供して下さつた方々に深く謝意を表します。

昭和四年六月

著

者

普及版刊行に際して

本書は、三版まで刊行したのですが、江湖の要望により今は一冊の残本もなくなりまして、今回とりあへず普及版として出すことにしました。誤り訂正増補を要すべきものもありますが、これはその後視察した分を加へ、何れ他日を期し改めて出したいと思つて居ります。

昭和六年十二月

著者

白

目次

新嘉坡にて	一
新嘉坡	一
市の概観	二
日本人ホテル	九
邦人の發展	一〇
日本商品と邦商	一七
小學校と醫院	三〇
熱血兒ラツフルス卿	三三

目次

目次

支那人の新嘉坡……………三六

娘 子 軍……………四〇

ジョホールの日本村……………四八

旅行の準備……………五九

スマトラ一巡……………

スマトラ……………六三

碧玉をのべたるレオの海……………六四

支那苦力渡航の経路……………六六

入 國 手 續……………七〇

精 榮 商 會……………七三

水の都パレンバン……………七三

慄悍なる民風……………七六

フキフキ教……………七七

パレンバンの日本人……………八〇

マンサン行……………八三

清涼の樂地チュルツプへ……………八九

チュルツプの沃野……………九六

チュルツプ町……………九六

快適なチュルツプの氣候……………九九

人生は享樂、無邪氣な土人……………一〇二

小企業農業者の理想郷……………一〇三

ムアラアマンの日本人……………一〇九

チュルツプと好一對のバゲラム……………一一三

目 次……………

目次

山嶽の西海岸州よりメダンへ……………一二五

英領時代の中心地ベンクローレン……………一二六

パダンへ……………一二八

パダンの日本人……………一三三

シボルカへ……………一三四

世界第一の無葉の花と鯉の神様……………一三六

夜中の獨木橋渡……………一三七

シボルガ……………一三〇

漠々たる曠野……………一三三

トバ湖……………一三三

ホテルの問題……………一三三

新興の市メダン……………一三七

目次

メダンの煙草……………一四〇

豪勢な社宅……………一四二

ブルマンドー農園……………一四四

苦力の話……………一五〇

A.V.R.O.S……………一五五

樂郷ブラスタギ……………一五八

バタ族……………一六一

メダンの日本人……………一六四

凶勇なるアチエ民族……………一六五

メダンからタケゴンへ……………一六八

ピートルン……………一七二

タケゴン湖……………一七五

目次

アチエに日本村でも作つたら……………二七九

南スマトラ……………二八一

バトラジャ……………二八三

湖畔の一夜……………二八五

湖畔の村……………二八八

西海岸の漁港コロイ……………二九一

八十キロを飛び廻るフロックコート……………二九三

支那人ボイコットの失敗……………二九四

新興の市街タンジョンカラン……………二九八

何故タンジョンカランは盛んになつたか……………二九九

爪哇スマトラ連銷の第一關門……………三〇〇

この町の日本商店……………三〇一

爪哇遊記

世界一人口稠密の爪哇……………三二七

不都合なる税關吏……………三二八

目次……………

和蘭退職官吏の新開村……………三〇一

I・E・V農園……………三〇三

爪哇人の移住地……………三〇六

土地の物産……………三〇九

土地價格……………三二二

嚴格なる土人の風儀……………三二三

さびれ行くトロバトン……………三二四

東港から爪哇へ……………三二五

目次

東印度會社の發祥地……………三三〇

大バタビヤ市……………三三〇

八 タンジヨンプリオーク港……………三三五

バタビヤで觀るもの……………三三六

ジャカトラ懷古……………三三八

蘭人の生活……………三三七

ホ テ 入ル……………三三八

バタビヤの日本人……………三四三

蘭領政治の組織……………三四四

世界一の熱帯植物園……………三四六

バイテンゾルグノ日本人……………三四八

蘭領となるまで……………三四九

目次

清涼の寶土ブレアンゲル州……………三五五

生活にあへぐ爪哇人……………三五六

紫明の都バンドン……………三五八

發 展 の 跡……………三六〇

レンバンの丘……………三六一

夜のバンドン……………三六四

規那園と茶園……………三六五

ガ ロ 一……………三六九

アヒルの巡國……………三七二

環翠山莊、香水工場、大觀莊……………三七二

爪哇と大谷師……………三七四

佐藤農園と自動車部……………三七六

目次

ガロー娘、アンコロシ……………二七六

チバナス温泉……………二七九

ブゲンヂ湖……………二八〇

革命の烽火……………二八三

土民の民族運動……………二八六

スラバヤへ……………二八九

チエリボン……………二九一

スマラン市……………二九四

パツサンマラン……………二九六

スマランの支那人……………二九七

避暑地サラチガ……………三〇〇

シザル園……………三〇一

古雅典麗の王城ソロー……………三〇四

王朝榮華の夢……………三〇四

ソローの日本人……………三〇七

根本農園……………三〇九

爪哇の砂糖……………三二三

苗から砂糖にまで……………三二六

ポロブドールの大佛蹟……………三二八

王城、水城……………三三一

名物サロンの話……………三三四

ソローの王宮……………三三六

商港スラバヤ……………三三八

スラバヤの日本人……………三三九

目次

目次

トサリ行……………三三一

マランの同胞をたづねて……………三四三

トロナゴンの人々……………三五〇

日本對東印度貿易……………三五七

勢力減退し行く支那商人……………三六一

南洋と野師……………三六二

賣藥行商……………三六七

齒醫者……………三七〇

理髮業……………三七一

娼婦型の爪哇娘……………三七三

馬來より暹羅へ

馬來より暹羅へ……………三八一

馬刺加馬來の首府コールランボ……………三八七

コールランボの日本人……………三八八

カラシ王宮……………三九〇

バトゲープ……………三九二

彼南島……………三九四

ピナンの日本人……………三九五

極樂寺……………三九七

ピナンよりハヂヤイ……………三九九

暹羅……………四二〇

新開の市街ハヂヤイ……………四〇三

佛敎の國……………四〇七

目次

目次

南シヤムの日本人……………四〇九

山田長政とその時代……………四一〇

沃野を訪ねて……………四一七

シヤムの風俗……………四一九

佛徒の供養……………四二五

日 暹 寺……………四二七

日本と暹羅の國交……………四二七

シヤムから馬來へ……………四三八

殺人請負の支那人……………四三〇

自動車の置去り……………四三二

同胞發展の爲めに……………四三五

海外思想の涵養が第一……………四五一

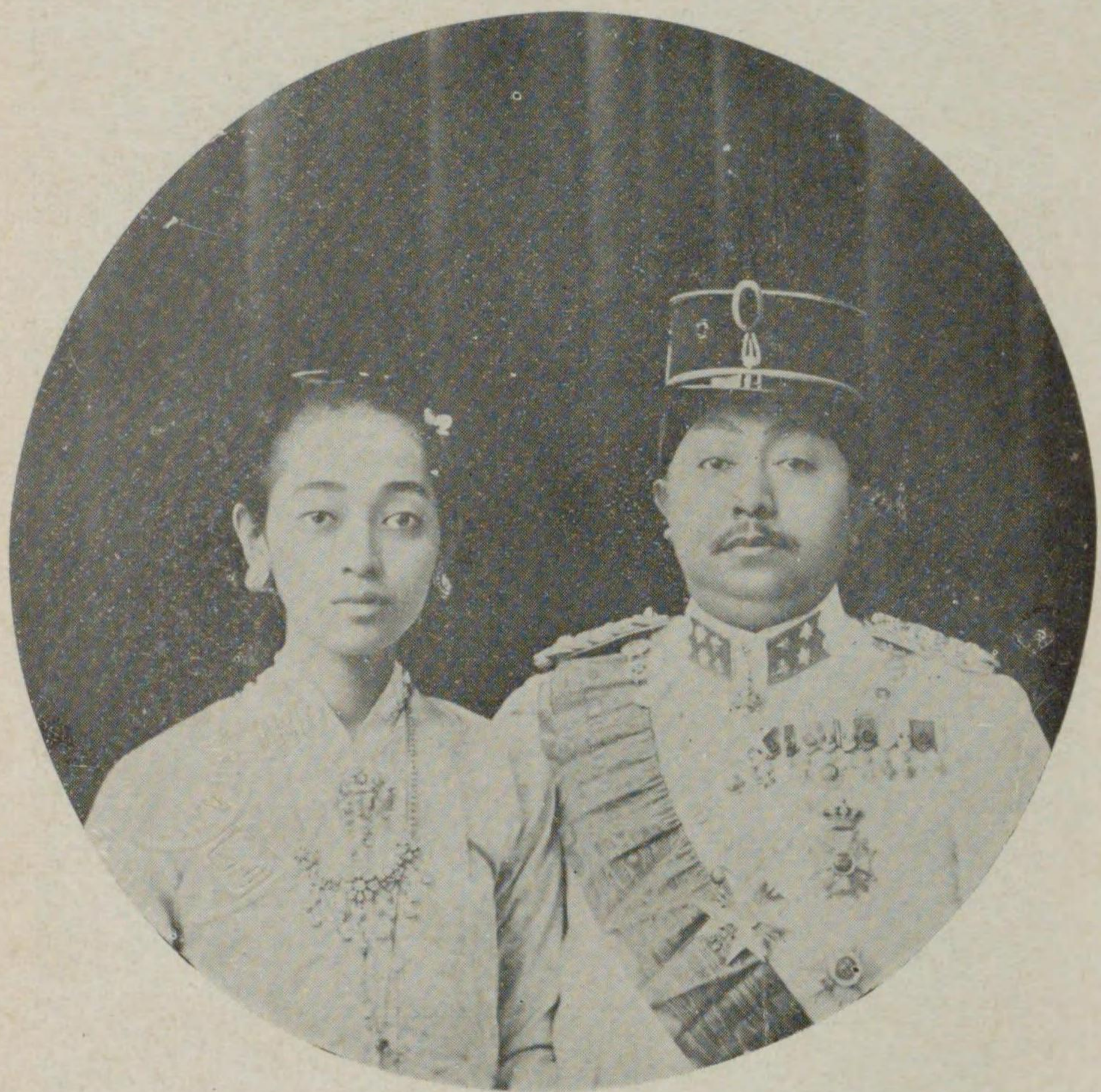
目次

附 録

蘭領東印度への航路……………一

外國旅券出願様式……………六

— 終 —



スローナン王

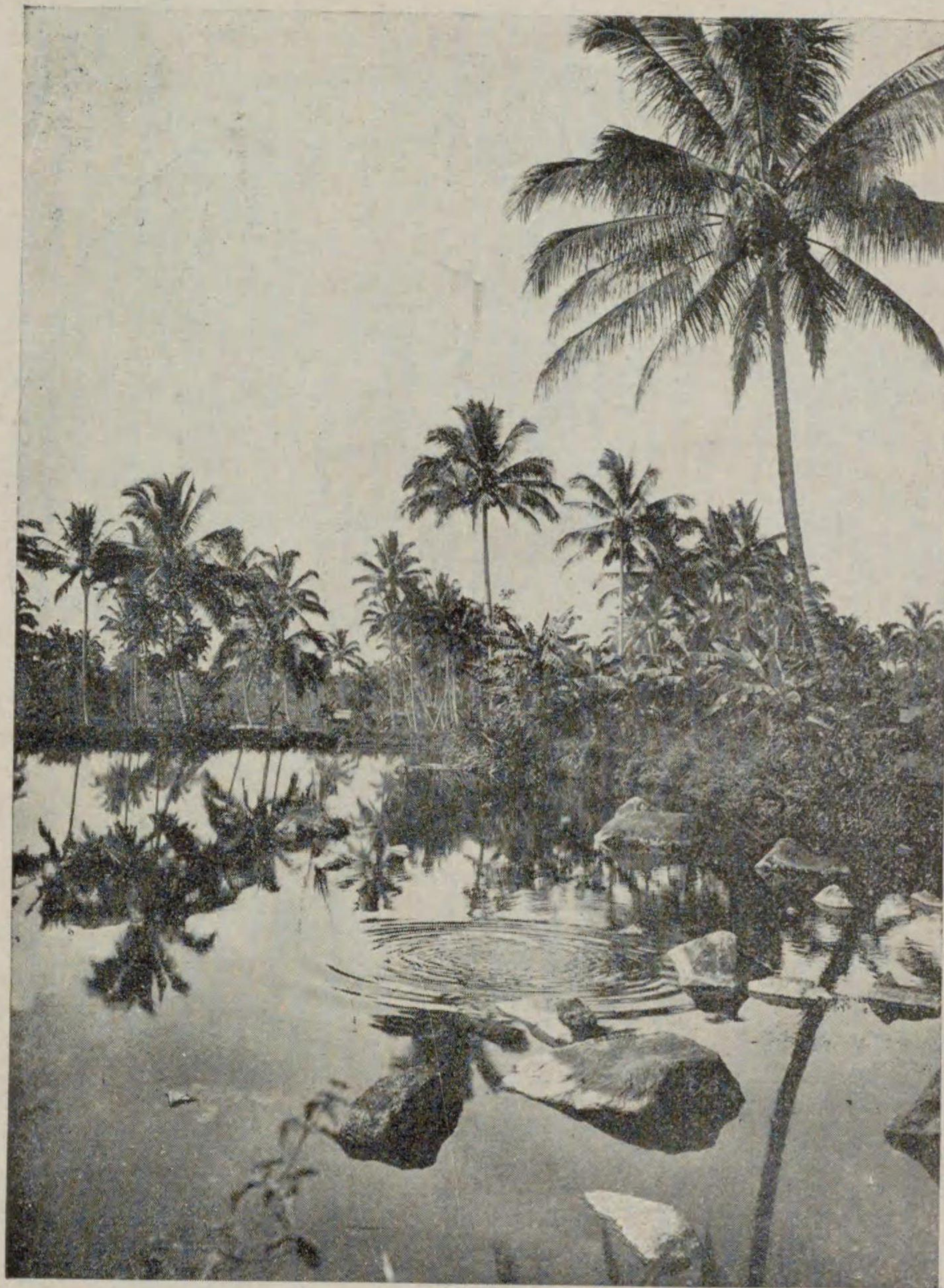
スローン王家は昔から中部爪哇に勢力を振ひ最後まで和蘭と抗争したマタラム王國の宗家である。和蘭の嚴峻な統制の下に昔ながらの王城に居住し兵を養ひ奏問をうけ裁可を與へ典雅の儀禮に豪華の名残りをとゞめてゐる。現王は第十世、御年六十六歳、昭和四年一月三日國風により六十四歳の誕辰賀宴を催された、日本人に對しては非常な好感を持つて居られる



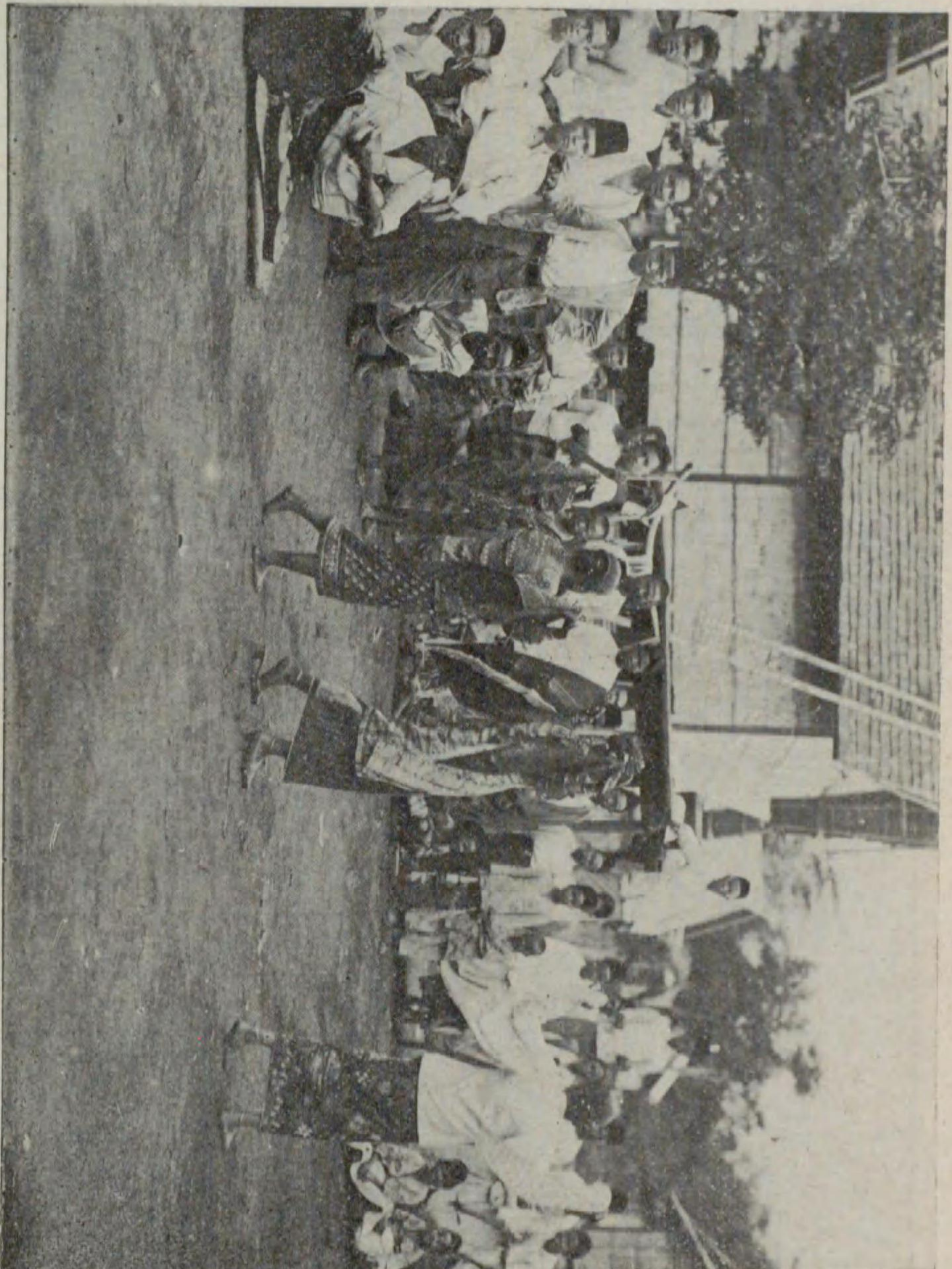
「てて立くし太柱宮に根岩つ底り知高木千に原ヶ天高」 家の人士
 (照参頁五九文本)。るるばのしも昔の代神に風ふいと



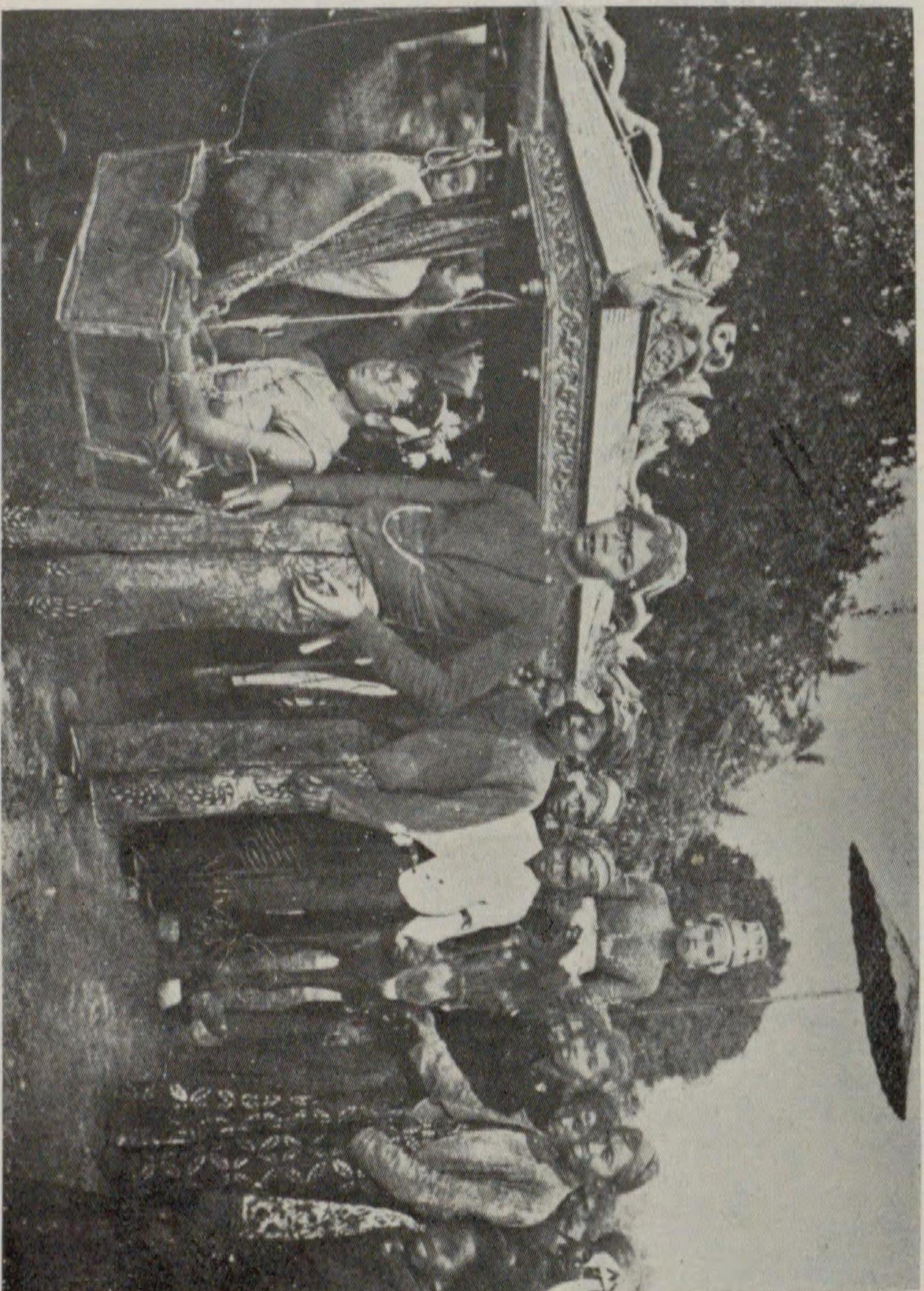
たしくさ小をれそ只でのもた似に宅住く全は庫倉の等彼 庫倉
 社末の前の社神はることるゐでん並もつくいがれこ、るあでけだ
 。るすが感ふいと



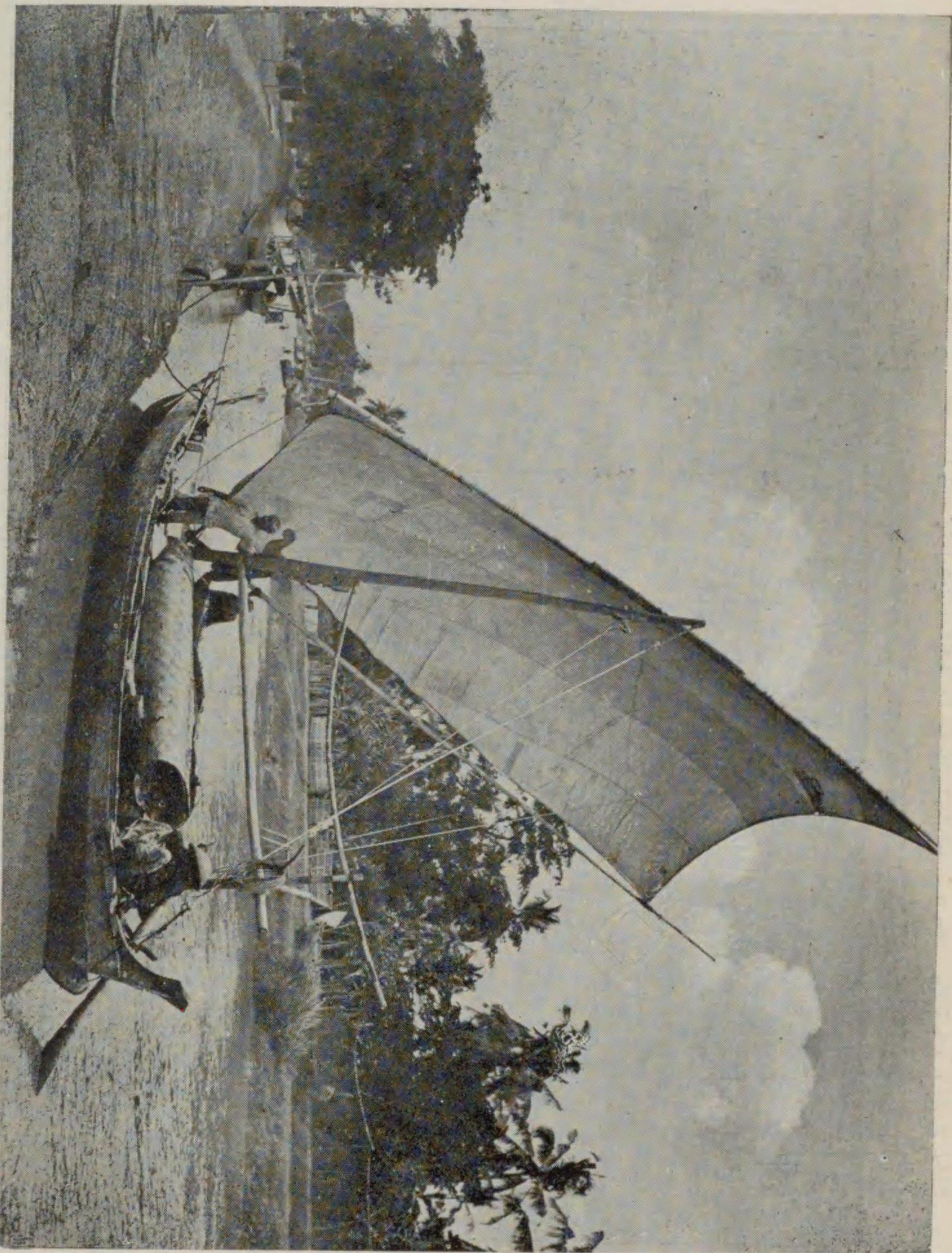
ンぐるゆ聳く高に北西の一ロがは泉温スナバチ 場泉温スナバチ
 餘の泉温のこは真寫、るあで地泉温なか静物るあに麓の山ルーツ
 。る跳てつ打を水は鯉緋々時で池魚養たい引を水



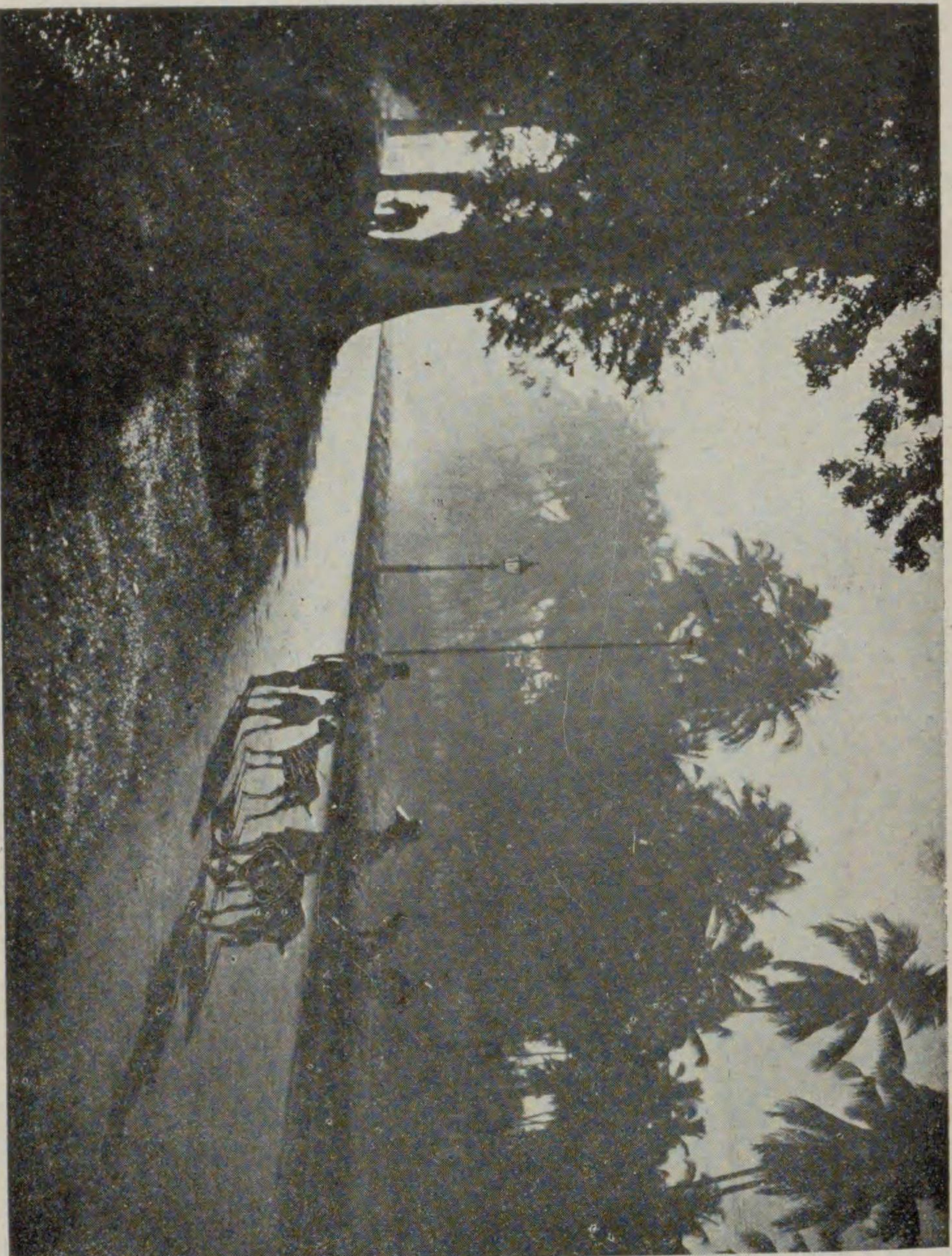
方彼は達娘や若い若の村はで方地ムラガバてつあで意のひ賑はソアマミラ ソアマミラ
 いし樂も最てつ取に等彼かれこゝる廻り踊り廻ひ歌に五おを(ソホソカ)落部の方此
るれば恐も山狂歌の本目



後の式擧でこそき行に院寺教回に緒一と嫁花らか家生の嫁花は婿花 俗風婚結の哇爪
 上哇爪ゝる乘に馬は婿花り乘に興たし施を飾装な麗華は嫁花ゝく歩りねを街り作を列行
 俗風婚結の流

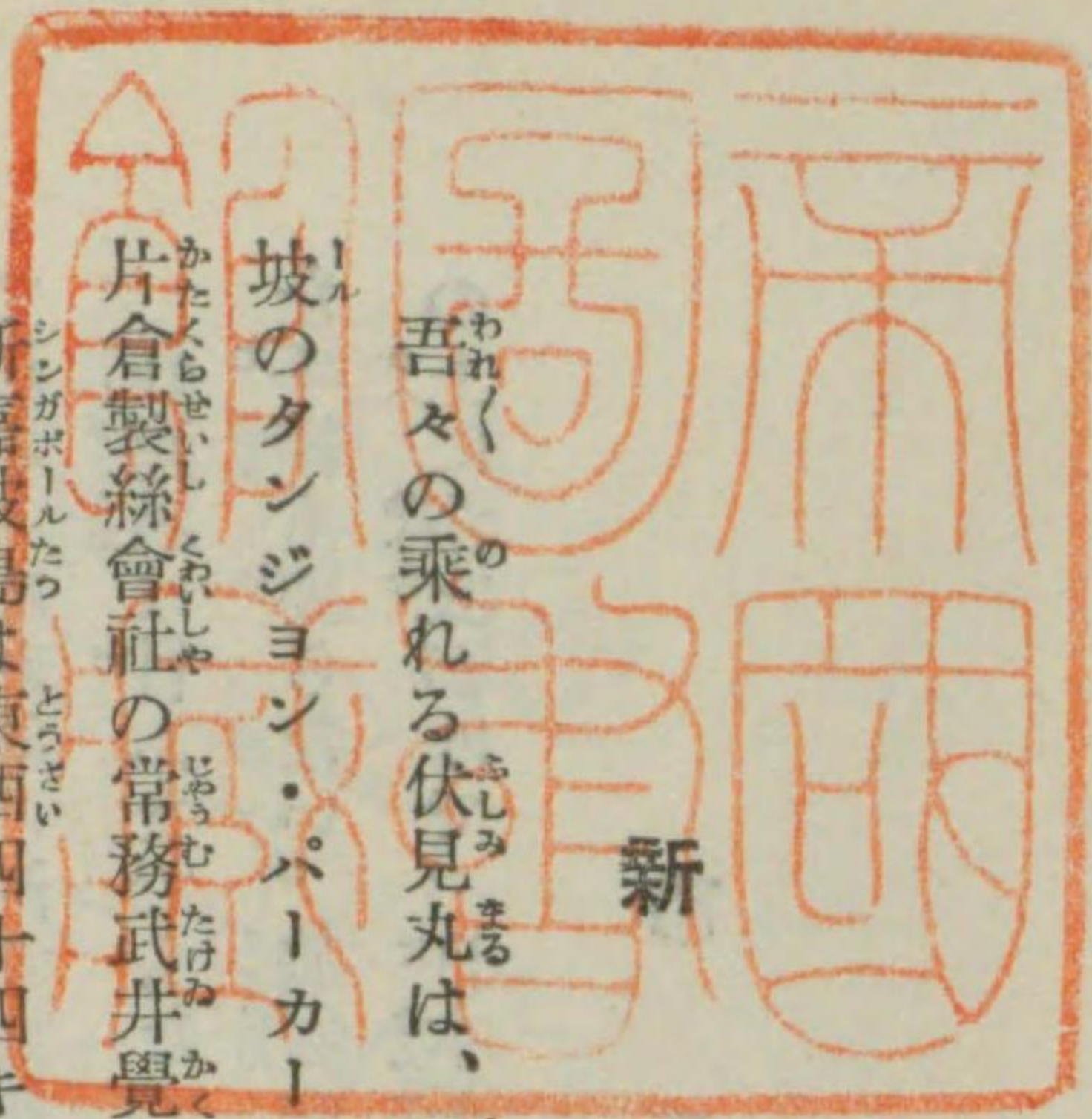


たるあでの始原が法方のそつ且くさ小が模規のそは業漁るけ於に哇爪 舟漁の人哇爪
 々年、で様有いなら至にす滿を要需の島全がるあはででのるふてれは行てしと業専、め
 るわてれさ入輪にん盛らかりたあ坡嘉新羅暹が類魚の類多



來出がとこふ味は分氣の明東はで洋南る上の陽太ぐ直ばれけ明が夜 朝の洋南な快爽
 バは眞寫、るせき洋清でま窓の頭は氣空な涼清てつ露に露朝も生芝も木樹の庭がいな
 るあでのものな表的代表の色景朝な和平のリサンノゲ街市新ヤビタ

新嘉坡



吾々の乗れる伏見丸は、神戸を發してから海路恙なく、十四日の航程を了へて、深碧湛ふ新嘉坡のタンジョン・パーカーの大埠頭に、その巨體を横たへた。時は昭和三年五月十日、吾々とは片倉製絲會社の常務武井覺太郎氏と、社員清水、蟹澤兩君との一行である。

新嘉坡島は東西四十四キロ、南北二十四キロの島である。いや、今ではジョホール陸橋で馬來半島と全く陸つゞきになつたので島とは言へないかも知れないが。島中に山らしいものはない。随つて香港やケープタウンやリオ・デ・ヂャネーロのやうに、山の上まで人家が層々累々建て列なつて居、夜になれば燈火星光相交錯して天地只燦爛たる光華につゝまるゝの壯觀はない。しかし港としては東洋第一と誇稱するだけの權威はある。

新嘉坡は東西の關門、亞細亞の中樞である。東亞南洋の物産は、一先づこゝに集まつて世界中にバラ撒かれ、又世界の貨物は一度こゝに集まつて東亞南洋に配分される。歐米、日本、支那、暹羅等各國の汽船會社は四十に餘る本店又は出張所を構えて、世界の果まで航海網を張つて居

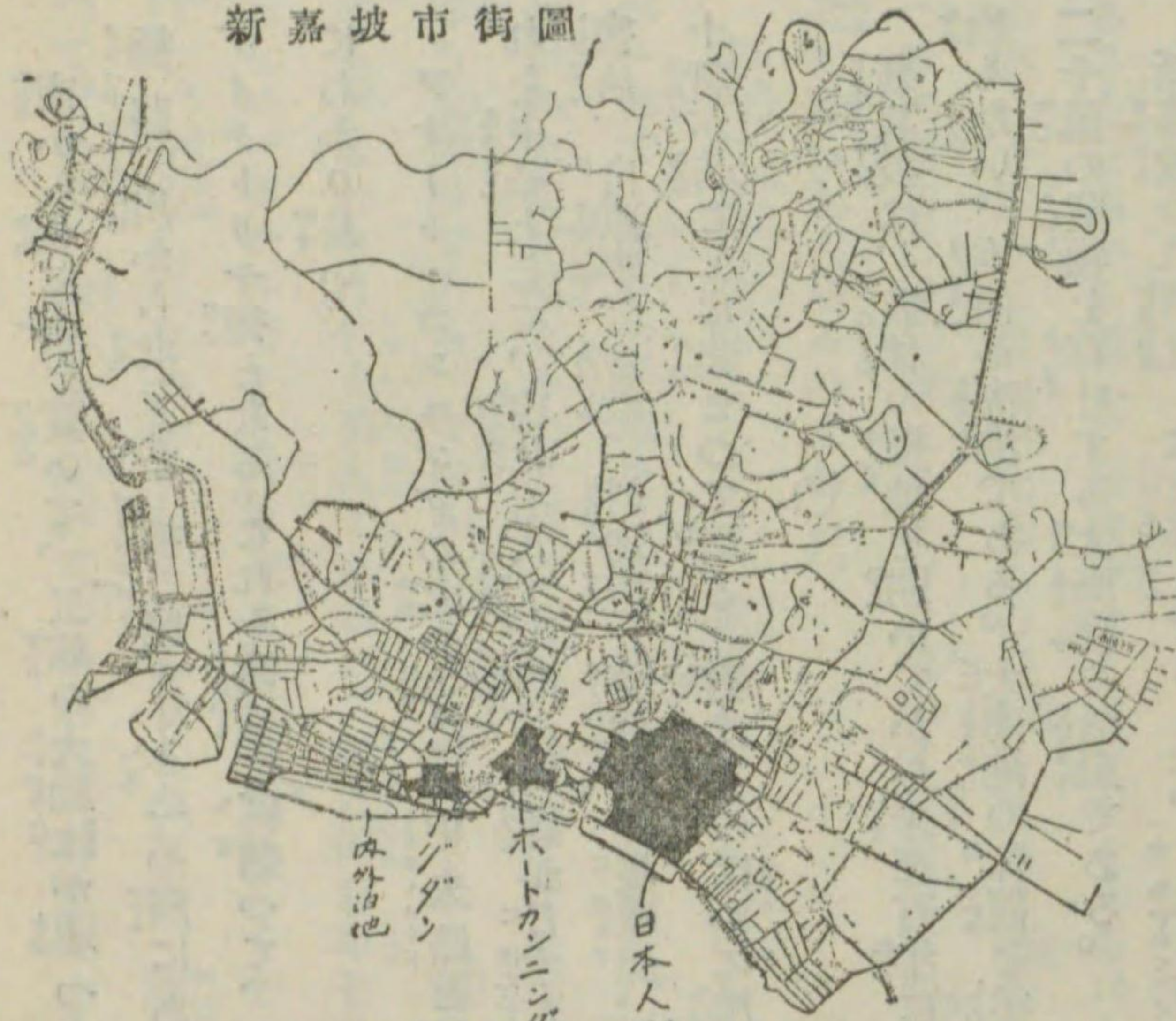
る。こゝからならば歐米は勿論、日本、支那、印度、暹羅、蘭領諸島等の近海航路も、自由に好きな船を選び得られる。今、一九二四年の海峡殖民地各港に出入した船舶数を観ると、總数が八万二千八百四十四隻、内商船が一万九千七百四隻で、英國が六千四百四十九隻、次は和蘭の三千八百隻次が日本の九百十二隻である。日本の海運も發展進歩したことを示して居る。

港の中は各種各様の型をもつた各國の汽船が櫂を列ねて居る。この間を獨木舟を漕ぎ廻つて居る黒人が、船の下に集まつて来て、片手をあげて錢を投げて呉れとせがむ。面白がつて白銅などを交る交る抛げる。黒人は海に飛び込んだかと思れば、浮み出して手には銀貨を高く差し上げて居る。これ等の河童は馬來半島のジャクンと云ふ土人ださうである。

新嘉坡は言ふまでもなく自由港である。随つて荷物に八ヶ間しい検査もなければ、上陸に面倒な手續も要らない。旅券の調べが終れば直に上陸が出来、二十分の後には邦人經營のホテルの疊の上に浴衣がけて、日本茶をすゝりながら視察の豫定を考へる身となる。

市の概観

新嘉坡市街圖



新嘉坡は市の中央を横断する新嘉坡川を挾んで、海岸に沿ふた南北六キロ、東西二キロの市街である。川の北岸のフォート・カンニングから海岸へかけての一廓が腦髓のあり場所だ、こゝには馬來の奥からボルネオの端まで號令をかける總督府がある。要塞、海軍司令部、圖書館、市役所皆こゝにある。川に沿ふて南にグランド——英語の GO DOWN の轉化——と稱する大銀行大會社の集團地がある。これが二十億の金を吞吐する言はゞ心臓にあたる場所である。日本人としてはこゝに帝國總領事館を始め、三井、三菱、臺灣、正金、大阪商船、日本郵船、及び諸商社が控えて居る。

南から北に市を貫いて、二筋の大動脈が通つて居る。東の動脈が橋路——川から南を南橋路、川から北を北橋路——今一つ西にある動脈は、川から南が新橋路、北へ行つてヴィクトリア街となる。これを縦横に區劃つて、略長方形の町がきまりよく出来て居るので、非常にわかり易い。

フォート・カンニングの北の方に、中央路と云ふのが、海岸から西にかけて通つて居る。これを中心として、南北七八丁の間の一廓が日本人の集團して居る街で、ホテル、寫眞業、雜貨、書店、自動車、會社、料理店、藥種屋、呉服屋、醫院、寺院、教會、小學校、新聞社、その他百何十軒が皆こゝに集まつて居る。猶ほこのほかに川に近い本街にもある。

新嘉坡は、叢林の蠻地を開いてから未だ百年にしかならない。随つて古雅典麗の歴史を語る何物もない。本領が商港である。大商港の偉觀を示すものは渺茫たる蒼海を埋むる大艦距舶であり二十億の貨物を吞吐する大商社の活動である。

新嘉坡の八割近くは支那人であるが、世界各国の人を包擁して居るから、人種展覽會場と云は

れる位で、念入れに數へた人の計算によると、人種の數が五十九で、その使用する言語が三十餘程あると云ふから驚く。印度族にもベンガリスもパーシスもタミールその他、いろいろあると云ふが、一度や二度聞いたところで判らない。同じやうに色の黒いのも、頭と腰に白い布をまきつけて居るのや、腰にサロンを捲いて顔に白い粉で筋をつけて居るのや、又頭の前を剃つて髪を長く垂らして居るのもある。

市内の交通機關としては、電車もあり人力車もあり馬車もあり自動車もある。辻自動車は五哩が一弗で、乗合自動車ならば五哩十五仙である。馬車に乗つて馬蹄憂々印度人の馭者に、馬の尻を叩かせて悠然とやつて居るのも、時代ばなれがして風流だが、最も多く利用されるのは人力車即ち東洋車である。女中が一寸買物に行くにも利用するが、ホテルや銀行會社の前至るところに居る。これらは皆支那人であるが、毎日街を車をひつて歩いて居て、街の名もろくに知らぬらしい。ホテルでよく行き先きを言ひ聞かしてやつても、黙つて居れば爪先の向いた方に走つて行く。安心してうつつかりして居らうものなら、海岸のどつちにも行けないやうな處迄車を引つぱつて行つて、後をふり向いてサテ何處へ行きませうか、と云ふやうな風をする。或人は彼等は頭

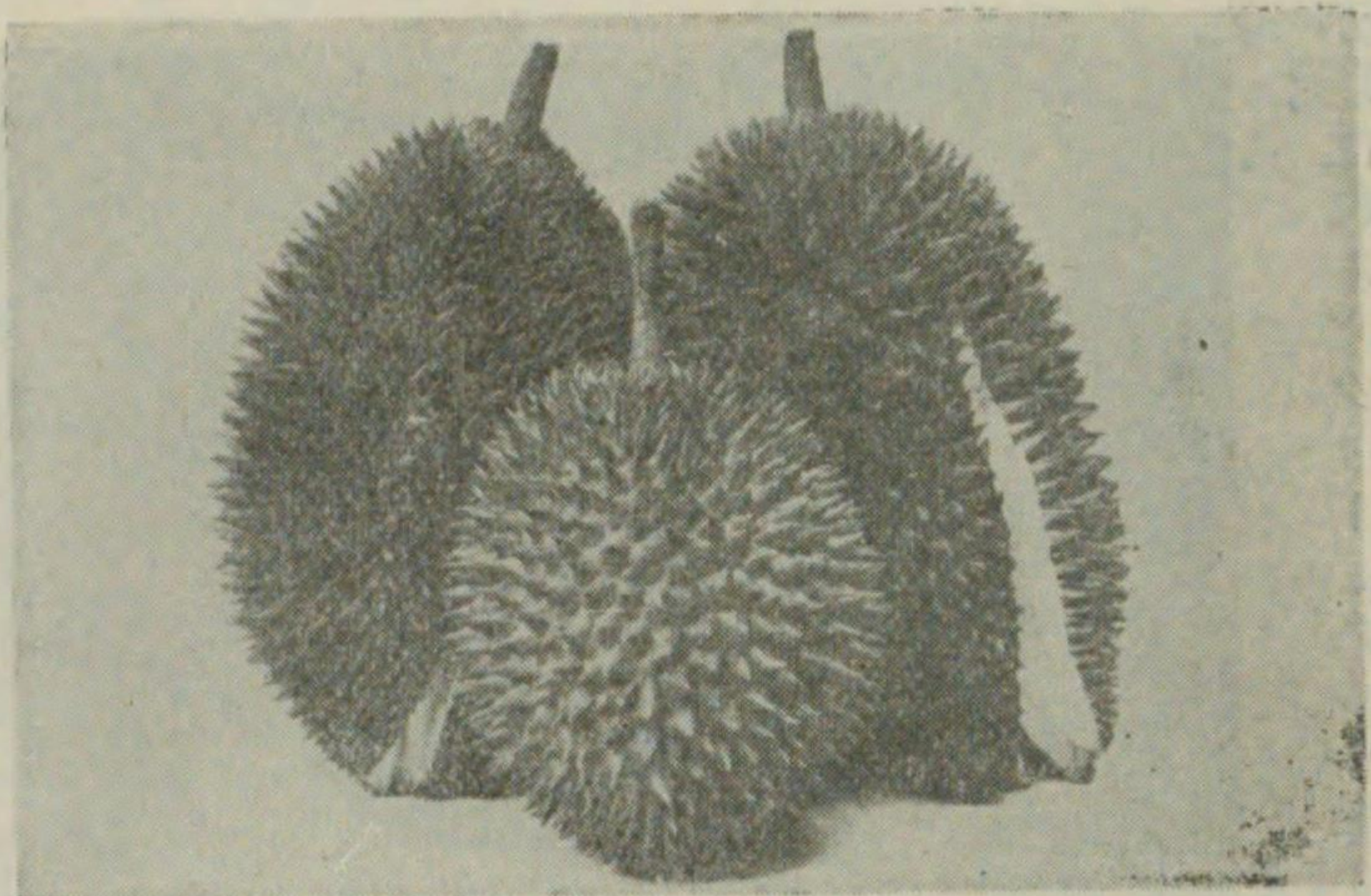
に胴體がついて居るのではなくて、脚の頂點に頭がのつかつて居るのだと言つたが、全くさうらしい。四辻に行つたときにオイとか何んとか聲をかける。一寸振りむくから、そこで黙つて右を指すと右に走る。これじやまるで牛馬だ。

それよりも一寸異様に感ずるのは印度人の交通係である。道路の真中に四五尺もあらうと云ふ細長い板を背負つて立つて居て、生まれ！進め！合圖に身體をグルリグルリと廻すのである。一寸馬鹿氣で居るが交通整理の成績は良いさうである。この牛馬性に富んだ支那勞働力を多數入れ、番人向きの印度人に守らせて、それで利權を收めて行くのが巧妙なる英國の統治策である。

赫々たる日は沈んで、電光全市を照すと、グダンの大商社街はひっそりとして、涼風を慕つて集まる人で海岸通は賑かになり、支那街は一日の汗から解放されて、眼に、耳に、口に慰安を求むる勞働者の群で賑ふ。活動寫眞はピーピー、ヂャンヂャンの響で喧しい。夜店が出る。大道の露店は半裸體に股引一ツの支那苦力の飲み食ひの歡樂場である。支那の藝人が歌をうたひ、樂器を鳴らして流してある。男女二人乗で俾が勢ひよく走る。講釋師が三國志でも語るか人だかりがして居る。

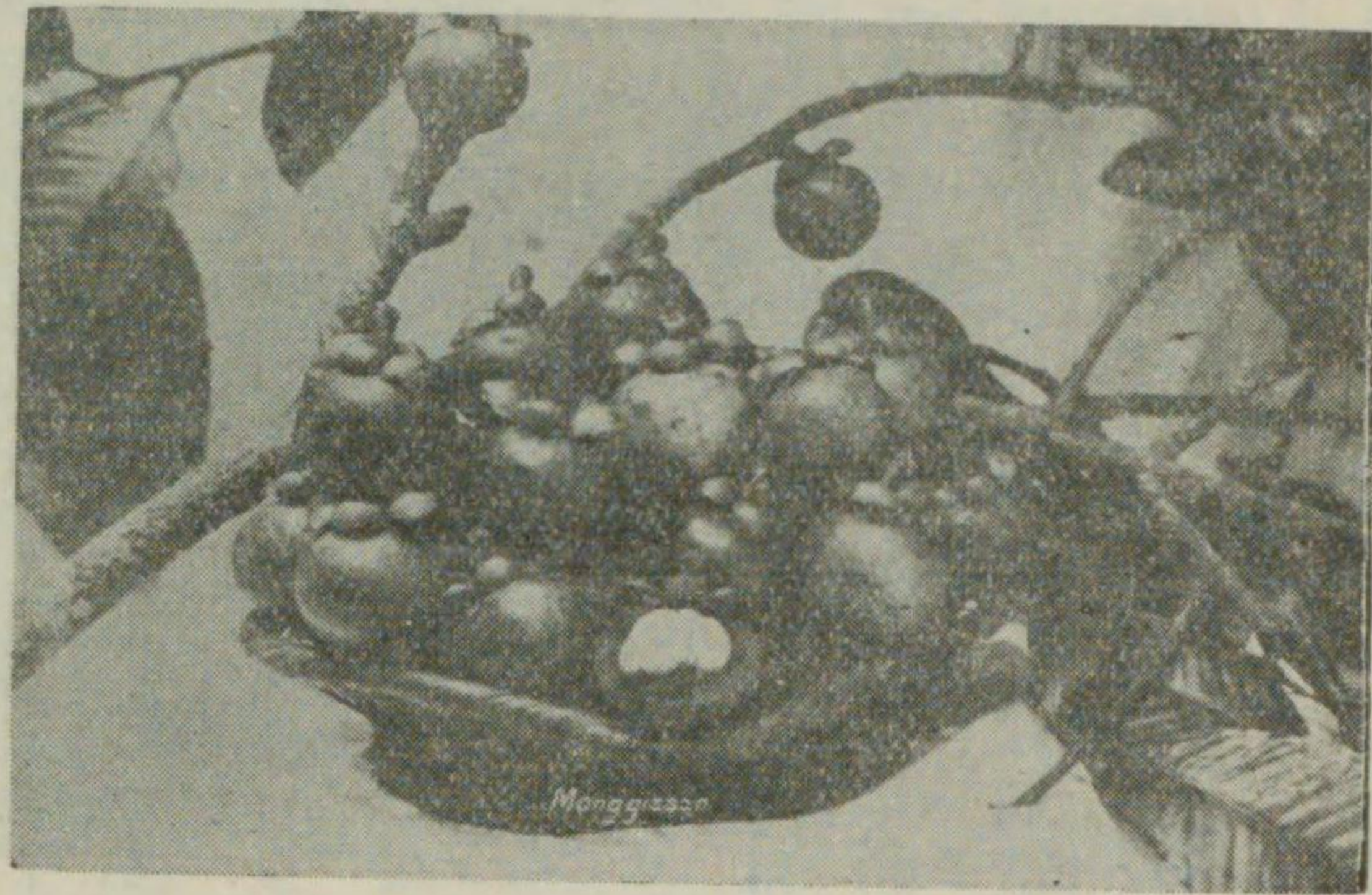
こゝは行樂地少なき新嘉坡としては有名になつて居る處である。

ドリヤン



新嘉坡に觀るべきものとして博物館があり、植物園がある。植物園は科學的に分類し配列したのでなくて、自然の風趣を失はぬやうに苦心し、猶原始時代の面影そのまゝの森林を保存したるなど、ゆかしいところがある。月明りに自動車を走らせ、沈香くゆる椰子林を突つ切つてタンジョン・カトンの海岸に出れば波うち際にテーブルを並べて涼味食味ともに味はひ得るシーピウホテルがあり、少し先きには、海上に張り出した日本座敷で、床下に波の音を聞きつゝ日本食を味はする邦人料理店もある。なほ十數哩、島の東端チャンギーまでドライブすれば、江の島氣分にひたり得る邦人經營の釣場がある。

マンゴステン



い肉が現はれる。クリームのような甘さとやゝ酸味とを持つて居て、實に美味だ。新嘉坡を通過

する船はマンゴステンを必ず食卓に上せる。ランボタンは深紅の柔かい刺状の外皮を持つた果物で、樹になつて居るのも美しいが、食器に盛つても實に美しい。これは観るべき果物で、食べては肉も少なく餘り甘くもない。サオは一寸柿に似た味のするものである。

日本人ホテル

新嘉坡で、正式に言へば日本人經營のホテルは、「ロツジングハウス」として許可されて居るのであつて、純然たるホテルではない。けれども、一流どころは決して、旅行者の體面云々に關はるものではなく、却て色々の便利がある。旅券を帳場に出して置けば入國出國の手續をして呉れる。また、浴衣がけで飯をたべたところで、何處からも苦情を持つて來ない。日本の新聞は綴つてあり、日本人の消息も直ぐわかる。買物なども安く確實な處を心配して呉れる。身體の具合でも悪い時は猶更、氣心の知れた醫者を聘んで氣樂にこゝで療治が出来る。第一双方共日本語でわかるので氣分がしつくり合ふ。何も外國人のホテルに小さくなつて、暑いのに衣紋を正し、ナプキンで口をふき、わからぬダンスを我慢して見て居らねば、紳士たる體面にかゝはると云ふ譯

でもあるまい。

吾々の泊つた東洋ホテルには、裏に新座敷も出来、疊の上で氣分を休めることが出来る。東洋ホテルの外に、海岸に面したビーチ・ロードには碩田館がある。それから、二三度泊つて居る知人を訪問したので識つて居るが都ホテルや日本ホテルなどがある。また、三笠ホテル、櫻ホテルとか云ふのもある。日本人ホテルでも三流どころになると、純粹の貸間である。

新嘉坡は赤道直下であるが、夜暑くて眠れないと云ふやうなことはない。夜が明けると定まつたやうに八十度にはなる。日中でも八十五六度が止まりである。雨季であると、午後二時か三時頃になれば天が曇つて、驟雨が沛然としてやつて来る。さうすると涼風が椰子の葉を揺がして涼氣は充ち亘る。日本に居て考へるやうに暑いものでは決してない。新嘉坡に永く居つた人は、却て日本の夏は暑くて堪らぬと云つて居る位である。

邦人の發展

眞如法親王

邦人の南洋發展を説くに當つては、千三百年の昔に於て、竹の園生の御身を以て、瘴烟蠻雨を犯し印度洋の波を踏破され、南洋に英骨を埋めさせられた眞如法親王の御事蹟をしのばねばならない。

眞如法親王は平城天皇の第二皇子で初め高岳親王といはれ一たび嵯峨天皇の皇太子に立たれたが、藤原仲成の亂に坐して位を廢せられ、後佛門に入り名を眞如法親王と改められた。法を求むべく入唐されたのが、貞觀四年であつた。唐に在ること二十年、普く名僧智識の門を叩いて修業され、蘊奥を究められた。この上は進んで天竺に至つて靈跡を探らるべく、大不退轉の大勇猛を以て決行されたのが八十餘歳の御高齡であつた。一笠一杖孤影單身、嘗ては九重の雲深きところに生ひ立ち給ひし御身を以て、絶域萬里の長途に就かれた。あるひは野に伏し山に寝ね、或は一島の孤舟を以て渺茫たる滄海を踏破され、千辛萬苦を重ねて、羅越國の流砂まで行かれたが、そこで御悼はしくも猛虎の毒牙にかゝつて薨去されたと云ふ。羅越國は今の佛領印度支那の暹羅に近き羅浮國と云はれて居つたが、最近の研究によれば、スマトラ島のパレンパンの對岸の地方であるとか。又今の新嘉坡であると云ふ説もあるが、兎に角千三百年以前に於て、京都から筑紫

に下向するさへ容易でなかつた時代に、八十餘歳の御高齡の御身を以て、この御壯舉を執行せられ、南溟萬里の邊土に日本民族としての第一足跡を印せられたことは、景仰感奮に堪へざる御偉業で、その御銳志は今日、海外に事を爲し南洋に志すものゝ牢記すべき事である。

日本甲螺と御朱印船

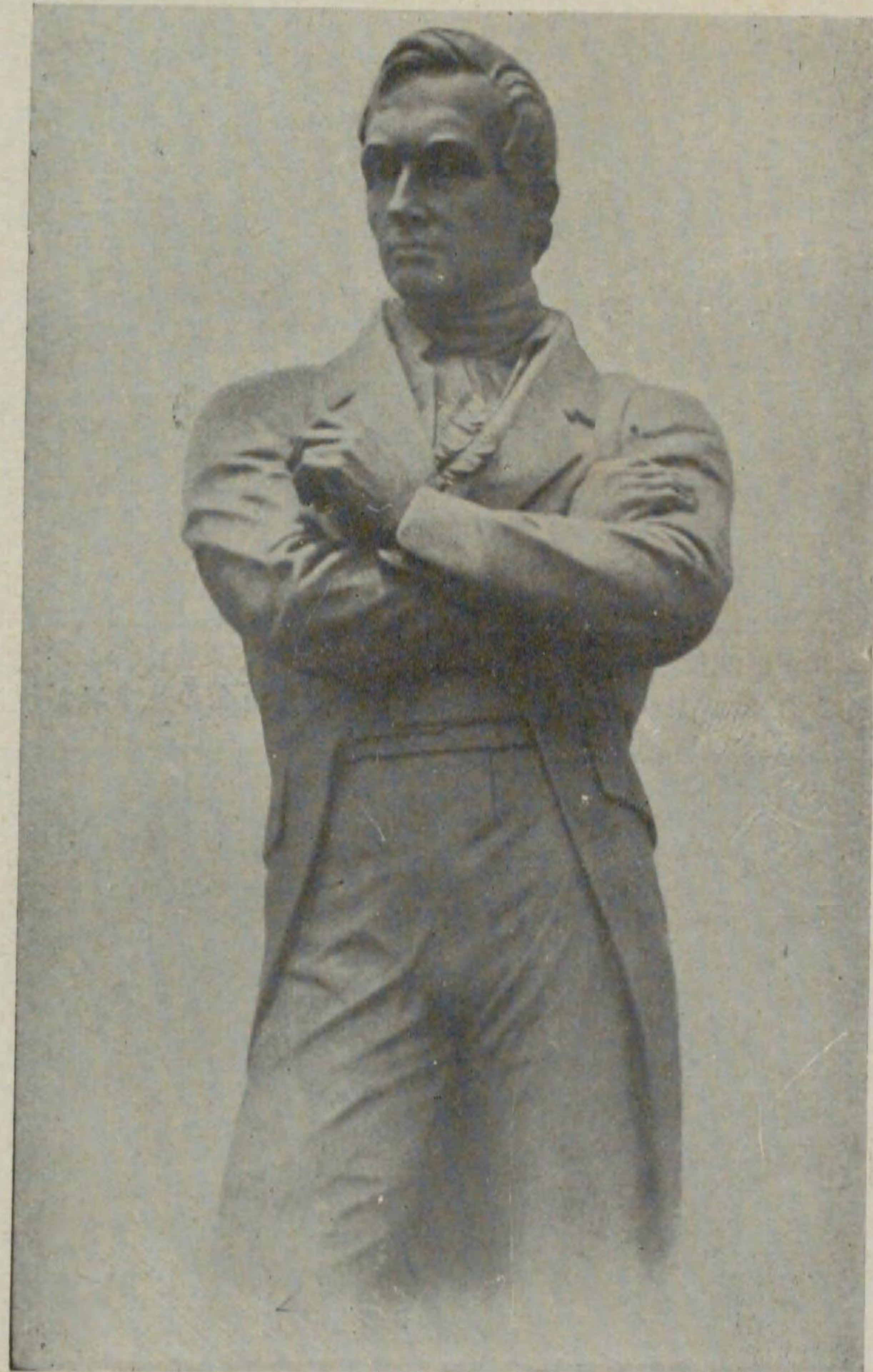
日本甲螺とは海賊のことである。支那や朝鮮で和寇と云ひ、八幡船と云ひ、南洋で日本甲螺と云ふも、同じ系統のものである。一口に海賊と云へば、みな官の眼を掠めて海上で擄掠を事とするものを言ふやうであるが、當時海賊とは官より公然免許された海軍と云ふほどの名であつた。海賊の總取締は伊豫の河野の一族、能島、來島、因島の村上であつた。能島村上は本家である古い記録に「細川頼之和漢の親和を亂ることを恐れ、能島村上海賊棟梁たることを定め云々」とあるのがこれであつた。戦功によつて朝廷からは代々海内將軍を名乗ることを許された、九州薩摩の坊の津から西國一圓、瀬戸内海、紀州、四國の海賊總取締を命ぜられた。邊海の警備も、南洋發展も、侵掠も海賊衆の活動であつた。海外のみならず國內に於ても、中國筋では海賊衆の力によらなければ覇をなす譯にゆかなかつたのである。



でンダグは地團集の社會大地心中の業商るけ於に坡嘉新 ンダグ
。るあで所場るたあに臟心ばは言るす吐吞を金の億十二がれこ



のひ食み飲の力苦那支のつー引股に體裸半は店露のり通大 店露
。くるあてしら鳴を器樂ひたうを歌が人藝の人那支るあで場樂歡



グンアはスルフツラ・ドーホンタス・ーサ 卿スルフツラ
國祖の彼、るあで兒血熱的表代るめ生の族民ソクサロ
の火烈熱りなと眼炯るすふ曠を古千てし發は情熱ふ思を
るあでのたつなと心猛勇大の撓不折百りなと論言き如

翠巒四周、白帆浮遊し、海鷗戯る、瀬戸内海を中心とした活動が、やがて一波万波をおこして、南洋に於て貿易の先驅となり、印度の三角波よりも恐れられた日本甲螺となり、波瀾萬丈の活劇を演じたのであるから面白い。

今簡單にその経路を述べて観ると、長門の浦一里許りの海上に兵船三千餘艘を浮べた源平最後の激戦は昔語りとなつて、海戦としては眼ざましいことはなかつた。が、こゝへ晴天の霹靂とも謂ふべき蒙古襲來の大爆音が來た。そこで、國內に跼蹐して居た小さな根性から始めて強大なる海外の大國と云ふことに頭が向けられた。始めてその聲を聞いたときから元の大軍の敗滅まで十六年の長い間であつた。わが國民は始めて國民的自覺に奮ひ立つた。茫々たる蒼海を乗り切つて來る大艦巨船に刺撃されて、我が海軍も——海賊衆——こゝに造船術に苦心したのは當然のことであつた。

永い不安は實にあつて無く取りのぞかれた。これが一大動機となつて對外敵愾の氣が勃發し、貿易の思想も喚起され、殊に士氣は四百餘州も何も眼中にないまでに振ひ立つて來た。折しも世は南北朝となり統制する主權がない。こゝに於て雄心勃勃たる輩、志を當世に得ざるの徒、海軍

で何かやつて見たくて堪らぬ連中は、手近かな高麗に向つて進出することになった。

そこで朝鮮では高麗の忠定王二年、日本で云へば後村上天皇の正平五年から、四十一年の間、中二年侵掠がなかつただけであつた。甚だしきは一ヶ年に二十三次の輩の侵掠を受けたのである。和寇には人数から言へば百人足らずの少人数もあつたが五百艘と云ふ大部隊もあつた。官米の倉庫を占領するとか、官の運送船を奪略するのがその目的であつた。

朝鮮八道のうち、やゝ小康を得たのは、咸鏡北道位のものであると云ふから、和寇は朝鮮全道を長年月に亘つて震駭させた譯である。

高麗朝は和寇の爲めに遂に滅亡した。こゝで考へて見ねばならぬことは殆ど四十年に亘つて朝鮮に侵入し、大部隊の時は二万人以上も攻め込み、朝鮮八道殆ど侵さざる處なき勢ひであつたのであるが、彼等は米穀金銀を得れば満足して居たので領土的植民的には何の考へもなく、又一定した統制のある經綸の方策ではなかつたことである。もしこの際かう云ふ考へがあつたら、後世、秀吉の朝鮮征伐も不要であり、又日韓合邦の手段も要らなかつた譯であるが、これは、獨り朝鮮のみならず南洋まで行つても、大活動の割に後に残るものがなかつた所以である。

この眞の要求を看破したのが李朝である。李朝は和寇對待策を講じて、和寇親方には官職を授け、中には宣略將軍など、云ふのを授けた。又、官邸も給し西國、中國、紀淡の海城王には貿易を許すやうにした。それで朝鮮は漸く穩かになつた。

朝鮮に於ける和寇が穩かになると、それが支那に向つた。足利時代には、度々支那から禁寇のことを交渉して來た。が、何等の効果もなく、その勢ひは益々猛烈となつて、明朝の末になつてはその極點に達した。

和寇が日本を出るときは、平戸を出發點とする。その時々々の風向きで、琉球から臺灣に向ひ、臺灣を足場として廣東、福州に向かふのもあれば、又、一路直に上海に向かひ、その南に行くのもあり、又遼陽天津に船を走らすのもあつた。

普通の平底の商船ならば平戸から寧波まで三月もかゝつた航海も彼等の用ゐた新型の輕舟ならば、複底尖軸、進水力が強くて、横風でも逆風でも構はぬので、十數日で往つてしまふ。これに、命知らずの荒くれ男が乗り込むのであるから、その活動は、實に素晴らしいものがあつたに相違ない。飲料水としては煮沸したる水——腐敗せざる用意に——を各人約八百碗の割で携帯した目的地

に達すれば、その附近の濱邊か、又は島を根據地として情勢偵察をした。それから、富豪を襲つて金穀を奪ひそれを貧民や浮浪の輩に分散して大活動を開始した。かくして楊子江も錢塘江も、又、臺州灣も山東省も、浙江省も廣東省も、蘇江省も高砂も澎湖島も南北一帯、防禦の策もなく競々として、氣沮み、膽落ち、風を望みて逃竄し、人烟蕭條、産業荒廢するに至つた。明人をして國家の患、南倭北虜と曰はしめ、不征の國と畏れしめたのであつた。

秀吉が天下を統一するや嚴重に和寇を取り締り、家康に至つて益々嚴重になつたので、支那沿岸に出沒することが出来なくなつた。しかし、志を海内に得ざるの徒は、震天動地の新活動地を求むる爲めに更に南へ南へと進んだ、臺灣、比律賓、安南、交趾、暹羅、セレベスとニューギニアとの間、ボルネオ、馬來、印度までも押しまわし、日本甲螺の驍名を馳するに至つた。

何處の國でも初めの間は貿易船は海賊船に、海賊船は貿易船に早變りをしたものであつた。貿易の利も大であつたが危険率も多かつた。家康の命によつて長崎奉行が船頭久兵衛を機關士の外人を備つて占域に名香を求むる爲に派遣したが、この船が阿媽港まで行つたとき、旅館で船長以下殺されて貨物はみなとられたことがあつた。機關士だけは免れてこれを奉行に報告した。家康が

これを聞いて大に怒つて長崎奉行と有馬侯に命じて、征伐に行く準備中、貨物を奪つた連中がづら／＼しくも長崎へ乗り込んで来た。そこで船長を喚んだところが来ない。あべこべに發砲して逃げようとしたので、こゝに大激闘が開始されて賊船は爆破され、一船二百人皆粉碎されたやうな事件もあつた。

これは支那人のみではない。英國も蘭人も皆やつたのである。慶長九年に英船タイガー號がバングラで支那風の帆船が通るのを見たので、直ぐ追ひかけて行つて貨物を奪ふべく船内に闖入した。ところが支那船ではあつたが乗つて居たのは日本甲螺であつた。日本甲螺はあべこべに英船を奪はうとした、亂闘の結果英船長以下数名は死んだが、先方は二百四十噸の船で、こちらは七十噸の船であつたし、先方は手に手に鐵砲を持つて居たので日本甲螺の敗けであつた。

かう云ふ譯で奪はずんば奪はれ、撃たざれば撃たれるのであるから、甲螺の慄悍死を恐れざる徒があつたので、貿易の道もつき御朱印船も無事に貿易が出来たのである。

この頃の貿易商は、かう云ふ氣運の中で命がけの仕事をやつて居つたので、剛膽で、抱負は雄偉、海外の智識に於ては第一人者で、秀吉始め諸侯もその智識をかりなければ方策がつかなくかつ

た位である。就中博多の富豪島井宗室の如きは、朝鮮にも支那にも暹羅にも、呂宋にも支店を持つて居、諸侯の軍用金の調達もして大した勢力があつた。和寇の取締りをして和寇の大本山であつた秀吉の朝鮮征伐は、宗室自ら朝鮮の北境まで探査した報告の結果であつた。なほ博多の貿易商には神谷宗湛があつた。これは諸侯伯と交はりを結んで居た。福岡の櫛の實から蠟をとること、鑛山、度量衡、博多織、博多素麵、博多綱苧、とか藩の銀會仕の制度も宗湛の創意であると云ふ。

秀吉の大明征伐をやめて比律賓の征伐を畫策した戰國の策士原田孫七郎も商人であつた。

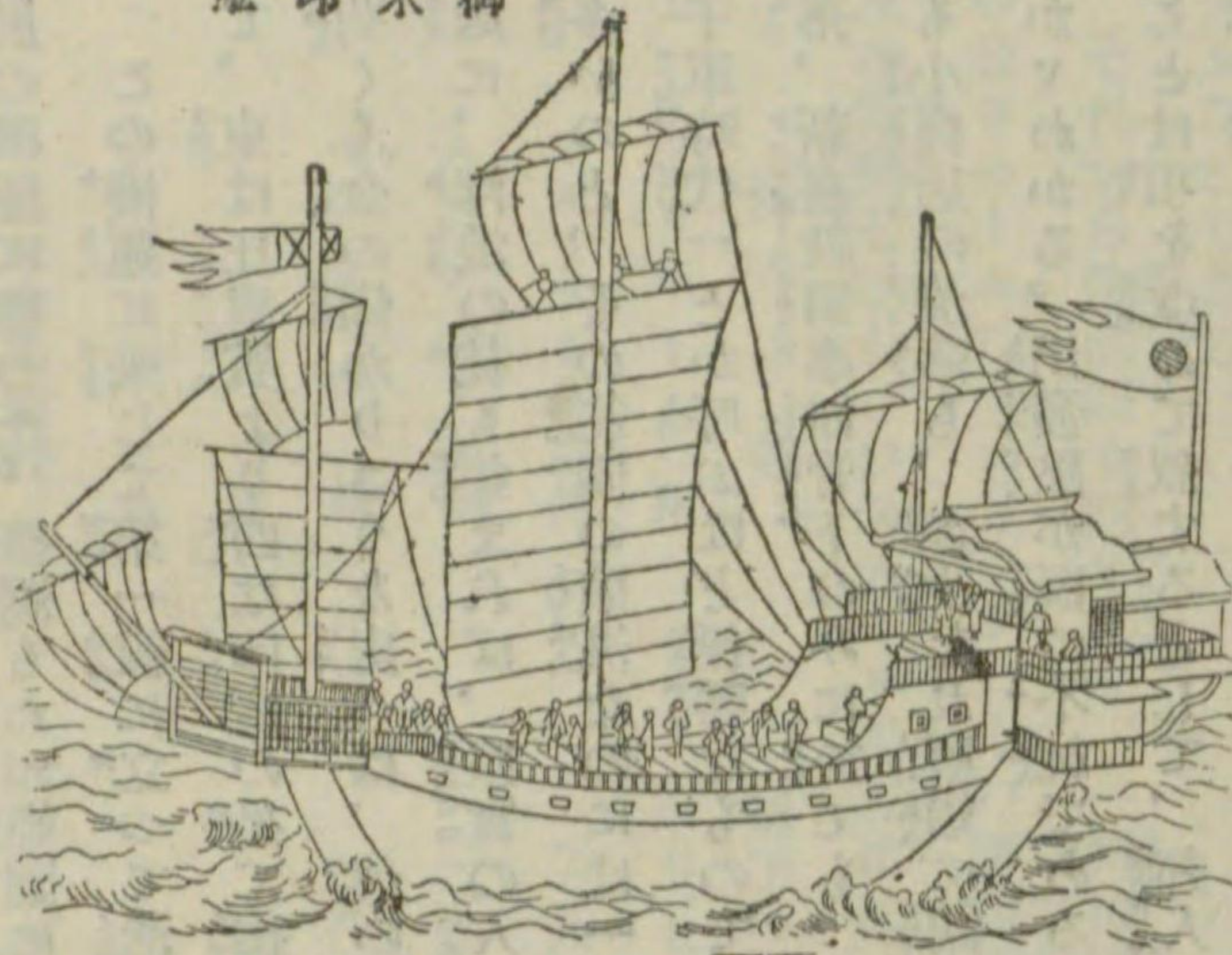
呂宋助左衛門などは、堺の商人だが、同勢を連れて呂宋に行つたのであるが、始めから貿易のつもりではなかつた。戰爭に行つたのである。

京屋隨右衛門は二十四回も南洋に渡航したと云ふ南洋通だから、板倉重政にすゝめて弓銃砲二千挺の用意をして呂宋に進發した。

貿易商の富と、海賊の船の操縦術と、天正から大阪、關ヶ原の殘黨の強勇と、切支丹の一派と加はつて大活動となつた。

臺灣に、呂宋に、安南に、暹羅に至るところ日本町をつくつた。

御朱印船



かくして世は益々平和の貿易に發展して來た。御朱印船によつて南洋貿易は、前古未曾有の盛況を示すに至つたのである。

新嘉坡に於ける邦人の發展

明治四年に新嘉坡に日本人が一人居つたと云ふが、商店としては、中川商店が明治十八年に食糧品や呉服の店を開いたのが、一番の元祖であらう。それから、明治二十二年に帝國領事館が設けられ、二十六年に三井物産が支店を出し、二十七年には乙宗商店が輸出入商として現はれた。この外に澁谷と云ふ雜貨店もあつたと云ふことである。また、この頃、神戸あたりに居た支那人で米屋と云ふ屋號を持つた男が、始めて人力車を輸入したと云ふ説もある。

しかし、兎に角日清戰爭前は寧ろたるものであつたが、かれこれするうちに日清戰爭が始まつ

た。連戦連勝のうち終局を告げて、始めて世界の人々も日本を識り、日本も猛然として海外發展の機運に嚮つた。臺灣もわが範圍に歸し、南方に向つて羽翼を伸ばすの勢ひになつて來た。

この機運に乗じて第一線に立つて活躍し出したのは娘子軍である。彼等は新嘉坡を中心として、東は比律賓より西は印度の果て迄も急激に發展した。如何なる南蠻邊土の土地といへども、苟くも金の儲かりさうな處へは、何の恐れもなく進發して根據を据えた。これ等娘子軍の行く處に、浮浪の徒も集まれば、堅實の人も行き、幾分づゝそこに日本人の集團が出來た。その數の多いのと、その範圍の廣汎なものには一驚の外はない。この時代を「長崎新嘉坡の時代」とか、「娘子軍時代」とか呼ぶほど優勢なものであつた。が後年廢娼問題と護謨不況とカチ合つて、慘敗没落、新嘉坡領事館管下のみに於ても、約四千の人口が激減した。そして、金融組合のつぶれたのも小商店の没落も、多少なれ廢娼に關係あるを見ると、如何にその經濟的根據に喰ひ込んで居たかどわかる。出發點が既に不純である以上、事ここに至るのは免れない運命であつた。娘子軍のことは項を改めて叙するとして、邦人の眞の活躍は日露戦後であつた。この時は日本の實力も世界に認められ、國光は揚がり、國民も衝天の意氣であつた。日露戦争後は特に「護謨全勢時代」

と云ふを現出した。邦人で最初に護謨に指を染めたのはネグリスミランの笠直次郎氏であつたと云ふことである。

それから明治四十四年迄は、一齊に護謨園に向つて殺到した。先づ、明治三十九年に三五公司のシヨホールベンガランの今の護謨園八千三百英反の拂下げを手始めとして、簇々護謨に向ひ左の優勢を示し、シヨホール沿岸には、日本村が出現するに至つた程である。(單位英反)

州名	拂下總面積	植付面積	經營者數
シヨホール州	七七、七三〇	一一、九八五	五〇
ネグリスミラン州	二、八四五	一、七六八	二九
スランゴール州	一、四二〇	八八〇	二五
ペラメ州	一、〇五五	四八〇	一四
ケダ州	四五〇	二二〇	一
シンガポール島	二五〇	一一〇	四
馬來半島總計	八二、八二〇	一六、四五三	

護謨の價は明治四十三年には、最高値の一封と二志九片を唱へた。われもわれもと護謨に熱中した。經營者の中には女の名前も大分ある。護謨は段々下向きにはなつた。が、苟くも護謨園を持たざれば人の前で大きい顔も出来ないと言ふ状態で押し進んだ。

そのうちに、大正三年の歐洲大戦亂となつた。獨逸の潜航艇は跳梁し、東西の交通は杜絶し、英人は母國の安危に心を痛め、不安の日を僅に同盟國の日本の力を頼みにして送つた。英人の意氣銷沈に引きかへて、邦人は得意の絶頂であつた。こゝに「邦商活躍時代」と云ふのが現出したのである。日本人の商店が雨後の筈のやうに出来、日本の商品は飛ぶやうに賣れた。花柳界に大杯を傾けてメートルを擧げて居る間に、ドン／＼儲かつて行つた。新しいトコ(商店)の開店と、新しい料理店の開業が續いた。南洋日々新聞が創刊されたのはこの歳で、新嘉坡日本人會の出来たのは四年の七月であつた。護謨も下がつたとは云ふものゝ猶大正五年には最高四志二片二分の一を保つて居た。

銀行會社の重なるもの、三井、三菱、正金、臺灣、華南、郵船、大阪商船、千田、山下、乙宗、東亞、増田、河原、日蘭、茂木、南洋貿易、加藤、石原、三榮、永見、村田、間瀬田、富士、久

原、潮谷、三公などは堂々たる陣容を張つた。料理店二十に餘り、藝妓舞子五十三名、この外に幾百の賣春婦の居つたのは勿論である。新嘉坡領事館管下に、邦人在留者實數約一万人は居つたのであるから、數より言へばまさに全盛時代であつたのだ。

しかし好事魔多く、好況の影に幾多の事件も起きた。大正五年、二十一箇條問題で、支那人からは激烈な日貨排斥をやらせ、大正八年には青島還附問題で、排日を受けて少からざる打撃を被つた。が、大局から觀れば何でもなく、大體好調に進展した。好景氣に有頂天になつて居た大正六年に、晴天の霹靂とも言ふべき、馬來ペラ州の「土地拂下禁止」と云ふことが發表された。護謨栽培者には一大痛棒であつた。そこで、領事館を始め栽培協會の諸氏が、焦氣となつて日夜奔走したのであつたが、如何ともすることは出来なかつたのである。次いで、ペラ州のみならず馬來半島全部に亘つて、英本國殖民大臣より海峽殖民地總督に訓令して來た。その要旨は

海峽植民地、馬來聯邦州、及びその他馬來保護州を通じて五十英反以上の土地拂下出願に對しては、一時その拂下を禁止すべし。

と云ふのである。次いでそれは拂下禁止のみでなく、又賣買禁止をも敢行することになつた。是に於て、わが邦人は同盟國の情誼までもかつぎ出して抗議を申込み、猛烈なる反對氣勢を揚げたのであつた。が、これは單に日本ばかりではなく、各國共一様の取扱ひであるとのことで、如何とも致し方なく、そのまゝ泣き寝入りの形となつてしまつた。

大正九年の一月、各地の日本人會長が集つた時、山崎總領事から、本年十月を以て廢娼を斷行することの話があつて、それを決行することになつた。大戦勃發の年(大正三年)藤井領事は、紅裙根絶の前提として、既に嬪夫放逐を敢行して居たが、もうこの頃は堅實なわが邦商が漸次勢力を張るに至つたので、これまで浮浪の輩の不健全分子が跋扈して居つた頃には、言ふべくして行はれなかつた事柄が、論議され劃策され實行さるゝやうになつた。時勢の進展である。で、愈々大正九年十月から廢娼斷行することになつたのである。邦人も實質に於て向上し、堅實の分子が大多數となり、正に一大進境を示したことが肯かれる。従前、軍艦の歡迎も母國の大典の祝賀も、この輩の力をかりねば出来なかつた時とは隔世の感ありと云はねばならない。世界大戰が終つて、平和が克復さるゝや、不景氣の風は世界的に吹き捲くつて、好況の絶頂か

ら不景氣の奈落の底につき落された。日本の實業家の名あるものも没落を告げ、人心恟々たる時で、好景氣に進出した新天地に於ては、その打撃は一層甚だしかつた。多少の儲けた金は護謨園に投じ、金借までしてそれを擴張したのに、護謨は十年十一年と暴落し、一ポンド二十仙臺とまでなつて、最早苦力賃も出ないやうになつた。

恰もこの時、廢娼によつて金融の途は杜絶し、金融機關たる頼母子講はゴタ／＼の間に整理がつかなくなり、慘敗、没落、倒壊相ついで、折角光明を見出した南洋發展も、前途暗澹となり、五里霧中に彷徨することゝなつた。

永い不況に多くの小園は、持ち堪へが出来なくなり、大園も随分苦心を嘗め、低利資金或は合同と種々の救済策は講ぜられた。かくして節落さるべきものは節落され、堅實なるものはどうにか切り抜け、精練されて來た。大正十二年の末から幾分景氣づいた護謨の價は、十三年の末には六十四仙臺の高値を叫び、十四年に至つては更に暴騰し、七月には一弗七十三仙に高飛して、年末には一弗八十二仙迄も唱へるに至つた。が、この好景氣に於て、これ迄漸く持ち耐へて居た護謨園を手放すものが出来て來た。

主要園賣却總計 (租借總面積) 七〇、四九三 (植付面積) 三〇、五四五 (生産面積) 二〇、六三一 (單位エーカー)

新嘉坡の邦人はこれ等に對しては、邦人の一肢一足をもがれるやうな氣がして、悲しみもし憤慨もした。又資本家の功利心の衝動のみによつて動かされる海外發展の慘めさを痛感した。果ては國賊と迄も痛憤したのもあつたが、背に腹はかへられぬ立場で、中にも日東護謨の如き支配人の苦諫も何も顧みず賣り飛ばすや、護謨の値が高騰し、株主の憤懣痛恨絶頂に達して、紛亂を重ねたやうな悲劇もあつた。

人口の上からの邦人の發展を見ると、

在新嘉坡總領事館管内邦人數

年 度	内地人		朝鮮人		臺灣籍民		總計
	新嘉坡	其他	新嘉坡	其他	新嘉坡	其他	
大正九年	男 二、四〇九 女 一、一五二	男 二、四六八 女 二、二四九	男 〇二 女 〇〇	男 一五 女 三五	男 二五〇 女 二五〇	男 一八 女 一七	男 八、五四八 女 二、四〇九
大正十二年	男 一、四五三 女 一、〇〇八	男 四、七一七 女 一、四四九	男 〇六 女 〇二	男 〇 女 〇	男 一七 女 二四	男 一七 女 二四	男 一、四五三 女 一、〇〇八

年 度	合計		合計	
	男	女	男	女
大正十五年	二、四六一	二、九五三	一六	二
合計	一、七八〇	二、三一六	二一	二
	一、一三一	二、四〇一	二	〇六
	二、九〇一	四、七一七	二三	六
			七二	九二
			七、八一	七、八一

以上は表面に表はれた數で、好況時代の大正七八年頃は、新嘉坡の邦人實數五千と言はれ、半島その他でも五千と唱へられ實數一萬も居つたのが、一時總數五千五百となり事實上半減された。が、漸次堅實の發展となつて増加して來て居る。

今は堅實の分子のみが、着々として各々その向上發展に努力しつゝある。

日本商品と邦商

世界大戰に於て、歐洲列強が大戦に没頭して居る間に、わが邦商が活躍して地盤を築き上げたが、戦後の不況に遭つて木ツ葉微塵に吹き飛ばされたのは前述の如くであるが、前古未曾有の好況時代とは言へ、これを數字上より見れば、大正七年の最高レコードと雖も輸入——日本から

のが——四千四百五十万弗餘、輸出二千五百六十万弗、總計七千万弗に過ぎなかつた。英領馬來の貿易總額十億弗に比ぶれば、僅にその七パーセントである。歐洲は國を擧げて戦争の渦中に没頭せる時に於てさへ、この奮闘をつゞけて來たのであつた。

戦後に於ては米國が擡頭し來りて、一九二五年(大正十四年)に、貿易總額二十三億弗に達し、その内米國が六億八千三百万弗、英國が三億一千百万弗、わが國は僅に六千五百万弗で、總額の三分である。

日本からの輸入品で百万弗以上のものは、第一に綿織物、第二陶磁器、第三モミ及ベニヤ其他の箱、第四乾魚及鹽魚、第五石炭、第六絹織物、第七燐寸、第八肌衣類の八種である。次に、百万弗以下五十万弗以上のものは、硝子製品、珓瑯鐵器、自轉車附屬品、玩具の四種で、五十万弗以下、十萬弗以上のものは大約左の三十種である。

- 麥粉、寒天、糖菓類、罐詰類、其他食料品、ビール、荒物、時計
- ランプ、蓆類、燈心類、洋傘、裝身具、香水香油、家庭用綿製品

日本への輸出品は、パラ護謨、錫、鐵礦、石油、燐礦、ガンリン、籐、高瀬貝、ガンピヤ、チゴ粉、珈琲等がその重なるものである。

戦後日本品の輸入の激減したのは、歐商の活躍にもよるが、主たる原因は、戦争中に急に賣れ口がよくなつたので、例の粗製濫造を盛んにやり出した。買ふものは小言を言ひ乍らも仕方なしに買はざるを得なかつた。それが、歐洲品が復舊したので粗製品が大分崇りをなしたので云ふので、これが信用を高めるべく、名譽恢復の爲めに、或はバザーを開いて優良品の宣傳に力めたり、優良品の宣傳紹介を試みたり、又外國品との對比をして、製造家や商業團體又は政府當局に配附して覺醒を促したりして、大に努力して居る。

領事館の發表によれば、本邦商品に對する非難の大部分は、見本と現荷の相違乃至永き期間にだん／＼品質が落ちると云ふ點である。次には積附、荷造、積荷證書等に關する鬆漏なる點である。

主として注意を要することは、一年一回と云ふ風に、定期的に在荷過多を來たし、工場の經營

困難とか、品質低下とか、あらゆる損失弊害が伴つて来るので、海外各市場に於ける各商品の需要総額並に自己取引先の販賣能力を出来る限り明確に知り置く必要がある。けれども、現在では本邦商品の輸出に一手取引の風なく概して自由取引であること、製造家側に海外視察、取引先巡廻の風がないから、明確に知ると云ふことは困難である。

小學校と醫院

移住地に於て、何處に限らず最も心を苦しむるものは、子供の教育と醫者の問題とである。新嘉坡には立派な日本人小學校がある。

新嘉坡日本小學校は大正二年の二月十一日紀元節の佳辰を以て創立された。在留邦人會の經營で、基本金一万五千弗を有して居り、總領事が監督官である。毎年國庫補助金を受けてゐる。校地面積四百九十七坪、校舍敷地百四十五坪、兒童は尋常科高等科幼稚園を通じて二百二十二名、猶隣接地八千平方呎、建物附のまゝ四万弗で買入れたので、當分收容上には差支ない。教員は専門囑託共十人であるが、英語には邦人の教師と、英人と各一名居る。校具も整備し机

腰掛にしても、身長によつて螺旋の仕掛で自由に調節するやうに出来て居るなど、周到な注意が拂はれてある。

夜學校も開いて、商家子弟の爲めに實業教育も施して居る。

小學校附屬寄宿舎は、今上陛下御成婚記念事業として、大正十四年四月一日に新設された。馬來半島や、蘭領各地の日本人から資金を募つて銀一万二千七百弗を得、これに新嘉坡日本人會の基金から六千五百弗を加へて建設することになつた。寄宿生四十名内外の收容は出来る。舎費として月額二十弗を徴して居る。

新嘉坡日本少年團は大正十四年三月二十五日結團式を舉行した。日本人會の經營で、理事者は日本人會長、團長は小學校長である。團員はボーイスカウトの精神に基いて、義勇奉公、社會奉仕の修養鍛鍊に力めて居る。毎週一回集まる。また時々は露營や旅行やの演習をやつて、心身の練磨に力めて居る。

教育機關としては完備して居るのである。

日本人の醫者は可成りある。筆頭に同仁醫院をあげる。それから中野醫院、西村醫院、安藤醫

院、木之下醫院がある。齒科に至つては實に多い。新嘉坡の需要に應ずるのみならず、南洋全體に亘つての齒科醫養成場である。山本、大川、池田、手塚、本間、齋藤、今井、元松、大西、秋澤、葛田、川内、山崎、池中、數へたら未だあらう。

南洋一帯に亘つて、日本の齒科醫なるものは寫眞師と共にその數が多い。これ等の人の多くは新嘉坡で、少し修業をして一通りの事を呑み込めば、直ぐ開業が出来た。これ迄は、海峽植民地馬來聯邦ともに、齒科醫に關する取締法無く、單に劇藥使用の點から、一三の規定があつたのみで、またその規定に據る齒科醫試験と云ふものは、程度が頗る簡易なものであつたから、少し心得のあるものは、格別の困難なく合格が出来たのであつた。しかし大正十三年(一九二四年)十月新に齒科醫師登録法が制定されることになつた。

新嘉坡にて二ツの教訓を得た。一は先覺者の獻身的努力が、如何に國家の運命を支配するかと云ふことである。新嘉坡の創設者ラツフルス卿の偉業これである。

一は多數は勢力であると云ふことである。南洋に於ける支那人の勢力が、南洋を支配して居る

事實である。

熱血兒ラツフルス卿

サー・スタンホード・ラツフルスは、アングロ・サクソン民族の生める代表的熱血兒である。彼が胸中只祖國あるのみである。その祖國を思ふ熱情は、發して千古を曠ふする炯眼となり、熱烈火の如き言論となり、百折不撓の大勇猛心となつたのである。

生立よりすれば、西印度デヤマイカ島航行中の名もなき船の船長の子として、船の中で生れ、そして船の中で大きくなつた。

教育から言へば、二ヶ年間小學校で正式の教育を受けただけである。

位置から言へば、東印度會社の給仕から、馬拉加出張所に拔擢された一書記に過ぎない。年齢よりすれば、漸く三十に手の届いたと云ふ白面の一書生である。

それが拔擢されて一躍、爪哇總督に任命されたのであるから、如何にその天稟の偉材であつたか、わかる。彼は英國第一主義の權化であつた。見よ死に至るまでの奮闘を。

馬拉加は瘴癘の地に過ぎない。これあるが爲めに國際的紛雜を來すのは煩はしい。寧ろ放棄するに如かず。と云ふ議論は可成り英本國朝野の間に喧しくなつた。カルカッタ總督ミント伯も頗る取捨に迷ふた。悶々の日は續いた。この時である、會社の一書記たる彼ラツフルスは、殆ど英國の安危を一身に背負つて起つの慥を以て、大鐵案、大抱負を具し、ミント伯に呈した。

その趣旨は「馬刺加を棄てるは、英國の將來世界に雄飛せんとする一翼を絶つに均し」と云ふのである。即ち英國は左翼以て亞米利加を蔽ひ、右翼以て亞細亞大陸を蔽はんとするのである。今馬刺加を棄つるは、將來英國が世界を制し大飛躍をなすべき一翼を自ら絶つものである、と飽くまで放棄説に反對した。當時英國は一和蘭に制せられ、馬來以東は和蘭の勢力に壓せられ驅逐されて居つた時代であつた。この當時誰かかくの如き大膽にして雄渾なる大抱負を披擲するものがあらう、ミント伯は快然として案を拍つた。直に彼れをカルカッタに喚んで、更にその意見を叩いたのである。

ラツフルスの意見は馬刺加の留保これは單に小手調であつて、眞骨頂は東方の大經綸にある。當時歐洲はナポレオンの旗風に靡いて居つた。和蘭もナポレオンの爲めに蹂躪せられ、隨て爪

哇も佛蘭西領となつて居たが、當時只僅かの佛蘭西兵が駐屯して爪哇を守備して居るに過ぎなかつた。英國は今や佛蘭西とは國交斷絶の状態にあることゝて、この機會に於て一舉爪哇を占領して、こゝに大英國の基礎を確立せしめやうと云ふのだ。ラツフルスは更に言ふ、「東方經營の第一着手としては、日本と提携握手するでなければ功を奏し難い。日本人は今吾等の活動圏外に立つて居るが、聰明であり、技藝に長じ、政治的組織も鞏固である。將來同盟して事を爲すは万全の策である。」と伯はその天稟の偉才たるに驚嘆し、その卓越せる識見に敬服し、その説に傾倒した。そこで、その猷策を容れ、群議を排して馬拉加の留保を固執するに至つたは勿論、進んで兵船を購して爪哇を攻略し英國旗をバタビヤ港外に翻へした。間もなく、ミント伯はこの一事務員を爪哇副總督に任命して凱旋した。ラツフルス時に年三十一。爪哇はこの若き副總督の計劃の下に、各種の施設は行はれ、統治の實は着々と擧がつて行つた。折しもナポレオンは一敗地に塗れセントヘレナ流謫の身となり、歐洲は舊態に復し、列強の分界が議せられて、爪哇は再び和蘭の領地となつた。ラツフルスの遺憾痛恨は如何ばかりか。萬斛の怨みを呑んで爪哇を去るの已むなきに至つた。間もなく爪哇に關する著書が、英京ロンドンに於て出版された。ラツフルスが熱血を注

いで爪哇の眞價を論じ、英國の輿論に訴へたのであつた。これを讀んで始めて英國の政事家も軍人も還附を悔たのであつた。が、もう追つつかかなかつた。ラツフルスはしかし再びスマトラの總督としてベンクーレンに現はれた。

熟々スマトラの地勢を觀るに、良港灣に乏しくて雄を四方に稱するに足りない。彼の爛々炬の如き炯眼は、スマトラ島の對岸、マラツカ海峽の咽喉を扼する叢嶺たる小島、樹林鬱蒼として鯨鰐眠る獅子島に眼をつけた。そしてこれをジョホール王国から譲り受けた。これが即ち今日、英國東亞經綸の策源地として、將た東西交通の關門として、帆檣林立、人口四十五万を算する新嘉坡となつたのである。

ラツフルスが新嘉坡を得たことは、領土を南洋に有する和蘭としては、咽喉を扼せられた形であるので大反對であつた。英國としては、叢嶺たる一蠻島人口百に足らざる叢林の小島は、國際的關係を惡化してまでも争ふ程のものではないと思つた。朝野の議論は和蘭の要求を是認してラツフルスをしてこれを抛擲せしめやうとした。こゝに於て、彼は敢然として抗争し、官憲に對し慘憺たる争鬪を開始せざるを得なかつた。建設地に於ては蘭人の迫害を受け、本國に於ては朝野

の攻撃を受けた。彼の位置は孤立無援ではあつたが、喬木の風に傲るの概を以て、斷々乎として所信に向つて邁進し、飽く迄この地の重要なるを力説し、批難の不當なる所以を説いて抗争をつとけた。

彼は拮据經營五閱年、當初百人程の人口しかなかつた叢林の蠻地が、人口一万に迄激増したのに、僅に會心の笑を貽して本國に去つた。そして、この抗争は彼が英國に歸つた翌年一八二四年英國の勝利となつて局を結んだ。この時彼は永き奮闘によつて、心身共に衰弱して居た。心血を灑いだ新嘉坡が確實に英國の手に落ちたその翌々年腦溢血を以て逝つた。享年四十有五。

若し、ラツフルス卿に新嘉坡固執の熱血がなかつたならば、東亞の地圖は如何に變化したらうか。今日英國の勢力はどうなつたであらうか。今より百餘年の昔に、存在も認められなかつた日本の將來を豫言し、東亞經綸に日英同盟の必要を力説した彼の靈眼達識は、新嘉坡の眞價についても誤らなかつた。一人の覺めたる熱誠の偉人の努力が、如何に國家の運命を導いて行くかを、しみく痛感せざるを得ない。

支那人の新嘉坡

新嘉坡の支那人か。支那人の新嘉坡か。新嘉坡の總人口四十二万のうち支那人が三十一万七千即ち七割五分は支那人である。肩摩毆撃の大通りに、何の街に行つても眼につくものは、七面倒な文字の金色燦として、烈日に映する金看板である。至るところウヨウヨして居る、万を以て數へらるゝ人力車夫は、皆これ支那人である。中央市街に巍然として聳ゆる大銀行から、裏小路の怪しげなる家、大道に店を並べる飲食雜品の露店、流してあるく藝人迄、支那人で眼をつくやうである。そして、彼等は今でも、年々二三十万は新嘉坡に上陸し、これが馬來半島から、英蘭諸島にばら撒かれる。もうかうなつて來れば、年々増すとも減ることは無い。

彼れ等の郷國は南支那の、福建、廣東、海南のものが多し。普通にこれ等を、「華僑」と云つて居る。彼等の本土は、人口稠密で生計が困難なるに加へて、官憲の暴虐と、暴徒の擾亂がある爲め、貧なるものは永久浮ぶ瀬がなく、富めるものにも絶えざる不安がある。それに比べると南洋は樂土である。況や、永い間の忍耐精苦は南洋一帯に亘つて、牢固として抜くべからざる經濟的

大勢力を占めてしまつたのである。彼等は經濟的の實權を握つて居る。資本と勞力との二つを持つて居る。英國統治の下にあつたところで、自己に不利を與へるものと見れば、忽ち唯一の保護手段であるところの協同動作と云ふ手段に出る。彼等が電車に對してボイコットをやれば、忽ちその機關が止まつてしまふ。家庭労働者がストライキをやれば、三度の食事にも差支る。有力者にダマを捏ね出されば、大銀行も戸を閉めなければならぬ。かうなれば、英國官憲も單に經濟上の勢力を認むるのみならず、政治上にも位置を認めざるを得なくなつた。

英領の總督政治には、二ツの翼賛機關がある。一は行政參議院で、一は立法會議である。このうちの立法會議とは、十三名の官吏議員と、同數の非官吏議員とを以てする立法機關で、その非官吏議員の方には、支那人代表三名を加へてある。これで立派に權利の主張が出来る。かうなれば本國と何の選ぶところがない。否、本國の不安な暴政や、朝令暮改がなくて、安心して幸福なる生活を樂しむ安住郷である。日本人が如何に一等國だと威張つてみたところで、彼等につむじを曲げられたら、一たまりもなく參つてしまふ。

何としても數は勢力である。

如何に軍隊の力を以て、領土の擴張を圖つたところで、多數の國民がそこに移住して、牢固として抜くべからざる根柢を築くのでなければ、確實性を持たない。民族がドシ／＼根を張つて行くなれば、何處の統治権内にあらうと構はない。

滿洲はどうだ、臺灣はどうだ！ 如何に強大な権力の下にあつても、民族的に驅逐されて居るのでは仕方がないではないか。

娘 子 軍

「北はシベリヤ南は爪哇よ」と唱はれたさすらひの娘は、歌の文句以上に、北は旅順、奉天、ハルビンから、南は比律賓、ボルネオ、セレベス、馬來、印度猶それ以上に及んで居たが、兎に角言葉もわからない、氣候風土にも慣れない數千哩の異郷に於て、大膽にも各國の人々を相手にして盛んに發展して居たのであつた。その土地の中心市街は勿論、如何なる山奥の鑛山町でも、交通不便な漁港でも、苟くも人の集まるところ、金になりさうな處には、彼等は巢を喰ひ、網を張つた。その行動の大膽で勇猛なるに至つては驚くの外がない。柴式部の父の言を藉りて、「こ

れが男なりせば」と嘆息したくなる。

人道的とか、國の體面とかそれらは抜きにして、只北清南洋至るところ——ある地方によりと言つた方が穩かゝも知れない——の草わけとなり、堅實なる商人の道しるべの役をもつとめ、邦人の經濟上にもある種の力を持つた時代もあつたので、變態的な民族發展として閉却すべからざる位置を持つた。兎に角、南洋に行つたのは日清戦争前であつたが、日清戦後は臺灣と云ふ足がかりが出来たので、急に激増した。特に日露戦後は北進したのがまた南に向つたので一層南方が盛んになつたのである。

昔、北ボルネオのサンダカンにお國婆さんとか云ふ婆さんが居つた。お國婆さんは長崎から碑石を取りよせ、生きて居るうちに裏山に石碑を建て、サンダカンの主になるんだと力んで居つたと云ふが、世話すきの婆さんで、漂浪して行つたものでも、一片の旅行者でもよく世話をしたので、その頃、領事館がどこにあるか知らない人でもお國婆さんは知らなければならぬ位に名高いものであつた。が、よしんばお國婆さん程の人はなくとも、彼等は土地の事情には通じて居り、言語がわかり、高官にも知り合が多いと云ふ關係上、北に於ては軍事偵察の機密の行動を援けた

り、南に於ては商業勢力の分布に道しるべの役をつとめたのは事實である。

これは明治になつてからの新現象であるかと云ふと、必ずしもさうではなかつたと思ふ。それについてかう云ふ事があつた。それは寛永十四年一月三十一日に島原を出帆したグロル號と云ふ蘭船が、三月の末に今の佛領印度支那の東京に着いた。この船の日記に、この當時は葡萄牙の勢力が強くて、グロル號も葡國に邪魔されて貿易上の交渉が面倒であつた。が、この時日本婦人の Ura-San—浦さん？ が東京にあつて蘭人の爲めに通譯の勞をとり、辯疏斡旋大に力め、國王に謁見も出来るやうにしてくれたといふ記事が出て居る。浦さんとはどう云ふ人か。兎に角浦さんの力によりて、蘭人は國王謁見まで漕ぎつけ、王座を仰ぐことも出来ぬ程遠く離れたところに作られた坐席も、王族席の前迄進められたと書いてあるところを観れば、浦さんは相當宮廷にも勢力があつたやうにも見える。浦さんはこの種の人ではなかつたらうか。東京あたりに居つたとすれば、近くのハイホーの港には猶居つたらうし、その他にも居つたものと推せられる。

さて昔のことはどうでもよいとして、どんな風にして彼等は行つたか。
南洋には新嘉坡、香港、彼南と云ふやうな處に、これ等の分布をはかる中心部があつて、その

手先として博徒、野師、船員上り、濠州の眞珠とり、一口に「南洋ゴロ」と稱する浮浪の團體から成る媒介網が南洋一體に分布されて居、各自連絡をとつてゐた。

始めは南洋渡航の手續は頗る簡單で、領事の査證も許可證も要らない時代もあつて、公然船に乗り込んで行けたのであつたが、その中に規則が面倒になつて來たので密航の外渡航の手段はなくなつてきた。全く命がけの冒險事業で、外國船や貨物船の船艙の穴倉見たやうなところに荷物と一所に積み込まれて、密航したのであつた。この間にいろいろの悲劇があつた。ある娘二人は文字通りの箱入娘となつて積み込まれたが、その函を開く機會が得られなかつた爲め時間が経ち過ぎて、開いたときは苦悶の形相凄じく、既に絶命して居つたと云ふ。それから後、この船には深夜女の呻き聲が聞へたり、夜更けてから影のやうな女が彷徨ふて居るのを見たとか云つて、長く船員を戦慄させたものであつた。

秘密の玉をのせた船が、港についたと云ふと、夜おそくなつてから連れに行く。結托した船員が石炭庫から口を開けて出して呉れる。彼等は長い航路に疲れ切つて、眼ばかり光らせて顔は眞黒々、買物に出たまゝの姿もあれば、仕事着のまゝのものもある。人三化七でぞつとしたと云ふ。

待たせてある車に積み込まれてホテルに運ばれる、ホテルは媒介網の中樞たる女宿である。とりあへず浴場で垢と石炭酸とを洗ひ落とし、新らしき浴衣に着かへ一室にゴロ／＼死んだやうに横はる。榮華と希望と安心と不安と、ゴツチャにした夢を観ながら、昏々として睡りつゞけて居る間に、主人公の部屋では各地から集まつて来た女將達と取引が始まる。

手數料、船の運賃、船員のコミッション、車錢、宿料、衣類等一切で八百圓のもあれば千圓のものもあるが、これが當人の借金となり美貌の持主程多くの借金を背負はされて、西に東に、立派な煉瓦造りの家に行くものもあれば、椰子の葉蔭のアタツ屋根の下、カンテラをとぼして生活して居るみじめな家に落ちつくのものもある。

彼れ等は事情をよく知つて来たものもあり、又ぼんやり華やかな生活にあこがれて来たものもある。中には全く瞞されて来たものもあるが、もうこゝまで来てしまへば、捨て身の勇氣とでも云はうか、持てるものゝ凡べてを失つた彼れ等が、運命に順應して行くその大膽ぶりは、到底男子の想像も及ばぬものがある。

彼れ等の収入は女將と折半である。このうちから食費と借金とを拂つて行つて、それで相當送

金もすると云ふから驚く、彼等同志の鞘當て筋になると、三百圓、五百圓抛げ出して、問題が解決するなど内地では想ひも及ばぬことである。

この社會には嬪夫と云ふものがついて居る。これは番犬のやうでもあり、愛人のやうでもあり、下男のやうでもある。男の中の意久地なしの骨頂で飯焚から洗濯までやり、喧嘩のときの用心棒にもなる。毎日ブラ／＼して酒と博奕で、懷手で女に喰はせて貰らつて居る奴だ。藤井領事が眞先きに槍玉にあげたのがこの嬪夫退治であつた。

かう云ふ社會の常として、女將連に限らず唯一の娛樂は博奕である。不景氣にでもなれば猶ほ博奕に凝る。その結果チツテの御厄介になる。チツテは印度人で高利貸を本業とし、印度から南洋一帯に亘り、靴をさげて狡猾さうな眼をしてあるいて居る種族である。この利息がペラボーに高い。百圓の金について、毎日五圓宛返済して一ヶ月の間に百二十五圓をいれる約束である。驚くべき高利であるが貸す處を見ると、彼等は返して行くに相違ない。しかし、金の生る木を持つて居ても、不景氣になれば二進も三進も行かなくなることもある。その時は何百哩でも飛んでしまひ、少しでも景氣のよいと云ふ方に、山奥から、津々浦々どこまでものびて行く。

相當金を持つたものは國に歸る。中には支那商人のおかみさんになつて居るのも可成りある。また友達の意見するのを馬耳東風と聞き流して、その日ぐらしの支那苦力と共苦勞して居るのもあれば、馬來人と出奔して、アタツ屋根の下で、徒跣でサロンを捲いて睦ましくやつて居るやうなものもある。外人と一所になつたのはどんな状態か

サイゴンでは家政婦として佛蘭西人の家庭に入つて居るのが五十人程ある。和蘭人との關係は古いことである、徳川初代の頃のロマンスはやがてデヤカトラの悲劇を生んだ。長崎在留地の出島の商館には丸山の娼妓をよぶことは許された。文政の頃に愛人を連れて本國までかけおちした蘭人もあつた。

今でも蘭人の妻となつて居るのは可成りある。蘭人の會社員などで、國から妻を迎へることも出来ないものはこれ等の婦人を家政婦として一家の經濟を任せて置く。蘭人に限らず歐米人馬來人も婦人には敬意を拂ふて居るので、單獨に友人と飲むことがあつても酔を醒ましてからに家に歸る位の心つかひをした。日本婦人はその生活が質素で、従順で一家に納まればどんなものでも浮名一ツ立てんと云ふのが評判である。月々一定の給料を與へ、自分が國に歸るときは多少纏まつた

金をわたし、再び南洋に還つて來るときは必ず呼び寄せると云ふやうな書類を渡して別れた。中にはその女の爲めに日本が好きになり日本茶をのみ、長崎縣に籍を持つて居るものもある。數年前にはある高官が本國で死んだのでその遺言により遺産の分配を受けとりバタバヤまで行つた婆さんがあつたことを新聞で觀た。上流社會にまで這入り込んで居たことと思はれる。

密航もやかましくなり、婦人の單身渡航は許されさうにもないので、「一時夫婦」が出來た。これは新嘉坡に行く迄、合意上の假の夫婦であるが、しかしこれも官憲の調査が厳しくなつたので止んだ。今日、堅實なる婦人、南洋に活動して居る青年の爲めに日本から正式に妻を迎へるさへ、非常に八ヶ敷のも、これらの餘弊である。

廢娼が斷行さるゝやうになつた、婦人會とかの何々女史が、態々新嘉坡までわざ／＼身柄引きとりの相談に行つた。が、彼等は何處に行つたか影を見せなかつたと云ふ話であつた。今では錫のバンカ島や、馬來の奥の街に僅にその面影を止めて居ると云ふ。

新嘉坡には馬來街の一角、綠滴たる棕櫚で門々を飾つた氷屋が、ありし昔の名残であると云ふ。

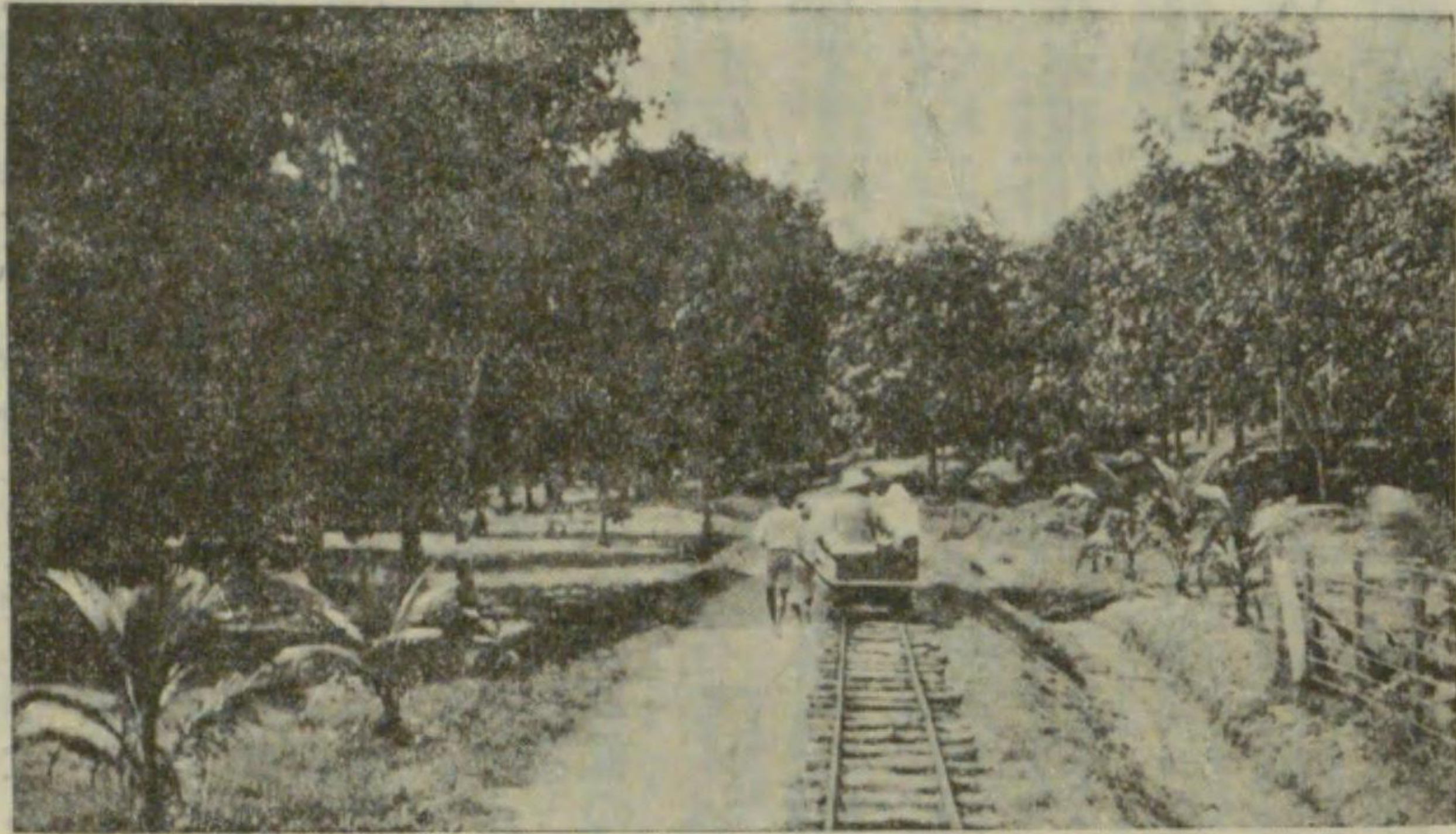
ジヨホールの日本村

この時から三月前のことであつた。

ジヨホールの日本村を訪問しようとして、中島總領事、南洋日々新聞の古藤主筆と出懸けたのは二月の中旬である。三五公司から廻して呉れたランチに乗つて、午前十時タンジョン・ルートの埠頭を出發した。

天は晴れて一點の雲もない。左の方タンジョン・カトンの海岸には、椰子林が何處までも續いて、緑樹の中には涼しさうな洋館が見える。沖合にある幾つかの漁舟では、調子をとつて柁をたいて居る。濱邊近くには、簀の子を立て見張番をつけた漁場が見える。船は東へ東へと進む、海上波なく、海風は涼しく頬をなでる。十二時には、ジヨホール河の沿岸、三五公司のベンガランの船つき場にランチをつけた。

最良唯一の交通機關トロ



護謨園の中では、トロが最良唯一の交通機關になつて居る。それに乗ると苦力が船でも漕ぐやうに棹で突つばると、トロはアタツ屋根の土人の家などのある椰子の密林の中を、急速力で走つて行く。これは單線であるから、先方からトロがやつて来ると、どつちかトロを引つくり返して途をあげなければならぬ。つまり荷物のない方が道をあける譯になる。兎に角護謨園に於けるトロは、輕便重寶な唯一の交通機關である。

三五公司の本店は神戸にある。園主は愛久澤氏で、植付總面積二万三千八百七十四英反ある。支配人の小泉哲一郎氏は身の丈け六尺の堂々たる偉丈夫で、力も碁盤で蠟燭の火を消け位は出来るやうである。高商に入つてからも、姻戚常陸山から、角力界に這入るべく熱心な勧誘を受けたと

云ふ程あつて、體格は實に見事なものだ。言葉少なく大人の氣格を備へ悠然とやつて居る。それで苦力も威服し、邦人護謨栽培界の重鎮とされて居る。

この園には三十五年木があると云ふ。

元來、護謨が東洋に栽培されるやうになつたのは極めて新しい。英國政府が護謨の栽培を考へついで、原産地に植物學者をやつたので、一八七三年始めて六本のパラ護謨の苗木がカルカッタに着いた。その後、二三回巨額の費用をかけて取り寄せたが成績はよくはなかつた。

印度政府は、一八七六年アマゾンに居つたウィツクハムに命じて種子を採集させた。氏は七万のパラ護謨の種子を集めてキュー植物園に送つて播種したところ、二千七百本の苗木を得た。その翌年に二千本の苗木を錫倫島に送つて移植したが、完全についたのは僅に二十二本であつた。これが東洋に於ける母樹の元祖で、それから五年後に初めて實を結んだ。配付を始めたのは一八八四年からである。東洋へ來てからまだ四五十年のものであるから、三十五年木と云へば相當に古いものである。

護謨は次のやうな順序で商品としてまで進む。

開墾

先づ森林を伐り倒してこれに火をつけて焼くのは丁度、ブラジルで珈琲園をつくると同じやうであるが、その倒木は根株を引つて抜いて奇麗に片づけ、地ならしをする。護謨園で一番厄介なのはチガヤ——ラランと云ふ——の發生で、これが蔓延したら始末に行かなくなる。この草の根は針のやうな尖さを以て、護謨の根を貫いて蔓延し樹を非常に弱らせるから、始めに充分に整地をして、ラランの根を絶やしてしまふ。

植付

一英反百本位を植える。覆木を植えて日被ひをしたり、覆草を蒔き付けてラランの發生を防ぐ。豪雨の時の用意に排水溝をつくつたり、壤土の流出を防ぐ爲めに土垣を設けたりする。

採集

通常樹の周圍二十時に達したる時にタツピングを始める。タツピングには種々の方法がある。今多く用ゐられて居るのは癒着を八年とする二分の一周圍法、又は三分の一周圍法である。タツピングの傾斜は近頃段々減少して、水平線から僅に十五度から二十度位になつて來た。隔日に採集するのもあれば、中二日を置いて行ふものもある。

毎朝早く苦力が廻つて切付する。根元の處に陶製の容器を置いて、それに護謨液が流れこむや

うにし、液は早朝が最も盛に出て、十時頃には止まるから、時間を見計らつて苦力がバケツを提げて、一巡り受持區域を廻つてそれを集めて工場に運ぶ。

工場

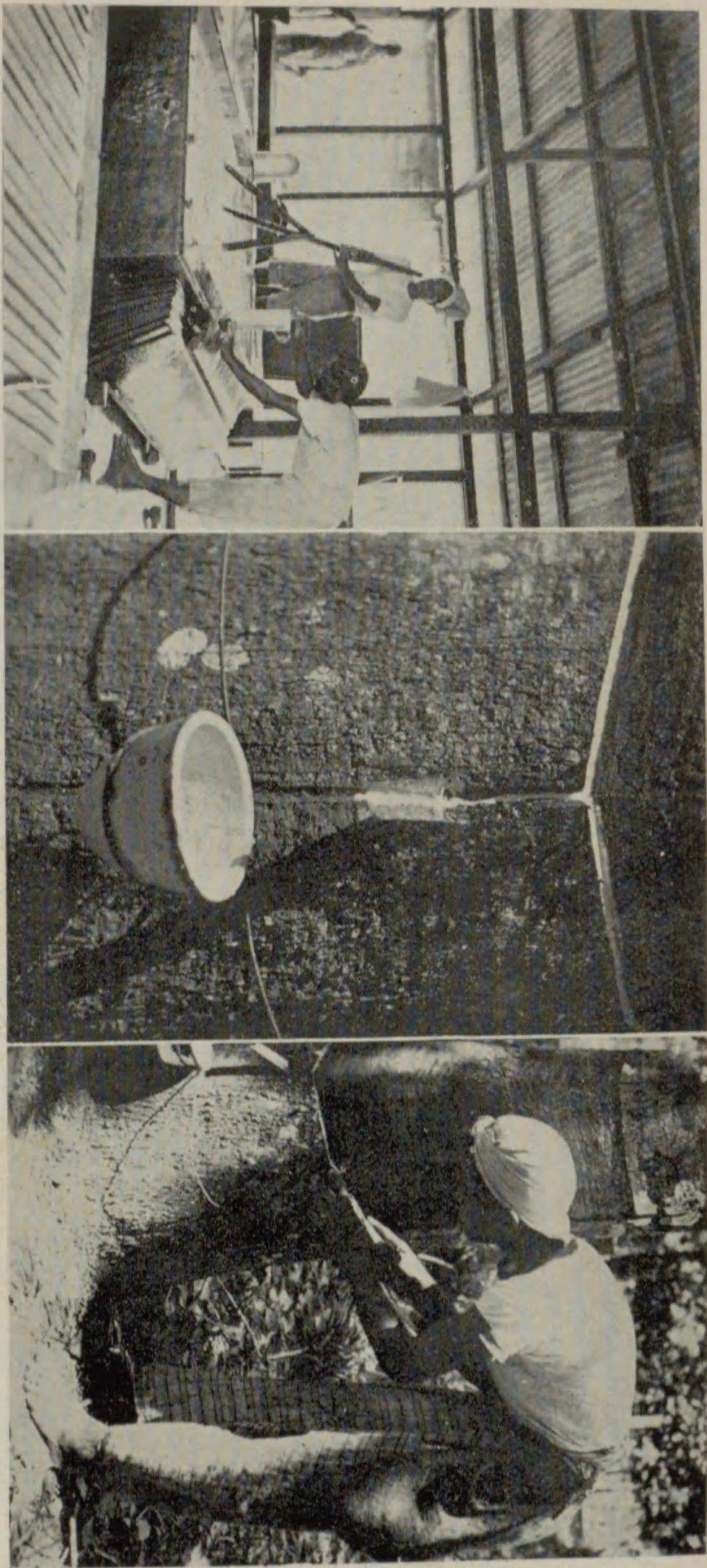
苦力の採集して来たものを、一々目方をはかつて受けとり、一槽に流し込む。槽には一寸程の距離を置いて數十に區劃がしてある。その液の中に醋酸を加へて凝固させると純白の帯のやうなものが出来る。これをローラに掛けて壓搾し、水分をとり去り乾燥させればよい。この壓搾ローラーの如何によりて、各形の異なる商品が出来る。

次にこれを煙煙室に入れて煙煙乾燥すると、飴色に透き通つた綺麗な護謨が出来上るのである。

○

晝飯を頂戴してから復た園内を巡る。

この園に小高い山がある、初音山と呼んで居る。これに登つて観る。展望は廣く、雄大である直ぐ眼の下はジョホール河口、馬來の南端。海上一望である。西の方は今し驟雨と見えて、暗紫色の雲霧が鎖して居るが、漂渺たる海を隔て、新嘉坡島は一望のうちに收められる。前面よ



段頃近は斜傾のグンベツタるめ始をグンベツタに時るたし達に時十二箇周の樹常通 グンベツタ (1) 護謨にれそてい置を器容の製陶に方の元根 集採 (2)。た来てつなに位度十二らか度五十でし少減々採の方苦 場工 (3)。る巡を城區持受てげ提をツケバは力苦てつ計見を問時るすにうやむ込れ流が液加を酸醋に液の此るあてしが割區の十數てい置を離距の程寸一はに槽む込し流に槽一をのもた来てし集る上來出が護謨とるす燥乾煙煙し搾壓をれこに次、る來出がのもなうやの帯の白純とるせま固凝てへ

り北方にかけてはジョホール河で、江水漫々として、緑林は遠く遠く續いて居る。展望の廣闊、氣象の雄大、天下の大觀である。これなら船の動靜をも觀取することも出来る。日露戦争當時など大分利用せられたことと思ふ。英國から言ふたら邪魔になりさうな處に相違ない。山上でビールに渴を醫し、展望を縦にして丘を下る。下れば直に棧橋の處へ出る。こゝから船に乗つて南亞公司の護謨園に向かふ。

波平かなデヨホール河を遡る、右の方はなだらかな丘で、左の方は河畔にマングローブの茂つて居る平な林である。

マングローブは、「紅樹林」とも書く。馬來では最も良く發育して居る。

この樹は、満潮の時に海水の浸入して来る河口とか、淺瀬の海岸、泥地などに生育する。その實はハシバミ位の大きさで、成熟すると頂點の處から青い幼根が抽んで、だん／＼大きくなり、六十センチ位の棍棒状のものになると、水中に落ちる。下の方が重くなつて居るので、水に這入ると根のある方が下向きになつて土につく。土につくや、數時間の後には細い根が生え、數日後には先きから枝が出、葉が開いて成長し、やがて曲りくねつた四メートル位の木となる。木炭



ぶ浮に上の水はに岸對の河シムるれ流てしと洋汪 コトぶ浮に水
段は家てつ從にるす加増の量水 するみてべ並を軒が(コト)店商
。る下ばれす水減りがあに上々



せ行遡を船汽蒸小式輪外でまロキ十三百流上へ言はと河 河シム
る遡りよ日河は街市のンパンレバの都の水 するあて河大る得めし
。るあに處のロキ十九とこ

としてもよい。樹皮は染料又は揉皮用に供せられる。

三五公司を出たのが四時頃であつたから、南亞公司の方は大分待つて居らるゝことと思ふたが兎に角こゝから、ランチでも二時間はかゝる。

南亞公司の棧橋についた時は既に日は暮れて居た。法華津老は四時頃から待つて居られたが、見えぬのでクラブの方に歸つてしまつたと。こゝで又トロにのつて、クラブに直ぐに行く。クラブには法華津老大元氣で控へて居た。

「いくら待ちても皆來んで、怒つて來たところだ。仕方なしに獨りでこれをやつて居る。椰子酒だ。マアやつて見給へ。」

アツサリした椰子酒を頂戴しながら、色々の話をきく。

椰子より酒をとる話。

椰子には種類が非常に多い。古々椰子、油椰子、棗椰子、サゴ椰子、砂糖椰子、孔雀椰子、大王椰子、ニツバ椰子、その他重なるものでも十數種はあらう。各その主なる用途や、外形によつて名前がある。

日本に來て居る椰子の實と云ふのは、古々椰子で、よく柱掛けの花挿にしたり、又彫刻して飾物などにしてあるものである。この殼を割つて胚乳を取り出し、これを乾燥したものがコブラで化粧油、石鹼、蠟燭、バタなどはこれから製するのである。そのまた油を搾り、粕は家畜の飼料にする。

花の開かない前に花梗を切ると甘い液が出る。土人は椰子の實の殼でつくつた容器物を腰につけて、高い樹の上に登つて行き、花梗のところを鋭利なナイフで削る。液の垂れる處に容器をあて、置くとそれに溜る。朝夕二回づゝ液を集める。この液を甕に入れて醗酵させると酒が出來、又煮つめると砂糖になるのである。

飲んでみると、アルコール分は強くなくて、アツアリした薄いビールを飲む位であるが、一種の風味があつて佳い。

この夜は非常に涼しかった。蚊も居らぬ。法華津老中々の大元氣で、快談縦横夜の更くるも忘れた。

翌日は朝飯前にトロで山を一巡り、トロのない處は徒歩で、山を巡りて説明をきく。

護謨は強い木だと聞いて居たが、栽培すると色々の病氣が出るらしい。根の病氣には白黴病、黒痂病、根株病、紫根病、根腐病、又枝には枝枯病とか、幹には黒斑病とか色々あるが、最も恐るべきは根腐病である。病患にかゝつた枝は焼きすて、幹のものは削りとり、根は掘りかへし、病害部を去り薬液を塗りて療治する。

病害の外に虫害がある、虫害で最も恐るべきものは白蟻である。白蟻は根から喰ひ込む。これにやられると樹の葉が何となく活氣がなくなり、少しの風にも倒れるやうになる。これにやられたと観ると、その巢となる朽木と根際とを全部清掃してしまふより外途はないと云ふ。

事務所を出たところに、僅かながら薬草トバの試作をやつて居る。

薬草トバは蔓莖植物であつて、この蔓とか根に含まれて居る有毒物は、害虫驅除に頗る有効である。植物には絶對無害である。植物のみならず綿羊に用ゐれば、虫がつかない。布にしても保存がよいと云ふので、英領北ボルネオのサラワツク王國からは、濠洲や英國に盛んに輸出される。南洋の土人は、獨木船の中に水を盛り、この植物を生かして叩いてその水に浸し、毒液を分解さ

せ、魚の居るところへ漕いで行つて、それを引つくり返し、魚を捕ると云ふ。

トバにも色々種類がある。立トバと云ふのもあれば、這つて居るものもある。又その中間のものもある。立トバが最も有効である。

日本でも、これを原料として三菱かどこかで専賣の特許を受け、害虫驅除劑が出来て居ると云ふ話であつた。

これを栽培するには、莖を三十乃至五十センチ位に切つて一メートル平方の間隔で地に挿して置く、六週間位で根が出て、二年目から一英反八擔位の收入がある。

クラブに歸りて朝食を頂き、隣接地の南洋護謨株式會社の護謨園を観る、南亞公司から二十五キロ、南洋護謨會社は創立が明治四十四年、資本金二百萬圓の會社である。こゝで晝食の御馳走になり、色々栽培上の話をきく。

こゝを出て又船にのり、對岸の南興護謨栽培所に行つた。南興は外人に賣渡契約が成立して、引渡しが二三日の間に迫つて居ると云ふ時であつた。支配人の遠藤桃三郎君は、事務一切の整理と園の手入、道路、家屋の修理など、見苦しからぬやう、萬事に心をつけて居た。赤穂城引渡し

を思ひ出させるやうな一種の整然たるうちに涼しさが見える。

この夜は、月が實に良かった。熱帯の月は一番の慰めであり、最も美なるものであるとは聞いて居たが、過去十年色々の憂苦歡樂を織り込んだこの園も、愈々兩三日の中には人手に渡さねばならぬと云ふ人達と酒をくみつゝ眺むる月には、月光の美以外に無限の感がある。皆床に這入つて後までも、古藤主筆と更け行くをも忘れて語つたのであつた。

翌日はランチに乗つて、川の反対側にある、秋田ゴム園を訪ふた。南奥からは五キロの地點である。園主は秋田君で、事業地の支配人は今關羽の稱ある黒髯髯々たる仲井君である。植付面積五百五十六英反、事務所も草花に囲まれた奇麗な小デンマリした處、園内を一巡して又ランチに乗りて上流に遡るとコタチンギと云ふ町につく。こゝで上陸して、眞植護謨株式會社のゴム園を観る。この會社は資本金五十万圓、事業地の業務擔當者は山村四郎君である。

虎や象の話。

虎は、晝間は山の奥に眠つて居て、夜になると活動し出す。苦力は朝早く護謨園に働くので、運の悪い時には虎に出つ喰はす。夜明け頃に園内を見まわると、濕つた土に大きな足跡がついて

居るのをよく見るさうだ。

苦力が一度虎に喰はれると、恐怖して仕事に出ないので、隊をくんで虎狩をし、鐵條網を張つて嚴重に警備しないとイケない。虎は千里の數も越すと云ふが、一人一匹はくわへたま、六尺位の扉は跳び超え、一里や二里はソレと云ふ間に走つてしまふ。全くその力の強いには驚くが、さう無暗に出るものではない。虎は生き物に害を加へるのであるが、象は植物を荒らす。彼等は隊をくんで護謨の若芽をしたつてやつて来る。象は鐵條網などは何とも思はない。多數で横隊になつて這入つて来て、鐵條網などは肩にひつかけたまゝで、園をひた押しに押しして行くから、成木までがメチャ／＼に倒されてしまふこともあるさうである。

象は鐵砲で撃つても耳のあたりに命中するでなければ、決して斃れない。象の最も怖るゝものは火であるから、炬火かカンテラでも多數點して置けば近よらないさうである。

こゝを辭し速見ゴム園を視て、予は古藤主筆と坦々たる道路をまつしぐらに新嘉坡に歸つた。

旅行の準備

南洋の旅行は、前回の経験によると、大抵の場合は詰襟が、それも少し厚手で丈夫なものが一番良い。食堂でも訪問でも間に合ふ。もつとも總督にでも面會しやうと云ふ方は格別として普通の旅行者は。蘭領では手荷物が多ければ、汽車でも可成りな運賃がかかるし、第一荷物が手輕であれば何かと便利で、一人旅の時などは世話がないから、どの位助かるか知れん。

旅行の第一條件は健康でなくてはならぬ、これには薬よりも攝生に注意することが肝要である。飲食には注意し、夜は充分睡眠をとることである。睡眠不足と、暴飲が一番に胃腸をいためる。胃腸の弱くなるのが万病の基である。マラリヤなども旅行者をさう無暗に犯すものではない。只日中山の中の土地など観てみると、シャツも上着も汗で搾るやうになる。扱て着がへもホテルに置いて持参しないと、仕方がない濡れたままで自動車にのる。夕刻の風は冷たく肌に觸れる。身體は水分の蒸發ですつかり冷え切つてしまふ。こんな時によく風邪をひく。

又、ホテルの寢臺には毛布が備へ附けてなくて、只ダツチワイフと稱して居る一メートル程の長い枕のやうなものがある。これは腹を冷やさぬやうに抱いて居ると云ふのだ。が、そんな習慣のないものは、眠つてからにダツチワイフなど後生大事に抱えて居れない。熱帯だとして夜明け前

はずつと温度が下がる。腹を冷やすので胃腸をやられることがある。それで、毛布を携帯すると何かに便利である。

レインコートは必要だが、蝙蝠傘はいらない。田舎のホテルなどで蚊にくわれぬ用心に、厚い靴下があれば結構。帽子はソフトかヘルメット。薬としては、鹽酸キニーネ、胃腸薬、メンソレタム。こんなことで後は、一般旅行のつもりで間に合ふ。

新嘉坡滞在の數日間は忙はしかつた。總領事始め舊友の方々に會ひ、色々の話を承はる。岩田君と邂逅したのでメダン地方の視察の打合せが出来たのは非常に好都合であつた。同船して來られた南亞公司の松本君には何かと斡旋を煩した。武井氏はこの君の案内で、ジョホルの視察に出懸けた。南洋研究の權威者塚氏には、植物園から市中郊外までの説明を煩し、活動寫眞の教授までして貰らつた。

服の註文。日本貨を弗や盾にとりかへる。旅行の日程を調べる。電報をうつ、手紙を書く、不足の品を買ひとゝのへる。

あはたよしきうちに三四日は過ぎた。

貨幣		度		面積		衡	
弗 ^{ドル} (新嘉坡)	約壹圓二拾錢	メートル	三尺三寸	英反 ^{チカ}	約四反二十四步	キログラム	約二百六十七匁
磅 ^{ポンド} (英貨)	約九圓八拾錢	キロメートル	約九町	ヘクタール ^タ	約一町二十五步	噸 ^ト (千キログラム)	約二百六十七貫
盾 ^{ギルダー} (蘭貨)	約八拾二錢	海里	約十七町	バウ	約七反	擔 ^{ダン}	約十六貫

スマトラ一巡

スマトラは、新嘉坡の對岸に、赤道を中心として南北に跨り、北緯五度四分より、南緯五度五十九分に亘り、甘諸をころがした如くに横はる。太古には馬來半島と地続きであつたのが、地異の爲めに陥没して、馬刺加海峡が出来たのだと云ふが、或はさうかも知れない。面積は十六万方哩、樺太朝鮮臺灣を除いた日本の總面積よりは大きい。人口は四百万。西海岸に近く、分水嶺が北の端から南の端まで連立し、この間に三千メートル内外の山嶺が、蛇々として雲表に聳える。これから大河小川東西に流れ下るのである。西海岸は、嶮山直に海に迫つて居るので、殆ど平地を見ない程である。が東海岸には、二千噸の船を五十キロも遡江せしめ得るやうな大河を始めとして、大小の河川汪洋として流れ、その流域には肥沃なる平野を形づくつて居る。

北部のデリー平野の中心市街はメダンであり、これと相對して、南部の平野にその殷盛を誇る

スマトラ

のはバレンバンである。

新嘉坡からバレンバン迄三百八十哩、約三十時間で達する。

碧玉をのべたるレオの海

ジョンストン・ピーヤからランチの出るのが午後三時だと云ふ。出発の準備に時間がかゝり、漸く出帆の間に合ふやうに駆けつけた。

船はK.P.M.會社のゼ・デンスと云ふ三千噸級の小型ではあるが、奇麗で氣持ちが良い。一等船客は數名で、食堂は船長以下幹部が客と同敷、すき／＼したものであつた。客室も左舷右舷どちらでも御自由に御取り下さいと云ふ。

天氣は良い。新嘉坡の街はだん／＼霞に消え、要塞地のある小丘や、別荘のある奇麗な島が段々隠れると、次から次ぎに大小の島嶼が現はれる。恰も瀬戸内海を大きくしたやうなもので、遠い山々は紫に霞み、近い小島は呼べば應へんとするほどで、樹々數ふべく、一岸一石指し示すべしと云ふ程近いものもある。

海は全く平となり、夕陽没せんとする頃は、碧玉をのべたる如き海は、脂を流したやうに滑かに、小波だにない。只航行の一路長き痕をのこすのみである。

夕食は午後の八時である。この夕食が、日本ホテルは英領蘭領どこでも五時か六時で、日のあるうちに出す。が和蘭のホテルは大抵八時から十時。蘭人は午後一時が晝食で、三時半頃まで晝寝をして、それから水浴、事務服に着かへて二時間程仕事をして夕食となるから、それで宜しい譯である。が、旅行中はいつも困らせられる。

ボーイは爪哇人を使つて居る。頭に爪哇更紗を巻きつけて、白の洋服素足と云ふのが普通である。食事も僅か二日の船であるから、種類が少い。随つて、八釜しいフランス語のメニューと睨めくらをしなくても、黙つて居つて次から次と持つて来る。尤もメニューはある。事務長は英語がわかるが、ボーイは馬來語しか通じないから、馬來語を知つて居ればどの位便利であるかわからん。馬來語は簡單であり、發音が容易であるから、嚴密に言へば入り易く成り難いと云ふが、船で必要な言葉などは直ぐ出来るやうになる。

水浴場はあるが温湯はない。温浴のやうに時間をとらぬし世話も要らぬので、誰れは何時から

と云ふ規定もない。明いて居る限りいつでも使へる。

兎に角、船は廣くて、すき／＼して、涼しい。海は波がなくて静かである。ホテルに居るよりは悠揚とした氣分で寢臺に横はる。寢臺には例の、枕の長きやうなダツチワイフがころがつて居る。

明くれば既に船は瀬戸内海の如きレオの群島を出ぬけて居る。海上は微風だになく、近きは萌黄色に、遠きは淡紫色に光つて居る。

ところどころ暗紫色に海の色の変つて居るのは、天空に横はる白雲の影である。海上に風はなくとも、船だけには涼風が吹き渡る。

午後二時に、パレンバン河口と相對したるパンカ島のモントと云ふ港に着く。

パンカ島は錫の産地として有名である。錫山に働く苦力約二万人、その殆ど全部が支那人である。

支那苦力渡航の経路

支那苦力が南洋に渡るのに、自由渡航と契約渡航とある。自由渡航は親戚又は先輩友人などの呼び寄せによる。契約渡航は、その機關たる客頭とか洋行とかの勧誘によつて來るのである。

客頭は契約移民の勧誘をして、應募人員が或る數に達すれば、自らこれを引率して南洋にやつて來、それぞれ雇主を見つけて各種の勞働にありつかせる。出稼人は無論金がないので、この客頭が一時立てかへてやる。が、これを鑛山なり、護謨園なり、その他に引き渡しを済むと、立換金はこれ等雇主から代辨させる。又全部代辨すべき性質でないやうな職業になれば、後でその收入から返濟させる。客頭の利益は、手数料、旅宿料、運賃のごまかし、貸金の利子などであるが、副業として、四ヶ月に一回位往復をして、商品を出稼地に賣り捌き、故郷へ本人の消息をもたらす金銭物品の配達をやる。不當のことさへやらなければ非常に便利な機關であるが、悪い事も相當やるらしい。厦門、汕頭、香港に千五百名は居る。

洋行は移民會社である。これによつて渡航する數は非常に少い。客頭扱ひの一割位である。

支那移民の本國送金高は、支那全體で一億二千万海關兩、廣東省で五千万海關兩見當と稱せられて居る。

船が港口にとまると、移民官が来て検査を始める。

今までどこに居たのか、ぞろ／＼と出て来る。浅黄木綿の服に鐵の鎖の腕輪を嵌めた女や、黒縞子のやうな服の男達だ。併し侮る勿れ、彼等は上陸の時はきのみ着のま、行李一つが全財産である。が、低級な生活に堪え、幾年か孜々汲々として働いた汗の結晶として、幾分の資金を蓄ふれば、小作人より地主、行商から小賣人、と次第に發展して行く。今新嘉坡で華僑中の財界の巨頭として支那人間に重きを爲して居、今度の日貨排斥にも親分株と見られて居る陳嘉庚と云ふ男も、何十年前前には一苦力として上陸したのであつた。

移民官は大きな帳面を出して、一々書類と當人との引き較べをして居る。念入れな調べが終り入國金を納め、一通り手續きが終ると、船から下りた。もうその頃は荷積みも荷揚げも終つて居つた。午後四時、船は向きをかへてムシ河口の方に向つて波を蹴つて進む。

西日は強く船を射るが、海風涼しき爲め何等暑熱に苦しむこともない。この日も美しき夕日と静かなる海を眺めつゝ、平和な一日は終る。

日没してからムシ川を遡る。二十日餘りの月は淡く水面を照し、金波銀波を蕩はす。模糊た

る兩岸の樹木は長く長く續く。

午後十時船は進んで既にパレンパンの川下五キロの處にある石油會社のある處を通つて行く。

石油會社は二ツつゞいてある。一は蘭人の經營でB・P・Mと云ひ、一は米國スタンダード系である。工場、社宅、事務所の棟に煌として輝く電燈は、幾千、幾万、二キロ程も續き、華やかな光彩は水に美しく影を醸す。

この夜十時、パレンパンの街尻の河中に碇泊した。

爽快な夜は明けた。人口八万の水都パレンパンは眼前に横はつて居る。午前七時頃波止場に入が群れて來た。甲板に出て双眼鏡を取り出して眼にあてんとする利那、三人の日本人の此方に來るのが見えた。チュルツプの高田君、パレンパンの糸川君とその義弟の方であつた。船の上と下とで挨拶をする。

簡単に食事をすませ。後は検査、一通り英語で、「何處から來ましたか」「日本を何時出發したか」とか「何時日本に歸るか」「蘭領には何の位居る豫定か」など聞く。入國金を納めやうとする、「要らんかも知れん、兎に角移民局に行つて長官にあつて貰ひ度い、船の人が案内する」と云

ふ。移民局は近くであつた。糸川君が一緒にやつて呉れた。結局納めなくてもよいといふことであつた。糸川君の義弟と高田君が荷物の世話をして呉れ、取りあへず糸川君の經營する精榮商會に行つたのである。

入 國 手 續

一、上陸許可證發給手数料

蘭領東印度には、上陸許可證だとか、入國金だとか、色々うるさい手續がある。蘭領東印度に入國するものは、上陸許可證を得る爲に、百盾の手續料を納める。入國税である。船切符を買ふ時に運賃と同時に船會社で預かる。この入國税は本人の妻と未成年の子供は要らない。

船が着くと、移民官が来て手数料と引き替に上陸許可證を渡す。一二等の船客は、上陸許可證があれば自由に下船出来る。が、三等船客は上陸許可證があつても、移民官のやかましい取調と引取人の證言とがあるまでは、上陸が出来ないことになつて居る。と云ふのは、入國許可證の下附を受ける條件の中に、「自己及其家族ノ生活ノ保證ヲ得ル云々」があるからで、友人か雇主が来て證言しないと一寸見込がつかない。移民官が地位ある、單なる旅行者として認められたものか、或は船の往復切符を持つて居るかすれば、入國税は必ずしも徴收する譯のものではない。又、六ヶ月以内に出國する場合は簡単な手續で、その港で金は返すことになつて居る。

二、入 國 許 可 證

上陸後三日以内に、手札形寫眞二葉を持つて移民局に出頭し、上陸許可證を提示して入國許可證と引きかへてもらふ。一二等船客は、上陸許可證に但書さへあれば、引き替へに行かなくても同一の效力を生ずる。この手續を怠ると百盾の罰金に處せられる。

入國許可證の効力に關しては入國令の第六條に、

- (一) 入國許可證ノ正當所有者ハ交通及居住規則ニ遵ヒ二年間蘭領印度ニ在留スルコトヲ得、
- (二) 前項所定ノ期間終了後、本人ヨリ出願アリタルトキハ其ノ居住地所轄ノ地方長官ニ於テ各一年ヲ越エザル期間ヲ以テ二回及第三回目ニ於テハ六年以内ノ期間ヲ以テ其ノ延長ヲ爲ス

コトヲ得、

とあるから、始めは二年、次に一年づつ二回、次に六年、總計十年は通用する譯である。蘭領以外へ旅行の際は一年間は其の効力が繼續する。

三、定 住 權

入國許可證を持つて居ても、定住許可證がなければ、蘭領印度に定住するものとは認められない。入國許可證があれば定住權は不要のやうなものであるが、土地租借とか、色々民法上の問題になつた時に、その必要が起つて来る。一般に入國許可證の有効年限が延びたので、九年を過ぎなければ、定住權の出願が出来ないやうに解釋して居る向きもある——地方廳の役人にもさう解釋して居るものもある——がこれは責任ある司法省の回答によれば、何時出願しても差支へない。只、直に許可されるや否やは官廳の見込如何によると云ふのである。

精 榮 商 會

精榮商會はパレンバンに於ける唯一の邦人物産商である。糸川氏は神戸高商を出るや、南洋雄圖を志して、同志十數名と爪哇にやつて来た。然るに目指した人は一山師で既に退去命令を受

けて、その事業と云ふも空中の樓閣であつた。同志も四分五裂した。爪哇に残つた糸川氏は、賣藥の行商をやつたり、雜貨を商つたりして零碎の資金を貯へ、今はパレンバンに堂々たる商店を構へて、籐や綿花の輸出をやり、日本からは布類ゴム足袋など輸入して盛んにやつて居る。こゝから北方約二百五十キロのマンサンと云ふ處——こゝは籐の産地である——に租借地をもつて居る。こゝは非常によい土地であるから觀て呉れとの話であつた。ランチで明日の晝に行けば、翌朝は早く着くと云ふ。で、今日はパレンバンを大體觀て、明日はマンサン行と決定した。

ホテル・パレンバンに泊つた。パレンバンは他よりは暑いやうに感じた。暑いのはよいが水のわるいのは氣持がよくない。今水道が壞れて、修繕が出来ぬと云ふ。ホテルでは天水を蓄へて置く大きな槽がある。この水を濾して飲料水として居る。浴場の水もネバ／＼して氣持のわるいものであつた。併しパレンバンの邦人にこんなことを言へば叱られる。わが同胞は濁つた水を酌んで、十年も二十年も努力奮闘して地盤を築きつゝ來たつたのである。

水 の 都 パ レ ン バ ン

水の都パレンパンの市街は、ムシ河の河口より遡ること九十キロの處に、河に臨んで建てられて居る。河とは言へ、港には優に二千噸以上の船を容れることが出来、猶上流百三十キロまで外輪式小蒸汽船を遡江せしめ得る大河である。

汪洋として流れるこのムシ河の對岸には、三、四キロの間、水の上に浮ぶ商店が軒を並べて居る。店は大木を組んで筏とし、その上に建てられたもので、舟で川の上を來る客を相手とする商店である。水量の増加するに従つて、家は段々上にあがり、減水すれば下る。

御客様も舟でやつて來るから、いつでも店先に舟をつけて、買物が出来る。減水するときでも、梯子で上り下りする世話がない。

河上からは、米や薪や綿やバナ、などの物産を積んだ舟が來る。舟は筏の上の商店へ寄つて、それ等の物産を賣り、日常の必要品を買ひ整へて河上へ戻つてゆく。

その中には、竹で大きな筏を組み、その上に竹の小屋を作つて、物産をウンと積み込んだ筏もある。愈々物産を賣つてしまへば、次に竹の小屋を賣り、最後に筏を賣り、汽車に乗つて歸つてゆくと云ふのである。これが、一年中の收穫の終つた一番得意な時である。

パレンパンの市中には縦横に溝が通じ、無數の橋が架けられてある。雨期になると、水高増加

して、滿々たる黄濁の水は溝渠に充滿し、家の前も後も床下も一面水となる。否、始めから溝の上に建てられて居るのだ。大通りを除けば、床を高くして、すつかり浸水の用意が出来て居る。

ホテル・ユーリンにしても、前は大通りであるが、後はやゝ低くて、池の上に建てられた恰好である。見て居ると、池の中に菓子や果物等をのせた屋形船が這入つて來て、家から家へ物を賣り歩いて居る。池の中に這入つて屈んで居るものが、三人も四人もある。用便をたして居るのであらう。尙奇怪なことは、この用便をたして居る中間に、女の人々が顔を洗ひ、齒を磨き、髪をといて洗つて居る。その上、家の中からはバケツで、この池の水を酌んで居る。いよく以て助からない。市は大河に臨み、溝渠縦横に通じて居るのである。が水に居て水に不便である。

パレンパンは人口約八万、スマトラ南部の最大市場である。支那人とは古くから通商をして居つた處で、唐の天祐二年（西曆九百六年）の頃から支那に入貢して居た三佛齋は、今のパレンパンであると云ふ。その後爪哇に併吞されて以來、支那との交通は漸次衰へた。

和蘭の直轄地に歸したのは、今から約百年前（一八二五年）のことで、可成り烈しい抵抗の後

であつた。舊王城は兵營と病院になつて居る。

パレンバン地方の産物として、著名なるは石油で、胡椒、藤、珈琲、棉花、檳榔子などがある。

慄悍なる民風

永らく支那の影響を受けた關係か、パレンバンの土人は商業に機敏である。民風も慄悍で、今でも命知らずの奴が多い。警視廳のブラツクリストに載るやうな浮浪人も多い。喧嘩の時には先方をなぐりつける疵つける、といふ位ではやめない。短刀で心臓のところを刺すのが、通例になつて居るさうで、パレンバン人だと言へば、一般に恐れられて居る。それで何か不都合なこともあると、

俺はパレンバン人だぞ！

と威嚇す。これは腰の短刀に手がかゝつたら最後、貴様の命はないぞ、と云ふ意味である。

この地方の婦人は、決して他人に顔を見せない。外出のときには、尼僧のやうな大きな笠を被り、眼だけ出した布をその下に掩ふ。

土人は智能も一般に他より秀れて居る。特に、商業的の才能に至つては、スマトラでは、西海岸のバダンと相對して、巖然一頭地を抜いて居る。住宅にしても、堂々たる家屋が棟を並べて居る。爪哇人のやうな竹の柱に茅の屋根ではない。又金のある點から云つても、他處では大商店は大抵支那人の經營であるが、こゝでは一に土人、二にアラビヤ人、三に支那人であるから、流石の支那人もパレンバン人の働きには及ばないといふことになつた。

フキフキ教

こゝにも立派な回教の寺院がある。アラビヤから恐ろしい勢ひで東に漸んだ布教運動が、スマトラの北部アチエの一隅に押よせたのは、今より六七百年前のことであつた。次第に運動熱が高まり、遂に白熱化して、それから二百年位の間に殆ど南洋全部を回教國としてしまつた。

回教も聞いて見ると中々やかましい形式がある。子供の頃に割禮と云ふことを行ふ。これで回教徒たる第一資格が得られるので、割禮を行はぬものは神の恵を受ける資格がない。割禮は重い儀式で、王宮には割禮殿があり、普通の家では大祝宴が張られる。割禮は局部の皮を切るのであ

る。修行の五ヶ條、

第一、無始無終唯一至上神アラーの信仰。

第二、一日五回以上の祈禱禮拜。

第三、回曆九月一ヶ月間の齋食。

第四、聖地メツカへの巡禮。

第五、敬虔なる信者への喜捨。

仕事の具合で一日五回出来ないものでも、朝夕二回は必ず水で身體を清めて禱る。川ばたに行つて觀ると、若い者が妙な手つきをして、ゴニヤ／＼と口で唱へて、起つたり坐つたりして居るが、これが祈禱禮拜である。

一ヶ月間の齋食は、日のあるうちは食事を口にしないと云ふので、これは勞働などするものには困る。ある雜貨商の日本人が、金の催促に行つたら、

「そふガミ／＼言ふても、今ブアサだから腹がへつて頭がガンとして居て、何を言ふとるやらさつぱり判らん。」

と言つたと、一ツの笑ひ話になつて居る。

土人に一生の願ひは何かと聞いたら、一度メツカに行つて、教祖の聖地に巡禮することだと言ふ。一度巡禮をすませば、「ハヂ」と云ふ尊稱を以て一般に先達格として優待される。奇特なものは二度も三度も參拜に行く、粗食の上長途の旅行であるので、途中病氣にかゝつたり死んだりする。今は餘程便利にはなつたが、昔から難行苦行の修業となつて居る。蘭領から年々、二三十万人は行く。

同宗の人であれば、未知の人異國の人でも、困るものには食を與へ、衣を頒つ。それで彼等と交際するに便利だとて、日本人——現に識つて居る人——で回教を奉じて居るのがある。

金を貸しても利息はとらない。一定の生活を支へる以上に米穀の貯藏をしない、一切はアラー神の御心に御任せして、窮達を運命と觀じて悔まない、歎かない。これは達人の域に達したやうであるが、凶年の不作は神様の御意志で仕方ないとして、害虫までが運命では農事改良などは望めない。甚だしいのは運轉手に何時に着くかと聞けば、

「神様が支障なく着かして呉れ、ば何時には着くと思ふが、それは判らない。」

と便りないこと夥しい。ある日本人が、知人の土人の子供が死んだので、可哀さうだからと悔
に行つたところ、埋葬を終へて歸宅し、手風琴を弾いて呑気にやつて居たと。

回々教徒は絶対に酒をのまぬ、と云ふのは良いことである。これは嚴重に守る。豚は決して食
はぬ。山羊は儀式にもよく用ゐられる。又四人までは妻を持つことは許されてある。これも精神
的に物質的に凡べて平等の待遇と云ふのだから、これ以て中々容易なことではないが、村長で金
のあるものなどは、四人位の妻がある。果して平等に皆やつて居るかどうか、不平等の事實があ
ればいつでも離婚が成立する。

近來回教の布教運動は眼ざましい勢ひで活動して居るのは刮目に價する。

パレンバンの日本人

娘子軍全盛時代には、パレンバンの日本人にも氣荒な者が多かつたので、日露戦争では彈丸雨
飛の中をくゞつて來たとか、何處その大喧嘩に勝つたとか云ふ輩でないと、一寸幅がきかなか
つた。中には自ら村長を以て任じ力みかへつて居た人などが居た。

大勢集まつて飲んだところが、平生の勢力争ひから、物言ひが始まり、ビール瓶が叩り、コッ
プが飛び、合口がひらめき、醫者騒ぎとなり、幾日もゴタゴタしたあとで、やつとケリが付いた
と云ふやうなことがないと、宛然世間が死んでも居るやうに、寂しく感じたらしい時代もあつ
た。

その中に時勢は進み、堅實なる營業者も出來て來、十年ばかり前に、一晚のうちに二人の賣笑
婦が殺されたことがあつたので、それを機會に、賣笑婦は嚴しい御法度で禁制となり、豪傑連も

冥途へ出立したので、段々着實なものが根強い根柢をつくるやうになつた。
今、日本人の數を見ると、戸數は二十三万で、人口は八十餘名である。皆、大なれ小なれ、手
堅くやつてゆけるやうになつた。職業は、貿易商、雜貨商、旅館、寫眞屋、飲食店、理髮屋など
である。

貿易商では、精榮商會の糸川君。雜貨では南洋商會の松井君。それから、宮崎、渡邊、松林、
登本の諸君が居る。旅館では、中村、高山の兩君である。

マンサン行

マンサンへは、ムシ河を下りて一度び外洋に出、それからバンジャシン川の入江を遡り、更にラン川を遡って行くのである。

ランチも上等で危険のなさうなのが契約出来た。

パン、コンビーフ、バナ、菓子、飲料、毛布などは糸川氏が用意して呉れたが、何かと準備に手間とれて、愈々乗り出したのは午前十時であった。

ランチは長さ十五メートル、上甲板とでも云ふべき處には、テーブル一脚と數個の椅子を並べるだけの場所がある。その真下にあたる處に寢臺が二ツある。船尾の方には、炊事したり船員の休息する場所もある。船は土人の持船で、機關長始め皆バレンバン人である。

船はムシ河を流れて沿ふて下る。石油會社の處を通りぬける頃から雨が降り出した。熱帯の驟雨が沛然として椰子の葉を揺がしてやつて来るのは、男性的で萬物蘇生の感があるが、今雨期でもないのにジメ／＼と降つたりやんだりして居るのでは、折角、一坪程の上甲板の樂天地も幕で

包まれてしまつて、陰鬱の上もないのであるが仕方がない。黙つて居ては猶以て面白くないのでピールの栓を抜いて談話に興じた。永年藤を探りにこの川を上つたり下つたりして居る、案内役の金津君は鰐について盛に話した。

夜、船でこの河を通るとき、懐中電燈で遠く水面を照すと、先方にルビーのやうな眞赤な光を放つものが見える。これに狙ひをつけて鐵砲で一發やる。と命中すれば水を跳ね上げて、すつと水底に沈む。急所にあたれば、三日程経つて魚につゝかれた死骸が何處かへ浮び上る。

鰐は岸邊の泥ノ中に卵を産む。土人は見つけても、若しこれを取つて歸れば、鰐は必ずその跡をつけて家まで来るので、決して卵はとらぬ習慣になつて居る。

又この邊の林には猿が澤山居る。數匹手足をつないでブラ／＼やつて居る。岸邊に出て遊んで居る。かういふ時にその油断を見すまして、突然に襲ひかゝつて、鋭い鋸のやうな齒でぱくりやつてしまふ。猿も敏捷な奴ではあるが、不意打を喰らつては木に攀る奥の手を出す隙もないらしい。

今一つ、

それはどこかボルネオあたりの話だと云ふが、鰐と犀とが川邊で喰ひ合ふて居たことがあつた。鰐は犀を水中に引き込まふとし、犀は鰐を陸に引き上げやうとする。互に死力を盡して闘ふて居る最中にこれを見つけたのは人間だ、どつちに加擔したものかと考へた。そこで、鐵砲を構へながら鰐の皮と犀の角と價段の比較をして見たら、犀角の方がズツト高價であつたので、犀の方はズドンと撃たれた。

ある獨逸人が象をうちに行つた歸りに船で眠つた。眠つた丈けなら良いが片足を船べりにかけて眠つて居る間に、鰐にパクリと脚をくわれた。

こんな危険があるのに、この川の下流の方では、川の中に這入つて鰐をとるのを生業にして居る土人もある。

こんな話をきいて居るうちに、雨はだん／＼小止みとなる。雨被ひをとれば日没が近くなつて居る。夜は船の航路を誤らぬ爲め點燈をしないので、日のあるうちに夕食とした。

日が暮れてからは眞の暗となる。側では發動機の音が益々高く喧しく響く。舵手の土人は何の呪か、船辨慶のやうに高らかに經文か何か誦する。お互の話などはこれらに妨げられて一向に

聞えぬ。金津君は探照燈をとり出し、しきりに鰐の眼を探して居る。「あそこに居る、居る」と云ふ。如何にも指し示す方を見れば、赤い寶玉のやうなのが光つて居る。

眞暗で何も興がない。寢臺にもぐり込むもあれば、椅子を向ひ合はせて猫のやうに屈りこむもあり、床の上に外套を被つて假寢の夢を結ぶもある。

いつか知らぬ間に眠つた。船の震動がとまつたので眼をさます。船はマンサンに着いたらしい未だ夜深い、また外套を被つて眠つた。

眼が醒めると夜は明けて居る。川霧が立ち籠めて居るが天氣は良いやうである。川中が廣くて水平に蜿蜒して、上流も下流も樹木に被はれて居るので、大きい池のやうに見える。人家十數軒點々として居り、川邊には小舟が二三艘繋いである。

この邊の土人は、「クブ」と稱する種族で、マホメツト教もこゝ迄は侵入しなかつたのか、全くその影響はうけて居ない。産業は山の奥から籐を探りて背負ひ出す、護謨をつくつたり、米をつくつたり、タピオカを作つたりして日常の糧を得る。

バレンバンからこゝまで十七時間を要した譯で、一時間十四キロの割で進行したとすれば二百

三十八キロの距離である。不用の品物は船にのこし、土人に鐵砲をかつがせ、食糧をもたせ、一行七人、細徑をたどりて森林の奥深く這入つて行く。

森林に這入ると雑草雑木の間にゴムが亭々として、生々と綠葉を四方に張つて居るのが見える。これは土人の植えたもので、一般に土人ゴムと稱して居る。ゴムの値が下がれば放棄しておく。が値が出たとなれば一時に採集を始める。そのタピツングの亂暴なこと。切線の角度など急なものがあり、緩やかなものがある、深いのもあれば浅いものもある。而もその切り痕は瘤だらけ、疵だらけで手のつけられぬものである。液汁も切口の溝以外に數條に流れ下る。容器は陶器でもガラスでもなく、竹の筒を半分に割つたものである。

土人護謨が栽培業にとつて大なる影響をもつのは、全く經費をかけぬ點である。次は、範圍が廣いから數の多いことである。

三キロ五キロと進んで行く。道側にタピオカの畑も見え、甘蔗畑も、水田も見える。土人は四メートル程の高い柱を立て、その上に小屋を造つて住んで居る。猛獸の害を避けんが爲めであらう。

奥に進めば蟲々天を摩すと云ふやうな、途中に枝もなく頂點に行つて枝を四方に張つて居る樹木の高さ三十メートル位のものが押し立たつて居る。下の方は雑草雑木森を埋め、綠葉天日被ふて、葛蔓纏ひつき、千古斧鉞入らざる處女林の清容太古の面影がある。丈の高い木で筆を押し立てたやうなのを此邊でムランチーと云ひ、根本が急に太くなつて居るのをマチャーンと呼ぶと云ふ。

籐は馬來語で Rotang (ロタン) と云ふ。籐にはいろいろある。細かに分類すれば二百餘種類ありと云ふことである。始めは蔓草のやうに見える。この莖には一ばい刺がある。この刺が猫の爪のやうに物が引つかゝるやうに出來て居るので、これにかゝつたら大變。森林の中を歩くの一番の難物である。細い蔓は始めは空中に向つて高く伸びて行く。五メートル六メートルと伸びて行く間に、何處か近所にある大木の方へ段々近よつて行つて鋭い爪をかけてしまふ。爪がかゝればそれからそれと傳はつて何處までも延びて行く。

竹籐と云ふのは籐細工や、物を結束するのに用ふ。洋杖にするのは天竺籐で、水の出るのが水籐である。こゝからは、天竺籐も、竹籐も、水籐もでる。洋杖にするには、眞直なところだけを

切りとりて、磨きをかけるのである。

水籐は、二尋程も切りとつて倒にすれば、滴々たる甘露はビール瓶に一ぱいに溜る。山中で咽のかはいた時などはこれで助かる。天の攝理至妙、人を養ふの道至れり盡せりである。

山の奥の方からは、土人の乳もあらはに重い籐の荷を背負ふて来る。

山の中でクツクツと鳩のやうな啼聲をきく。これは鳩かと思ふたらンヤーマンと云ふ黒猿の聲である。

歸りには、静水緑樹に圍まれた湖水のやうなラン川を下り、廣い入江に出た。折しも満潮波高く危険であつたので、外洋に出るのは潮の退くを待つこととして、入江で夜を明かす。外洋に出て岬をめぐると、長江海の如きムン河である。三十キロ程遡ると、こゝに河の上に建てられた人口三千のスイサンと云ふ町がある。

スイサン街は河の中から岸にかけて、五メートル位高く杭を立て、それに人家を建て並べてある。川に臨んだ處には板敷きの道路が一キロも續いて居る。商店が川に向つて立ち並び、後陸に

かけて町形をなして居る。船からは不恰な梯子で登るのであるが、雨季満水の頃には、板の道と川水とは文字通りに水平になるらしい。

こゝには税關があつて船を改める。トルコ帽を被つて、サロンを纏ふた税關長が棧橋の上に立つて居る。こゝに暫時船を停めて街に上る。

板敷の街道には一面に藺草のやうなものを干したり、商店には土人の日用品をゴタ／＼並べて賣つて居る。普通の町であるが、只水の上に建設されてあるのが珍らしく感ずる。

清涼の樂地チュルツフへ

パレンバンから西海岸の、舊英領時代總督府所在地のベンクレーン（地圖にはベンクルー）には國道が通じて居る。この間に南北に亘る蛇々たる中央山脈が聳へて東西を劃りて居る。この中央山脈一帯の高地は土地が肥えて居り、氣候が涼しく、物産も豊富である。就中チュルツフの高地は國道に沿ひ、土地も廣く珈琲の産地で、ベンクレーンから八十三キロ、パレンバンから約四百キロの地點である。途中ラハ（Tahat）迄二百廿七キロは汽車が通じて居るが、それから先は今工

事中である。汽車はないが自動車は澤山ある。

今度は先づチュルツプを訪問してそれから他を視ようと云ふのである。

自動車の後に荷物をくくりつける。途中食糧の用意などは高田君が奔走して呉れる。精榮商會に行つて、挨拶、今後の打ち合せをしたりしたので、出懸けたのは十時過ぎであつた。

自動車道路の基點も、停車場もムシ河の對岸にあるので河を渡らねばならぬが、この長江には橋がない。自動車を筏にのせ曳き船で引つ張つて行くのであるから中々厄介だ。

筏は自動車を乗せて曳き船によりて靜に岸をはなれる。河は二百メートルもある。漫々たる濁水を横ざりて中流に出る。上るサンパン下る商人船、往さ來るさ中々賑ふ。サンパンには日傘をさした男の人、尼僧のやうな笠をかぶつた女達が居る。商人船には菓子や、果物など奇麗に飾りてある。

船は十五分許りで先方に着する。上陸するところ、停車場がある。國道の基點もこゝである。高田君が態々チュルツプから自動車を持つて來たので自動車で行くことにした。

汽車の方は、午前六時と午後一時と、一日に二回發車するだけである。夜行と云ふものは、蘭

領何處にもない。

雨期になれば、森林のうちに洪水汎濫して、國道を破壊するので、自動車では通れない。この時期に汽車で通つてみると、森林の中に舟を操つて居るのが觀られる。

乾季には自動車を通つては出来るが、タイヤに彈かれた小石が、けたましい音を立て、車體にぶつかり、肝を冷させる。道が荒れて居るからである。

沿道一帯は低濕で、肥瘠混交である。肥えた處があるかと思へば、一キロも行かぬうちに、ランとかカーカーとか云ふ鬼萱のやうなものが生へて居る瘠地がある。標高が高くなるに従つて土地も肥えて居るやうに見える。

夕方近くムアライニムの町についた。こゝはムシ河の支流レマタン川の上流である。パレンバンから百八十五キロ、汽車ならばパレンバンから五時間、荷物を積んだ自動車でも六時位でつく。

この邊は宿るには官營宿舍がよいので、その外は支那人や土人の怪しげな家である。前に電報をうつて置いた譯でもないので、次のラハマで行つても部屋があるかどうか判らぬから、少し早

いがこの官營宿舎に交渉して見ることにした。幸ひ部屋があると云ふので、此處にとまることにした。

スマトラには、要處々々に官營宿舎がある。普通のホテルと同じやうなものであるが、宿舎の設立は官でやつて、經營は受負である。經營者には手當も呉れて居る。經營者は、客を泊める時には先約があるかも知れないから、一應郡監督官に聞いてみて、差支へない時に泊めるのである。宿料は、部屋代が二盾、食料は二盾五十仙、別に、珈琲はいくら、飲みものは何程と、非常に安く出来て居る。

このムアライニンの官營宿舎には、部屋が五つあつて、單獨の部屋も、寢臺二つの部屋もあるから、七八人は泊められる。

官營宿舎は、町から少し離れて居る。その途中に、臺灣人の寫眞師でヨーさんと云ふ人が店を開いて居る。自ら日本人を以て任じ、得意になつて居る。ケー・ヨーとはどんな字を書くのかわからない、日本語がうまい。日貨排斥についても一週間前から、日本品を賣らぬ、と云ふ決議をしたが、皆んな勝手な懐勘定からやつて居るので……と、冷眼視して居る。ヨーさんのとこ

ろから風景畫を買ふ。錢は要らぬ、必要なだけ御持ちなさい、と大いに氣前を見せたが、適當と思ふだけを無理に置いて歸つた。

外に小谷と云ふ藥屋がある。日本人がこの町に引き越して來たり、來たかと思へば直ぐ行つて仕舞つたりする中に、兎に角一人で此處に頑張つて居る。小谷君も藥屋で終始して居るやうだが嘗ては山に引つ込んで養鶏をやつて見たが、卵は蛇にとられて閉口して居るうちに、今度は鶏コレラで皆死んでしまつたので失敗した。それからラムネの簡易製造も始めて見たがこれも面白くなかつた。君は、

「矢つ張り馴れた仕事だ、薄利でも一番間違ひありません。」

と言つた。日貨排斥については、

「何を言ふても、支那人の多い町だから響きますが、病氣の時には藥だけは是非とも買はねばなりませんので、後先き見廻し、人の居らない時に、飛び込んで来てひつたくるやうに錢を置いて行きますよ。しかし土人の方もありますから大した事はありません。」

官營旅舎の夜は静かであつた。他に二三の客はあつたが、蘭人の旅客は小聲で語り、つまし

やかにやつて居るので、安靜を亂さるゝやうなことはなかつた。

朝になると頼んで置いたので、ボーイが途中の辨當にサンドウキツチ、鶏卵、牛乳を持つて来た。厚い紙の袋に入れて、手提の紐までついて居る。中々気がきいて居る。

午前八時に出發した。

ラハはモアライニムより四十二キロ、鐵道の終點である。ラハは日に日に發展して行く町であるが、どう云ふものか邦人は只山本と云ふ婆さん一人がホテルを經營して居るだけである。

ラハの町を出て、森々とした緑林の打ちつゞく中を縫ふて行く。今日は如何なる日か。村の乙女や若者達が、小ざつぱりした着物をきて打ち群れてやつて来る。一寸、車を停めて寫眞機を向ける。乙女たちは笑ふて、快よく寫眞機の前に並ぶ。

山の麓をS字形に曲りくねつてゆく。道は良い。ルーフで奇麗に道ならしをして居る。土人は五日目毎に、官役として道路補修に出るのである。自動車を通ると、工事をして居る土人のうちには、起立して丁寧に目禮するものもある。植民地に於ての英國の銀行、佛蘭西の音楽、西班牙の宗教と並んで、和蘭の道路に力を盡すことは、至れり盡せりである。

學校へ行く途中であらう、子供が白い上衣に白の半ズボンでやつて来て、行儀よく道に並んで舉手の禮をする。このところジャパン・トゥアン(日本旦那)大もてである。

この邊の民家は、「高天ヶ原に千木高知り、底つ岩根に宮柱太しき立て」と云ふやうな趣きがある。

丈二メートル許りの太い柱を地中に埋め込み、その上に家を構へる。床が高いから梯子を以て上る。上つた處に神社ならば拜殿と云ふ恰好で、家族の休息所がある。扉を開けば、寢室兼物置となつて居て、三方板圍ひで窓と云ふものがない。屋根は多く草葺で、頂點の兩端には破風がついて居る。

若し、家の周圍にある椰子の樹に代ふるに杉を以てしたならば、わが神社の境内そのまゝである。特に、倉庫たるものは全く住宅に似たもので、只それを小さくしただけである。倉庫には休息所はない。これが、いくつもいくつも並んで居るところは、神社の前に末社が並んで居るやうな心地がする。(口繪参照)

附近には便所らしいものがない。便所は川屋(厠)であつて、丁重なのは川の中に特に設けて

あるが、普通は只、水中に腰を没して屈むだけである。

路は坂を上り坂を下る、兩側の樹木は鬱々蒼々として林相の美を極めて居る。日本ならば土質氣候により、松林とか、杉林とか、略一定して居るのであるが、こゝは人工的に配合したやうに實に千差萬別である。百數十尺蟲々天を摩するものがあるかと思へば、倭小椿に似たやうなものもある。竹がある、蕨の太木がある、芭蕉がある、梢の尖端のみ紅に、花かと思ふものがある。その色彩から言ふても、深緑、淡緑、萌黄、赤、黄、參差錯綜、配合の美、調和の妙えも言はれぬ美觀である。この間を蜿々長蛇の如きつゞら折りなる道路は、迂餘曲折して樹林の間を縫ひつゞ、坂を上り坂を下る。

チユルツプの沃野

テピンチンギの町を通り抜けると、分水嶺の最高處にかゝる。オスピタル・ピリンギン・テガと云ふ。こゝは標高八百十餘メートル、氣候もズツと涼しいので、この附近に農園を持つものも共同して、病院を建て、ある。

こゝを下りて、竹の密林のある坂道を下ると、こゝにチユルツプの沃野は展開して居るのである。

チユルツプの沃野は、中央山脈中の高地で、パレンバン市から、西海岸のベンクラーン市に通ずる國道筋にあたる一大盆地である。東南には、この盆地の鎮めであると云ふやうに、標高一千九百四十メートルのカバ山が踞然と座り込んで居る。ホテル・ピリンギン・テガのある分水嶺の連山は、延々として北西につゞく。西南の一方は深溪幽谷。西海岸の方面だけは、天の一方が開けて、綠樹の上に直ちに蒼空を望み得らるゝ。

幾十の溪谷から流れ落ちる溪流を集め、この盆地の底部を流れるのがお馴染のムシ河である。ムシ河は中央山脈に源を發して、パレンバンの平野とは全く反對の西海岸に向つて急速に流れる、と見れば急に氣をかへて、カバ山の麓を巡り、中央山脈の溪谷をめぐりめぐつて東海岸に向ひ、汪洋として平野を潤し、パレンバンからゆくこと九十キロで海に注ぐのである。

カバ山は山頂まで、密林を以て被はれて居り、麓から山腹までは、各會社の珈琲園がグルグル巡つて居る。珈琲園を貫く國道筋は、土人部落が街型をなして點々として續く。

道側にはカボツクの樹に電線が張つてある。カボツクの生木を電柱として立てると、やがて、根が生え芽を出し花も咲く。スマトラでは、電柱に花が咲くのである。

氣持ち良き翠緑に觀とれて居るうちに、自動車はチユルツブの街に入る。

チユルツブ町

チユルツブは大盆地の中心に位置を占めて居る町である。戸数は今のところ一千位のものであらうか。しかし、僅か數年前までは雜木、雜林であつた處も、今は一メートル平方何盾と評價せられる程、それ程急激な發展振を示して居る。郡監督官のある處は、カバヤンと云ふてこゝから二十餘キロを距てたところにあるが、この肥沃なる盆地の行き詰りで、位置が中心を離れ、偏在して不便であるので、郡廳舎は遠からずこのチユルツブに移轉されることになつて居る。

近頃、大チユルツブ市建設の計劃が出来た。兵營の敷地も出來、製米會社は設けられ、自動車の置場、市場等が完成される。競馬場、運動場も出来る。大廣場が街の裏通りに設けられ、それを中心にして四方に廣い新街路が造られ、その街路の兩側は、新しき家屋法による各戸の區劃が決め

られて居る。

チユルツブの町には、數人の日本人しか居らない。この町の雜貨兼寫眞屋の高田商店が日本人會の會長で、一方には三笠園を持ち、數年養蠶の試験をやつて居る。ホテル業に鹿田君が居る。領事が見えたとき、この附近の人達の歡迎會を開くのがこの家である。外に、おりん婆さんと云ふのが居てホテルをやつて居る。猶ほかに二三軒はある。

快適なチユルツブの氣候

チユルツブは海拔五百メートルから七百メートル位の處にある。随つて氣候は涼しい。乾季は雨季に比し、暑いときは幾分暑さが強く、涼しい時は幾分涼氣を餘分に感ずると云ふだけで、大體大差はない。夜明け前の最も冷やかな時が五十度から六十度、日が出れば七十度、次第に昇つて、午前十時から七十七八度、午後二時から八十五六度に昇る。雨季には、午後三時頃は俄に天が曇つて驟雨がザーツと來る、と夕刻は七十度臺に降る。月清く、蟲の鳴く聲滋々として、涼風や、肌寒く感ずる夕食後の心地は、全く信州の高原に於ける八月十五夜頃のやうである。

日中暑いと云ふときでも、野外を散歩するにその気分は、軟風肌に快よく遊絲立ち昇る陽春四月と言はんよりは、金風ソヨ／＼としてどこか身體を引きしめる涼秋九月の心地である。

雨は乾季でもかなり降る。截然たる乾雨兩季の區劃といふものは、チユルツプには無いらしい。かく雨は年中略々均齊に降り、且つ、水源地涵養の意味で、高山の樹林は政府が保護林として居るので、かゝる高地であり乍ら溪流滾々として涸れることがない。三笠園に御厄介になる。綿入れの寝着と毛布二枚を貸して貰つたので、夜寝るには寒くなかつたが、夜明けには五十八度であつた。鳥の轉る聲に眼をさまし、起きて表の戸を開ける。前の庭にはダリヤや朝顔、その他熱帯の珍しい花が咲いて居る。

カバ山は翠緑を以て被はれたる孤立した山であるが、去り迎、圓錐形に兀として天空に聳えたと云ふのでもない。と云つて布團着て寝たる姿としては少し堅過ぎる。兎に角、穩かな平和な感じを與へる山である。朝日はカバ山と分水嶺のあたりよりさし登る。洗面所の水は奇麗でつめたい。側の井戸をのぞけば數尺の處に、水は滾々として湧いて居る。ポンプの柄を少し動かせば清冽な水は忽ちセメントの水槽に溢れる。

靜かな平和な光景である。

人生は享樂、無邪氣な土人

チユルツプ地方の土人はレヂヤンと云つて、他とは一種別である。パレンパンの凶暴なく、パダンの機敏もない。昔は交通不便で、蜀の棧道よりもひどい峻坂を登らなければならなかつたので、豊沃の土地ながら攻略の難にも遭はず、桃源夢裡に過ぎて來たものらしい。

土地は有り、食物は豊富と來て居るから、何も努力する必要もなければ、喧嘩の要もないので子供の喧嘩と云ふものさへ、見たことがない。

若い時に遊ぶでなければ、ホントの樂しみは味はれない、遊ぶのは若い時に限る、と云ふのがこゝの土人の人生觀である。實に享樂については徹底して居る。

近頃はハイカラな青年が自動車を買ふて、運轉手となると云ふことが流行し出したやうであるが、普通の若い男女は、家の前や道傍を只ブラ／＼して居る。

牛車を引く人畑に働く人は皆、中年以後の者であるが、これを世間は普通のこととして怪しま

ないのみならず、年よりが遊んで居たならば、若いものを働かせて、と批難されると云ふのだから驚く。

この土地で企業する上に於て、一番便利の悪いのは労働者を得られないことである。年とつてから一寸働けば食つてゆけると云ふのだから、人の家になど傭はれる必要はないのである。傭はうとするならば、附近の農園に契約苦力として爪哇から来た者で、契約が満期になつたから何處か日本人の家で働いて見たいと云ふ者を、農夫として、或は女中として傭ふの外はない。しかしかゝるこぼれを拾ふのだから時々悪事を働いて逃げ出し来たものや、變な奴に引つかゝる。爪哇に於ける如く、一里も遠くの者が、今日は御用はありませんか、と聞きに来るとは大變の違ひである。

土人は、平地にいくらでも土地があるのに、好んで近所隣もないやうな處に家を造り畑を作る。

ある時、國道からカバ山に向つて六キロ餘り這入つてみたところ、喬木と巨竹とが深さ千尺の谿を埋づめて居て、晝なほ暗く、僅かに葉陰を通じて、下に涼々の谷川を俯瞰する位の處に出た。

それから谷川を越し、上に下に探して、漸く途らしいものを見付け出して、その上に登つて見ると、驚いた、峯の嵐か谷川の響きか、と疑つたが、さに非ずしてオルガルの音であつた。かゝる山中に樂器の音をきくと、人跡絶えたる山奥に伏姫が仙童の牧笛を聞いたもかくやと思はれた。

その日は市日と見えて、買物をした男女の幾群かが重い荷を負ふて山へ歸つてゆく。

この人達は丁寧な言葉をかけて挨拶してゆく。その中に、嬢に娘に子供を連れて居る一人の老人があつた。手には生きた鶏を持つて居る。聞けば孫の割禮の祝に家族一同で二晩泊りで祝儀に行つたが、鶏だけ家に残して置くのも可哀さうなので、往復四里もある處を鶏を抱へて行つたのであると云ふ。その風貌は實に無邪氣そのものであつた。

小企業農業者の理想郷

チユルツプは氣候がよく、健康に適し、土地も肥え水も饒である。國道は通じ小市街を控えて居、コーヒーを賣る機關は整ふて居り、米でも野菜でも、卵でも山羊でも高價に賣れる。小企業

の農業經營者には、理想的の樂園と云はねばならぬ。

チュルツプの町から二キロの處に、デー・フイレと云ふオランダ人が住んで居る。この人は三十年前に、金鑛ロボン・シンパンの鑛山技師として來たが、今は日本婦人の妻と只二人で、地所十バウ位を購入し、家を建ててコーヒーを育て靜かに老後を楽しんで居る人である。

一日この人を訪ねた。附近の土地など案内して説明して呉れた。

この邊は近來高くなつたが、原野で一バウ八十ギルダールか百ギルダール出せば國道に沿ふた處が手に這入る。一バウの原野を奇麗に畑にする迄には百五十ギルダールあれば宜しい。コーヒーの收穫は一バウで千ギルダール以上はある見込で、生活費は極めて安く上がると云ふことであつた。

フイレ氏の家は、三千ギルダール位はかけたかと思はるゝ整ふたものである。これより先きの方に今一軒、永年郵便自動車の運轉士をし、恩給を貰つて、土人の妻と三人の子供とで小農をやつて居るのがあるが、これなどの家は頗る簡單で、ランの草葺で、壁は竹を網代に編んだものである。大部分は自分の手間でやつたので二百ギルダールで出來たと云ふ。

只、この邊は土人は、前にも一寸述べた如く相當收入があるので、他家に雇はれると云ふこと

を好まない。が附近のコーヒー園に來て居る契約爪哇苦力で、契約期になつたので、此方に居たいとか何んとか云ふのがある。これ等は食事なしの一日八十セントか一ギルダール位で雇へる。

今、この地方の農産物を調べて見る、

珈琲 コーヒーと云へば、ブラジルのサンパウロ州が本場である。けれどもコーヒーの栽培

は爪哇の方が先きであつた。原産地はアラビヤのモツカであると信ぜられて居たが、今ではアビシニヤの南部カツア地方で、そこからアラビヤに移入されたと云ふことになつて居る。

扱て爪哇の栽培はと云へば、一六九六年で、歐洲へ積出されるやうになつたのは、一七二二年である。がサンパウロの方は、すつと後れて十八世紀の初め、佛領ギアナの方から移植されたものである。

サンパウロ州のコーヒーが、非常な勢ひで發達し、年額二千万俵も出すやうになつて、南洋のコーヒーは經濟上大打撃を蒙つたところへ、一八六九年に始めて錫倫に發生した病菌は、葉を犯し、果實に及び、遂には樹迄を枯らしてしまつた。これは風のまに／＼飛び散つて、錫蘭から、馬來、爪哇、スマトラ、果てはアフリカ迄も蔓延した。

これ迄の最も優良種であつたアラビカ種は、病菌で絶滅の悲運に陥つたので、次にアフリカから持つて来たのがリベリカ種。この方は病菌の抵抗力ありとせられたのが、少し経つと駄目になつた。これで南洋のコーヒーも絶望と悲觀して居たところへ、白耳義の商人がアフリカのコンゴ地方から、現在のロブスタ種を移入した。これは抵抗力もあり、栽培が容易で、生長が早く結實も多い。これで漸く一道の光明は見出された譯である。

この地方はカバ山を廻りて一體に珈琲園であるから、たとへ一俵でも二俵でも持つて行きさへすれば賣れる。

土人の珈琲の作り方は亂暴で、珈琲の實の落ちたのを拾ふて来て、無雑作に畑に蒔つける。味の適否も種子の良否も、そんなことには頓着しない。一パウに千本を仕立てる。一本三斤位の收穫があつたと云ふから三十擔、一擔が本年の相場で三十五ギルダに賣れたと云ふから、千ギルダ以上の収入があつた譯で、草だらけの園で餘り収入があり過ぎるやうであるが、兎に角土人は放任して置いて、必要に應じ摘んでは賣つて小使錢を得て、裕福にやつて居る。

落花生

馬來語で Katjang-Tanah とか Katjang-Tjina とか云ふ。カツチヤンは豆、タナは土地

だから地豆で、チナは支那だから、日本で南京豆と云ふのと同じ意味である。用途は領内では、製油、菓子、食料等で、輸出も製油が主である。落花生には幾つか種類はあるが、この邊のものは三四ヶ月で成熟する。これを灸つたものを街で賣つて居る。子供も大人も喜んで食べる。

土人の作つて居るのを聞いてみると、前作で落花生をつくり、後で馬鈴薯か何かつくる。前作の方で一パウ二百五十ギルダから、三百ギルダはとれると云ふて居た。

米 稻は水田にも作る、陸稻もある。こゝでは水田よりも陸稻の方が、收穫も多く味もよいとされて居る。一パウから七石から十石、日本在來の計算なら、反當り一石から一石四五斗と云ふところである。

米粒は細長く質は脆い。土地は何程でもあるが、米は不足でシヤム米が大分輸入されて居る。珈琲とか、煙草などの方が割が良いので、米は作らずに買つてたべものが多し。米は一俵五ギルダから七ギルダ五十セント位のところである。價のよい時は十ギルダ以上にもなる。

菓は脆くて用をなさぬので、稻の穂だけ熟したのを摘みとる。收穫に手数がかるのでムアラアマンの鑛山町の附近では、收穫者と地主との収入が折半だと云ふ話であるが、普通は收穫費は

二割と見て置く。收穫した穂は束にして積んで置き、必要に応じて足で踏んで穂を落とすのである。これを白米にするには、家々で三メートル程の長い棒で搗くのであるが、この邊は水があるので處々に水車が仕掛けてある。

この邊は年一回の收穫である。が二年に三回と云ふところもある。

肥料をやることを田の神様を汚すやうに心得て、手入れは一向しないのであるが、若し日本人の手でやれば、選種、耕耘、除草、施肥の結果、優に二倍の收穫を得るのは、さして困難の問題ではない。

玉蜀黍 米に代はる程重要な作物である。瘠地で一バウ五擔、肥えたところで十七擔はとれる。

この邊では自家用に消費する。併し、瓜哇から輸出するのが一年七八万噸はある。

この外、煙草、家畜としての山羊、乳牛、養鶏、野菜、なんでも資金に應じての複收入の道はある。

ムアラアマンの日本人

チュルツプの西北七十七キロの山中に、ムアラアマンと云ふ鑛山町がある。こゝは金鑛で、蘭領東印度政府の經營と、その附近に蘭獨經營の金山があるが、今は探堀量もだん／＼減じて従前程の優勢さはなく。

七十七キロの間崎嶇たる山道ではあるが、幅六メートルの自動車道路が通じて居る。道の兩側には、高さ十五メートルからある巨木が、頂點近くまで枝がなく。頂上で枝を四方に張つて居る途中に製材所があり、苦力が居て大きな鋸で樹を挽き割つて居る。製材所の附近はやゝ伐木されて居るが、鬱蒼たる森林は奥へ奥へとつゞく。材木は一メートル角の長サ四メートルの角材が六十盾と云ふ相場である。

チュルツプより四十五キロの處にコタドノと云ふ五十戸許りの町があり、この傍にティン湖がある。湖の幅は山と山とに狭められてゐるが、長さは五キロ程もあらうか。樹木の間に見える隠れつ、數人に乗せたサンパンが三ツ二ツ行く。静かな光景である。湖は金山の會社が堰き止

めて、自家發電用に使して居る。

テイシの町を出ぬけると、こゝがムアラアマンの平野となる。こゝは四方山に圍まれた盆地で東西六キロ南北二十キロ位はあるだらう。一面の稻田である。左の小山にロボンの金山が見え、その下につゞいて街が出来て居る。

こゝに鹿田と云ふ人がデヤンプーの園を持つて居ると聞いて、それを觀に行つたのであるが、主人公は亡くなつて、表面百五十英反と云ふが、果樹園としてはほんの僅かしかないやうに見えた。園の方は鹿田の後家さんがホテルと兼業なので、殆ど放任して雑草が蔓延し手入れも出来ぬらしい。デヤンプーは櫻ンぼうの大きいやうなもので、本氣にやれば相當利益のあるものださうだ。

鹿田——親分鹿田と云へば、娘子軍時代にはその方で鳴らしたものである。標本に一寸書いて見る。娘子軍媒介の中樞が、香港、新嘉坡、彼南にあつたことは前に述べたのであるが、彼南に城を構へたのがこの鹿田親分であつた。數十人の手下を使つて威勢を揮ふて居た彼は、身體中が突き疵切り疵で完膚なきまでになつて居た。脇腹を切られた時には、腸が外にはみ出したさうで

ある。が剛情な彼れは、醫者の來る迄布で緊く腹を結えて、三味線を弾いて居つたと云ふのが自慢話であつた。彼南では餘り風俗を壞亂すると云ふ廉で退去を命ぜられた。そこでスマトラの北端コタラジャにもぐり、西海岸のパダンに流れ込み、それから鑛山町で繁昌すると云ふムアラアマンに來たのであつた。

ムアラアマンに來てからは、殊勝にも産業のことなど考へ出し、租借地などを得て、何十とかの鯉池をつくつて養魚をやつたり、デヤンプー園の經營を始めたたりし、家ではホテル業と、雜貨をやつて居た。併し永年の耽溺的の生活と野獸的本能とが頭をもたげ、對内的にも對外的にも種々の葛藤と紛糾とがそれからそれと繼續した。そのうちに鯉池は鑛坑に影響があると云ふので埋めさせられた。三角關係も四角關係ものゴタ／＼の末、子飼の娘が鹿田の寝て居る園内の住宅の床下に爆裂彈を装置して大騒ぎをやつた。流石の鹿田も餘程參つたらしい。それで發心したやうな氣持ちになつて、自分の佛壇をこしらへ、居間には額をこしらへて掲げた。それは念入りに自ら板に彫刻して丹青を施したもので、「仁義」と大きく書いて、そのわきに、「外からは手もつけられぬ要害も内からわかるドリヤンの實」と、三拍子揃ふた道樂の上に喧嘩と俠氣を誇りとして

盛んに荒しまくつた六十の生涯も、觀じ來れば煩惱即菩提か、悟つたやうな氣がしてから間もなく、二三日病んで死んだ。三四年前のことであつた。

鹿田が居なくなつて喧嘩の種も少なくなつたが、鑛山が従前程の景氣がないので、自然この町も寂しくなり、何十人か居た日本娘も四散して、今ではホテルが二軒、雜貨店が一、寫眞屋が一と云ふ位のものである。この外に支那人と一所になつた婦人も多少は居ると云ふ。こゝなどは日本人の古い型をそのまま觀せて居るところである。

チユルツブと好一對のバゲラム

ラハからチユルツブへ來る道に二ツある。一はチピンチンギの町を経て、カバ山の右を廻るもの、即ち前に述べた道筋と、今一つラハから西方の中央山脈に向つて進み、カバ山の左を廻るものとのある。バゲラムはその後者で、ラハよりは七十六キロある。

ラハからチユルツブへ來る道に二ツある。一はチピンチンギの町を経て、カバ山の右を廻るもの、即ち前に述べた道筋と、今一つラハから西方の中央山脈に向つて進み、カバ山の左を廻るものとのある。バゲラムはその後者で、ラハよりは七十六キロある。

テランバダン—カバ 六十キロ
カバ—チユルツブ 二十二キロ

バゲラムの町は海拔六百メートルの高處にあつて、チユルツブと略同じ標高であり、氣候も似たものである。西方にはスマトラ富士のデンポーがそゝり立ち、その裾野がズツト廣くバゲラムの沃野を形づくつて居る。デンポーの山は高さ三千百六十メートル、富士に亞ぐ程の高山ではあるが、中腹まで部落があつて、炊煙の立ち上るのが見える。町に近い裾野には、珈琲のエステートがある。苦力小屋や社宅、事務所などが日に輝いて見える。

バゲラムの人口は約二千位で、そのうち支那人が三百名、日本人としては、山口君が撞球場を經營して居る外、齒科醫佐川君、寫眞屋鶴岡君、日本婦人の經營してゐるあづま撞球場がある。氣候もよし、土地も肥え、風光もよい。が何せ土地が残つて居ない。農園にでもしようと思ふやうな土地は皆權利を得られて居る。

土人の産業の状態なども、大體チユルツブと略同じものであると思つた。家屋の構造規模などから見ると、土人の生活は裕である。

村の乙女の踊

村の乙女は歌をならひ、踊を稽古する。村の若い者は地芝居のやうなものを習ふ。日をきめては村々で舞踊會の催しをやる。その會に出懸けて行つては踊り且つ歌ふ。こちらから先方の村に行き、先方からこちらの村に来る。かくして彼方此方の部落を、歌ひ廻り踊りまわる。これはラミアン——賑ひの意——と云つて、若い人達に取つて最も楽しい時である。踊り踊るなら品よく踊れ、品のよいのは嫁にとる、と云ふやうに婿の候補も嫁の候補も澤山出来るわけで、わが上古の歌垣山の風俗もしのばれる。

パゲラムよりチュルツプへゆくには、山中を悠々と流れるムン河の流れに沿ふて上つてゆくのである。川邊には獨木舟がつないであり、竹が茂つて居る。野生護謨の若葉が飴色に瑞々しく輝いて居る。娘達は黒い髪を清流に流しつゝ、水泳をやつて水の中に戯れて居る。凡てがのどかな光景である。チュルツプまでは自動車で四時間。

山嶽の西海岸州よりメダンへ

中島總領事一行と、チュルツプからベンクレーンに出て、それから西海岸州のパダンに行き、シボルカを経て中央山脈を横斷し、メダンに出ることにしたのは一月の下旬のことであつた。しかし、ベンクレーンからパダン迄は海岸に沿ふて自動車道路はあるが、未だ全通して居らないらしい。しかも時は雨季である。平地の浸水、山崩れ、如何なる故障があるかもしれない。ベンクレーンからパダンまでは船による外途がないらしい。

そこでチュルツプを出て、ベンクレーンに一泊、K.P.Mの船でパダン上陸、後は自動車で峻山嶮坂を踏破することにした。(この項以下は一四三頁の地圖参照)

英領時代の中心地ベンクレーン

パレンバンからチュルツプ迄は、途中一晩どまりで上つて来るのに、ベンクレーンに下るには三時間で足りる。だから、その道路の如何に峻峻なるか、わかる。郡廳所在地のカパヤまで二十餘キロは坦々たる道路であるが、扱これからは實に急坂である。

音に聞く蜀の棧道もかくやと思ふばかり。白雲は谷底に低迷し、鬱々たる密林高樹は奇岩を包んで青鋒を立て並ぶ。この急坂の九十九折につけた道路を、急轉直下一氣呵成に、一時間半で下りてしまふのであるから凄じい。

ベンクレーン市は、ベンクレーン州の首府で人口九千、バタビヤから海上三百七十六哩、今でも西海岸の要地である。十九世紀の初め、英國の根據地として、時の總督ラツフルス卿の采配を揮つて居つた處で、その當時の建設にかゝる要塞が今猶ほ残つて居る。陸上との交通機關も不備で、地積は狭く、物産の集散地と云ふでもなし、又港としては良灣がないために、良港ではない。印度洋の激浪がぶつゝかり、汽船は遙か沖合に碇泊する。チュルツプを経て毎週二回パレン

バンに郵便自動車が出る外、港としての價値も少いが、この附近に適當なところもないのだから仕方がない。K・P・Mの船はバダン行とバタビヤ行とが一週間に一回寄港する。

ベンクレーン州廳のある處であるから、これに附隨した諸官署がある。

役所町であるだけに、この邊の土人は子弟を悉く學校に入れさせて、相當の教育を受けさせる。そして官吏や教員にする。スマトラに於ける教員の多くはベンクレーン出身である。

街としては支那人街が一筋あるだけで、他は綠芝生の中にある役所と、椰子林の間に點々としてゐる土人の家屋のみである。町は古い歴史を持つだけに、支那人のこゝに落ちついたのも古く、三代から五代も経過して居る。古參のものは本國の言葉などは判らない。古い方はババと云ひ、新しい方は新客と云ふ。

單にこゝの支那人に限つたことではないが、ババと新客とは思想も違へば感情も違ふ。土人を煽動して暴動を起させたり、又、三民主義の宣傳をしたりするのはこの新客の方で、ババの方では、「近頃来る奴は、生きて氣に喰はぬ。」と苦い顔をして居る。

自動車で一通り廻つて観る。

舊要塞の處を覗いて觀たり、支那人街を通つたり、椰子の樹の間から海岸を廻つたりして、一時間もかゝれば隅から隅まで觀てしまふ。

ホテル・オレンヂと云ふにとまる。

ホテルは可成り大きやうであるが、夜十時過ぎは電燈がつかない。あとはランプである。夜、日本人の諸君が數名見えた。この町に總計で邦人十二三人は居ると云ふ。雜貨店としては、高田君の店が大きい方で、外は酒場とか寫眞屋とか云ふやうなものである。

パダンへ

その翌朝、出帆は十時から十二時のやうに聞いて居たので、悠々として居ると、荷揚が早く済んだのか九時には出帆すると云ふ。大急ぎで手荷物をカバンに詰め込み自動車に乗る。ベンクレーンの波止場は遠淺である。モーターボートに小舟を曳かせて本船に乗る。町の人達が見送りに來られた。船はK・P・Mの汽船で、古くはあるが存外小さつぱりして居る。

乗客は吾々の外、二三人であつた。

この日は天氣が良く、西海岸としては珍らしく波が靜である。陸の方を觀ると、巉々たる峻嶺高嶽は迢々として雲煙に消え、その裾は直に斷崖絶壁となりて海に迫り、碧浪は危岩絶壁にぶつつかつて居る。

海上には、處々珊瑚礁のやうな島が點々と見える。海の景色を見乍ら、涼風を受けて食事の出來るやうに、上甲板には食堂が設けられてある。

翌日午後二時、パダンの入口エンマハーフェン港に着く。エンマハーフェン港はベンクレーンからは二百九十六哩、パダンから南七キロの處にある。一八九二年、サワロントーの官營オムビリン炭坑産の石炭輸出の目的で築港されたもので、炭坑との間には鐵道の連絡があり、石炭は直接汽船に供給する設備も出來て居る。

波止場には日本人の諸君が迎へに來て呉れて居たので、税關の方も何も一切御任せして、パダン市に俾を走らせた。

パダン市は昔のメナンカポール王國の根據地である。一六〇六年、和蘭人ボートと云ふ人が、

パタピヤから船でこの地に來たのが始めて、その後、和蘭東印度會社の事務所が設立され、英國と多少の葛藤はあつたが、結局英蘭協約で全く和蘭領となつた。けれども、人民は剛強不屈の氣象があつて、容易に和蘭に服さない。そこで一八三七年、ミシエル大佐が兵を率ゐてやつて來て遂にメナンカポール王國を滅し、西海岸の知事となつた。それから歴代知事の所在地として最も重要な地點となつたのである。

州廳の所在地で、裁判所、商業會議所、軍營などがある。教育機關としては、七年制の小學校七年制の中學校がある。

パダンと思ふたよりも奇麗な整ふた所である。廣い街路は、綠樹を以て被はれてすがすがしい。人口は約四万、そのうち和蘭人が千二百人、支那人が四千人である。産物はコブラ、籐、ダマル（ニスの原料）、珈琲である。百四十キロを距れるサワロントには官營の石炭山がある。昔は不健康地であつたらしいが、近頃は排水溝も完全に出來、衛生状態も非常に良好になつた。

パダン人は勤勉で、商業的には支那人も三舍を避ける手腕をもつて居る。この點に於てスマトラでは、バレンバン人と好對照である。好對照であるが寧ろパダン人の方がまさつて居る。一錢

一錢を争ふでなく、一厘二厘を争ふ。

兎に角民風は剛強不屈の處があつて、商業にかけては、支那人も及ばないだけの手腕と奮闘力を持つて居る。随つて、革命運動などの策源地とされて居る。一九二六年の十一月の暴動以來、一層この地は睨まれて居る。この革命運動には常々、裏面に支那人が策動して居るらしいが、日本人は相警めて、輕卒な口もきかぬやうにして居るので、官憲の感じも悪くなくと云ふことであつた。

この邊の地勢は、一言にして言へば山嶽重疊である。直ぐ後に聳えて居るバラン山は、二千五百九十七メートル。その南にあるパンタイチエルミン山が、二千六百九十メートル。北に聳ゆるマラピー山が、二千八百九十一メートル。どちらを觀ても恐ろしい高山が突き立ちて居、只海岸のところの僅の平地があるのみである。これらはまさに日本アルプスの連山に匹敵すべき高山である。日本流に考へれば、岷々たる峻峰の頂きには千古消えやらぬ雪を頂き、山中には登山の小屋でもある位なものにしか思へぬが、こゝは山に登るに従つて、土地が肥え、氣候も涼しくなるので生活がしよく、彼等の安住所である。峻山と峻山とを連ぬる高地には、富裕なる土人部落を

控え、豊富なる物産がある。處々に立派な町もある。この町には縦横に自動車道路が通じ、汽車もありて、連絡がとれるやうになつて居る。

パダンには海岸の一小地帯ではあるが、ベンクレーンの遠く及ぶ所でないのは、豊饒なる奥地を控えて居るからである。

裏山を一つ超えれば、新嘉坡と一章帯水の東海岸州の南部、密林地を被ふの平野となるのである。

今少しくこの地方のメナンカボー種族について述べよう。

メナンカボー種族は、衣服も家屋も幾分他とは異なつては居るが、最も異とすべきは、家族制度が女系制度になつて居る點である。男女結婚はしても夫婦は別居し、夫が時々妻の家を訪問するのである。二人の間に出来た子は母の財産を相続し、子のない場合は母の兄弟、姉妹これを相続するのである。結婚は双方の母の見立てによつて行はれ、父は一切干渉しない。

土地の産物としては、米、藍、煙草、椰子、胡椒、檳榔子、ガノビア、棉花、玉蜀黍、馬鈴薯である。水牛、馬及び山羊の牧畜があり。工業としては金銀細工、銅、眞鍮製品を産し、家内工

業として刺繡に巧である。

この地方は、土地は一般に肥えて居り、企業とも有望なところであると聞いて居たが、峻峻なる山地故、本道へ出る迄の道路の修築費が非常にかゝるだらうと思ふ。

兎に角充分調査するの餘裕を持たなかつたのは遺憾であつた。

パダンの日本人

この日見えた諸君は醫藥品の高石好松君、雜貨綿絲布の近藤鶴吉君、齒科醫の山本吉藏君、寫眞業の角裕之君、綿絲布輸入商小澤康人君などの方々であつた。

パダンには日本人は早くから來て居た。明治の初年頃の墓があるやうにも聞いた、それは後の事である時に確めて見たわけではない。ずつと多く邦人を觀るやうになつたは、娘子軍の活躍時代であらう。今チュルツブに居る婆さんなども、二十餘年も前にはこゝに根據を据えて、若い女達と郡監督官の紹介状など貰つて、幾日かの旅を重ねて、山の奥の町から町に、玉ころがしの道具と澤山の景品をかついで廻つた、と云ふ話がある。が今はそれ等は嚴禁されて影もなく、堅

實な人達が懸命に地盤を築きつゝあるのである。職業から言へば、前記の外、理髪、洗濯、漁業などで、戸數より言へば九戸、人數から言へば五十人(内二十名漁業)、數は言ふに足らぬが、漸進的に發展しつゝある。

シボルカへ

明くれば一月二十三日、夜の明けぬうちからあちらでもこちらでも盛んに爆音が起る。何事かと思ふたら、支那の元旦で祝の爆竹であつた。爆竹はよいとして困つたことは、支那人のおつき合ひで休業して祝ふて居るので、運轉手がない。しかし、これは日本人諸君の肝煎りで邦人か馬來人か何れかは知らぬが日本語のわかる山口君と云ふのと、今一人の男がメダン迄行くことになつた。朝飯が済み準備も出来たが、山口君中々來ない、迎へにやると女房のバダン人が元日匂々から遠方に行くことを喜ばぬと云ふらしかつたが、兎に角話はついた。

今日はどうしてもパダンシデンパンあたりまでは行かねばならぬ。道は嶮山高嶽の連亘して居る中央山脈の間を縦走するので、それも三百キロもあらうと云ふのだから、中々容易なことでは

い。しかも時は雨季、連日の濛雨で山中の橋が落ちて居る處もあるらしいと云ふ。マア走れるだけ走れと云ふ譯で出發した。道路の破壊の心配もあるので、パダンの日本人會から今夜の宿りのパダンシデンパンの邦人諸君に電報をうつてもらふ。

パダンの町を出ると、道は護謨園の中を通る。清風面を拂つて気分はよい。自動車は五十キロの速力で疾走する。行くこと一時間ならずして山中に入る。山容、樹色、溪流のさゝやき、箱根の山中に行く心地である。急坂を上りつめるとこゝに亦高地は展開する。

パダンパンデヤンと云ふ町がある。戸數八百、十年前に地震で大被害があつたと云ふが、今は大半復舊して居る。こゝに本田君と云ふ人が雜貨店をやつて居る。一寸家の前で車を停めると、妻君から老母まで飛び出して來て、しきりに支那正月であるから、晝飯でもたべて行つて呉れと言ふて呉れる。しかしゆつくり出來ぬのが今日の行程である。好意を謝して復た車を走らす。兎に角、かう云ふ山中に一人で、支那人の間に介在して奮闘して居るのを見ると、心強く思はずには居られない。

パダンパンデヤンを出て右には深き谿を觀下し乍ら下る。右に高く雲に被はれてあるはマラバ

ル山で、左の方遠く霞のかゝれるのはマニシヤン湖である。

世界第一の無葉の花と鯉の神様

フオーデコツクの町は海拔九百三十六メートル、人口三千。商業としては大した位置ではないが、海岸のパダン、鑛山のサワロントー、煙草の産地バヤコンボとは輕便鐵道で通じて居り、軍團の所在地で、こゝで武力を以てパダンを抑へつけ、北のアチエから南スマトラまで睨みをきかせて居る。軍事上重要な地點である。氣候は朝夕七十度、風景は小瑞西と言はれて居る。

この地方の名物に無葉の花があり、名所に鯉の神がある。

無葉の花は、直径五十センチから七十センチ、葉がないのと、世界第一の大輪であるので有名である。

鯉の神様は、パダンブルグと云ふ谿川の淵をなして居る處にある。高い道の處から飯をつゝんで投げ込むと、幾百尾の鯉が浮み出して来る。山口君の説明によると、ある夫婦が子供のないのを悲しんで、河の神に願をかけた。願は叶つて男の兒をまうけた。その時にもし子供を授けて下

されば、牛をいけにえとして供へると云ふのであつたが、その夫婦は神様への契を忘れて居た。子供は大きくなつたが、ある日自分は川の神の子であるから父の許に行くと言つて、川の中に這入つて仕舞うた。母は狂氣のやうになつて愛兒の後を追ふてこれも川に身を投げた。それから急にこの鯉が殖えた。親子のものゝ化身であると云ふのである。土人は非常に尊崇して居る。もし捕るやうなことがあれば、必ず崇りがあると云ふ。ある蘭人が「今時そんな馬鹿なことはない、おれが食べて見せる。」と言つて食膳に上らせた。土人は色を失つて恐れたが、蘭人は平氣で食べた。食べたは良かったが一週間立たぬうちに急病で死んでしまつた。古き傳説はこゝに新しい實證を得て、愈々權威あるものとなつた、と山口君は頗る眞面目。

夜中の獨木橋渡り

ロボスカツピング町は、パダンから百七十二キロ。この邊は峻山の谷底みたやうな處である。道は崎嶇羊腸たるもので上りまた下る。一万尺近い山が、翠碧の屏風を立てたる如く、眼前咫尺のところより屹立直に天空を劃すので、莊嚴雄大で、樹木は一樹は一樹より高く、層々簇々美し

い色を以て配合して居るので、恍として風光の美に魅せらるゝのである。

パヤボアンの町に入つた時はもう日が暮れた。雨のため橋梁の落ちたる處があると云ふことは朝出發の際に聞いて居たが、果して、この町で聞くと橋梁墜落、自動車は通じないとの事であつた。この町には泊るやうな處もない。まア、ゆけるだけ行つてみようと車を走らせた。

先方から一臺の自動車がやつて来る。車は止まつた。パダンの日本人會から電報が來たので、迎へに來たといふ。パダンシデンパンの月本、黒田の兩君であつた。

夜は暗い。溪流の橋は落ちて居る。溪底には水音轟々と響いて渦まく濁流はカンテラの光に照されて居る。上には只、三本の長い椰子の樹がまばらに渡されてあるだけだ。しかも、丸太の儘で泥まみれだ。靴も泥まみれである。向ふ岸にはビール瓶に石油をついでこれをカンテラとして人夫がガヤ／＼騒いで仕事をやつて居る。燈火は却つて眼の先きをキラ／＼させて、中程にも至らぬうちに動けなくなつた。後から人夫が猿のやうに渡つて來て、手をつかまへて呉れたので漸く渡つた。

中島總領事も杉田君も渡つた。否、さきに渡つて居たのかも知れないが、暗い森の下で顔を見

合せたときはホツとした。こゝで自動車を取りかへて、これが大分手間とれたので、出發したのは夜の八時であつた。

これから嶮山に登りあげる。兩側は深い溪でもありさうである。晝間であつたなら、四顧の風景必ずや壯絶快絶のものもあつたであらうが、天地暗々黒々、何のみるところもない。

坂を下れば坦々たる平野。自動車の速力も加はり、十時半漸くパダン・シデンパンに着く。

パダン・シデンパンは小盆地の市街である。官營宿舎はあるが、先客があつたので、予と杉田君は月本君の處に御厄介になることにした。月本君は雜貨店を盛んにやつて居り、護謨園も持つて居る。

日本風の風呂に這入り、旅塵を洗ひ、夕飯を頂戴した。この土地の情況など聞いて居るうちにもう午前一時となる。色々承りたいのであつたが明日も早いので御免蒙つて休むことにした。

かゝる山中に於て、わが同胞の奮闘の状況を觀、又同胞が心から盡して呉れる眞情には、衷心感謝の情を捧げるのである。

シボルガ

早朝コーヒーを頂戴して、七時には出發する。シボルガまでは九十キロである。途中急坂もあつたが、昨日大抵味はひ得たことと、左程苦に感せず、繪の如き風光に興じつゝ車を走らす。途中に護謨園や椰子園がある。午前十一時にシボルガに着く。

東海洋行金子君の宅を訪ふ、君は貿易商である。

シボルガ町は人口約一万、タバヌリ州の首府理事官廳の所在地である。日本人は九戸である。

- 護謨園主 一 寫真師 一 酒 屋 一 護謨輸出業 二
- ホ テ ル 二 煎餅屋 一 産 婆 一

今より十五六年前、この町に大火があつた。

この機會に、街の大改善をしようと、先づ百万盾の豫算を計上して、大小下水の工事を起し、衛生状態の改良を計つたのであつた。

以來、有名なマラリヤ地であつたが全く後を絶ち、健康地帯となつたと云ふのである。ところ

がこの工事に就いて問題が起つた。起工後間もなく破損したり、水が漏れたりしたので、新聞などにも書き立てられ、批難も多かつたが、役人が既に和蘭に歸つたりして有耶無耶になつてしまつた。昔よりは和蘭殖民地の官紀振肅、綱紀律正には、段々改善を加へて來たらしいが、まだこんなことがあるらしい。

此邊は平地とても少く、町の傍から峻しい山坂であるが、この山の巔のあたりは樹を伐つて開墾を始めて居る。この急峻の處に護謨でも植えるつもりらしい。

漠々たる曠野

坂を上りつめれば、下に一望千里のタルトウフングの沃野が展開する。満目唯翠緑の中に、人家だけが白く陽に照らされて光つて居る。タルトウフングの町にも休憩するに至らず、稻田の間を抜けると、又坂となる。この坂を上れば眼前に一大平野が展開して居る。

曠野漠々として天に接し、ブラジル國ミナス州の廣野を旅行したときを回想する如き只一面の野原である。スマトラのやうな島に、どうしてこんな廣々とした原があるかと驚く。

行けども行けども果てがない。人家も見えず畑もない。只、ラランのみ生茂る。日は次第に西に傾く。風は冷たく肌寒い。レインコートを着、毛絲のチョツキを着る。「不知今夜何處宿」と云ふやうな頼りなさを感した。

漸くこの平野を出抜けると、一帯の外輪山に囲まれた窪みに大湖水を發見した。これがトバ湖であつた。

トバ湖

トバ湖は中央山脈の北部の眞只中にある。南北七十五キロ東西四十キロ琵琶湖に匹敵すべき大湖である。湖畔の外輪山は皆數千尺、湖水を繞りて大丘岡となつて取り巻いて居る。氣候は清涼で、空氣は乾燥して居る。湖水の中にはサモシールと云ふ大島が横はつて居る。湖畔のトバ・ホテルに暫し休憩し、展望を縦にした。

自動車は湖水の東岸を廻る。湖畔にバリゲと云ふ戸數二三百の小さな町がある、將來は別荘地にでもなるであらう。この邊はシマヌクマヌクと云ふ二千五百メートルの山が、湖水に迫つて

居るので、道は湖邊より山に山に入つたと思へば湖邊に出る。湖邊の道は危岸絶壁を掘鑿して自動車を通すだけになつて居る。道路より下幾百尺、直に削り成したる如く湖面に迫る。深潭青く黒く澄み渡りて、底は幾千仞か、千古の秘密をこめて黙す。俯瞰すれば竦然として身の毛もよだつ。山口運輸手は、

「氣のよはい女の方などは、恐ろしさに顔色が變り、氣も遠くなつてしまひますから、成るべく見えないやうに、岩壁にそうて車を走らせます。」

といふ、日は全く暮れた。寒い風が吹く。自動車は岩ををぐつた處を通り、又次の岩屋のやうなところをくぐる。

坂を下りて平地に出ると、暗くてわからぬがチークやゴム林などかと思はるゝ林の中を通る。

ホテルの問題

漸くシヤンタルの町に入る。

シヤンタルは人口二万、理事官邸、銀行會社の支店、聯合病院などがあり、支那人の多く居る

町である。氣候はメダンよりズツと涼しい。護謨も出来れば茶も出来る。珈琲もオイルバームも育つ豊饒の土地である。

この町に只一ツホテル・オレンヂと云ふ宏大な旅館がある。あまり交通頻繁の處でもないからと想つて電報を打たなかつたのは過り、イヤ電報を打つても駄目だつたか知れない。といふのはこの日は爪哇銀行の百年記念日であつたからで、幔幕張り廻して電燈が華やかにつけられ、庭前は自動車で一杯であつた。

番頭に部屋交渉をしてみると、色々やりくりを考へてみて呉れたらしいが、結局、約束済み満員で都合がつかぬと云ふ。なんでも今夜は夜徹してダンスの催しがあるらしい。

仕方がないから、日本ホテルがあるだらうと言ふと、運転手は朝日ホテルと云ふに車をつけた。これは支那人の經營で、主婦は愛嬌のある日本の婆あさんである。下が酒場で二階が客室である。何せ腹が空いて叶はぬので、棚から菓子を取り、一杯のビールで元氣をつけた。そこへ都ホテルの主人と云ふのがやつて來た。

「こんな汚いところは駄目ですよ。日本人の諸君と私の家へ來て戴くやうに相談してありますので」と中々露骨だ。今度は何故こんなところに御案内申したと運転手に當り出した。日本人ホテルがあるのに、支那人のホテルに車をつけたのが癪であつたらしい。予はむしろこのホテルに氣の毒を感じた。そこで妥協的に自分一人はこゝに残り、夕食は皆一緒に都ホテルでやることにした。都ホテルも部屋は三ツしかないと云ふから。

今夜はこゝの劇場で爪哇人とアラビヤ人の歌劇があると云ふので、食後一人でこれを見に行く入場料は一盾五十仙である。

何でも、勇士が武功をたて、戀敵と競争して勝ち、お姫さまを貰つて、觀樂場裡大團圓となり皆でダンスを始める、といふやうな筋らしかつたがよくはわからない。

役者は黒髪の長い眼ざしの鮮かな娘や、體格の大な男などが、色々の服装で出て來たが、踊り子の靴下が粗末な木綿であつたり、男の赤黒い顔に額のところだけ、白粉をつけたりなどして居るのは、どう見ても美的だとは言へぬ。觀客の八九分は支那人で、無上に面白がつて手をたいて居た。歌は聲量もあり、特に一種の美音は感じのよいものであつた。

十一時過ぎに歸つて來て眠りかけると、踊子や樂手等一座のものがガヤ／＼歸つて來た。この

ホテルに宿つて居るのである。

翌朝、六時に眼を醒まし便所にゆく。昨日の踊子が戸を開け放して便所に這入つてゐる。ハツとして逃げ歸り、少したつてゆく。今度は他の者が居る。小便所は？ ときくと、御勝手に御やりなさいと来る。支那の料理屋では不思議でもないが、かう狭い臺所ではいかんとも閉口。齒ブラシや手拭を手にもつたまゝ都ホテルに飛び込む。洗面所でよく見ると、この邊の土人には珍しい顔容の整ふた若い女が三四人働いて居る。ハテ面妖な、部屋が三ツしかないと言ふのに……と思ふたが、讀めた、矢張りその何であつたか。

朝になつてまた町を見直す。

シヤンタルの町は戸數餘り多いとは思はねど、街路は廣く整然として居る。邸宅の四圍の青々した芝生が、黄紅絢爛の花で以て彩られて居る、和蘭人の瀟洒たる住宅は見るからに心地よい。未だ家の一軒もない處にも、廣場や街形だけは出來て居る。新開地の市街は計畫的であるから整然として居る。商店は全部支那人である。

今日はブラスタギの避暑地を訪ひ、トバ湖畔を中心としてこの地方一帯に磐居して居るバタ族の生活情況を觀てメダンに着く。ブラスタギとバタ族の事は項を改めて述べよう。

新興の市メダン

再びメダンを訪ふべくブラワンの港に上陸した。ブラワン港はデリー河の河口にありて、一萬噸級の船を横付に出來る良港である。こゝの上陸は頗る簡單であつた。蘭領では小さな港になれば、同じ蘭領のうちでありながら、乗船港で荷物を一々検査し、復た數時間の後、上陸港で一々検査するやうな馬鹿げたこともやる。

ブラソンからメダンまで坦々たる道路を自動車は氣持よく走る。三十分ばかりでメダンに入る。メダンは約五万の人口を擁し、東海岸州の首府として、スマトラの南部パレンバンと相對し、その繁榮を誇つて居る。が、今から六十年前、デリー煙草會社が創設さるゝまでは、デリーのサルタン(王)在住の地として、僅かに二重の城壁を以て圍まれた、微々たる土人部落に過ぎなかつた。

今日のメダン市は、宏莊なる建物が建ち並び、廣き街衢、鬱蒼たる樹木、電燈電話水道銀行新

聞鐵道等、文明の機關備はらざるなき活氣満々の都市である。
 この町に始めデリー煙草會社が設けられた時、この邊の土地一面煙草會社が買収したのであつた。事務所が出来た。社宅が出来た。そこで、例の支那人が飲食店や雜貨店を少し出したのが、今日のメダン市の濫觴である。

ホテル・デ・ボアに宿ることとした。このホテルの門を這入ると、高さ數十尺の喬木が枝を擴げて、涼しき影を地上に落して居る。横には廣庭がある。庭には數十脚のテーブルを並べて、食後の晩涼を味ひつゝ、觴を擧げて歡語するところとなつて居る。家は本館と、その前に各々長い棟があつて「川」字をなして居る。部屋は四五十はあらう。

二階の間にも植木を並べた小さな屋上庭園らしいものと、社交室、寢室、便所、浴場など廣くとつてある。

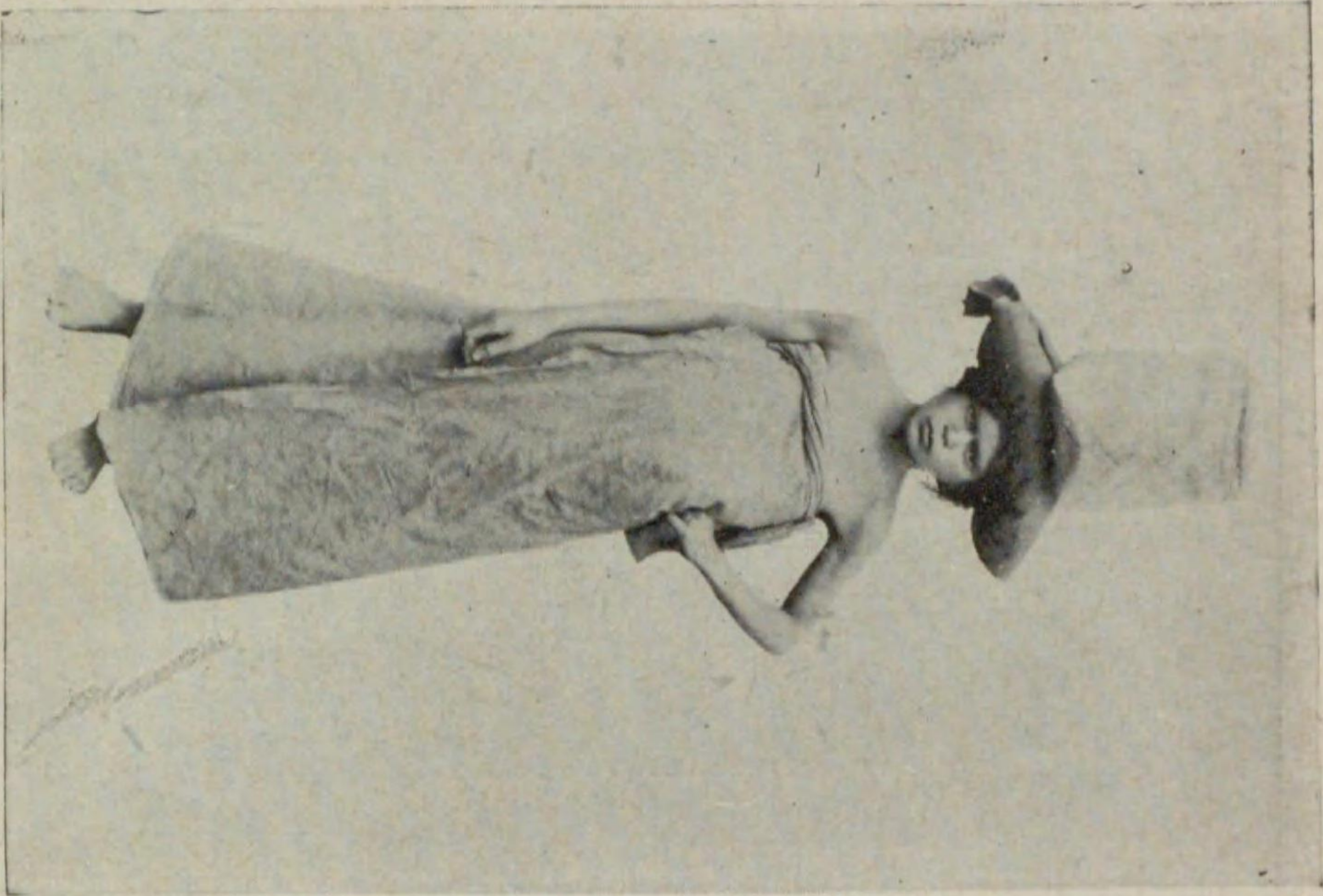
寢臺の四方には蚊帳ではなくて、絹絲のやうな細い金網が張つてある。その中で煙草でもすつて居たら、螢籠とでも間違へられさうである。中は中々廣いから、さ程窮屈に感じない。和蘭風の便所の多くはビール瓶に水を詰めたものを七八本並べて置くが——紙も備はつてゐる——こゝ



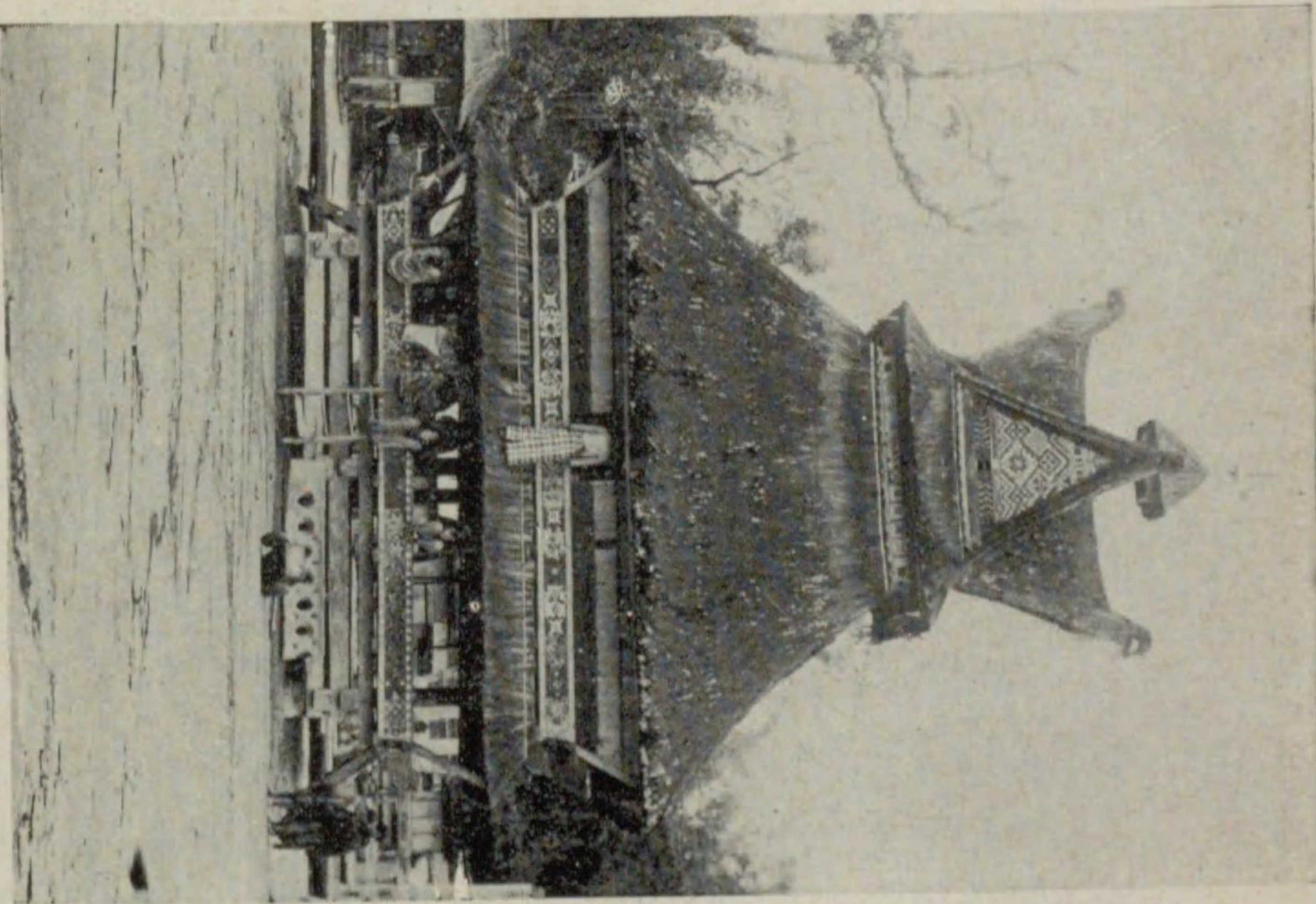
アーボ・デルテホ 門這入ると高さ数十尺の喬木が枝を擴げて涼しき影を地上に落して居る。横には廣庭がある。庭には數十脚のテーブルを並べて、食後の晩涼を味ひつゝ、觴を擧げて歡語するところとなつて居る。家は本館と、その前に各々長い棟があつて「川」字をなして居る。部屋は四五十はあらう。



メダンの煙草園 マスラトは十九の煙草園のそりが総面積は四十七万八千八百九十ダルギ 總產額約二萬八千八百九十ダルギ 世界總輸出額の五分の一を占めてゐる。



と蓋をつまきは色の服衣 女の族タバ
る被を刺黒大なき大はに頭てかと紺か



木村たしリツツガは家 屋家の族タバ
き葬茶の本日チーておれら造くき大で

にはビール瓶はない。

右手のところに把手があつて、細い管に接続して居る。試みに把手を制へると、水が猛烈に響部に向つて放射する。若しそれ腰の位置でも悪からうものなら、水は凄じい勢ひで、龍吐水の如く顔のあたりに噴きつけるだらう。ビール瓶もまたこの放射管も、後を奇麗に洗ふための装置である。

ホテルで珈琲をすゝり、少憩の後、早速領事館に諏訪領事を訪ひ、三井物産に行つて主任の舟木氏その他の方に挨拶した。メダンは貸家のないところである。舟木氏も永くホテル生活で困つて居られたと云ふ。諏訪領事もホテル・デ・ポーアの生活で、夕飯が八時から十時、夜は一時までもダンスで騒がれては全くやり切れたものでないと云つて居る。

岩田君の案内でサルタンの王宮や、デリーの煙草會社だとか、郊外の煙草園マホメットの會堂などを一通り廻つて観る。王宮には何か御祝儀があつて飾り物がしてあり、庭園には市場が立つて居た。

メダンは煙草の産地である。デリー煙草の名は、世界に廣く知られて居るが、その他胡椒、タバコ、米等の農産物も多い。特に近年は護謨栽培業の勃興につれ、スマトラ東海岸は護謨企業を中心となつて、馬來を凌がんとするの勢ひである。

メダンの煙草

郊外の煙草園を観る。煙草園があれば雜林があり、又煙草園がある。甚だ勞作上不經濟ではな
いかと思つたが、煙草は連年作が出来ぬと言ふ。

煙草園は同一土地に八年目に一回栽培するだけである。だから、一千バウの面積に栽培するとすれば八千バウの土地が要るといふことになる。スマトラには九十の煙草園があるが、その租債總面積は四十七万バウからある。

スマトラ煙草は、總産額が約二万噸、八千万ギルグー。爪哇産を併せての蘭領總計では一億二
三千ギルグー、世界總輸出額の約五分の一を占めて居る。

蘭領では、煙草は始め、土人の自由栽培に任して置いたところ、その品質が非常に低下し、次

第に衰微するやうになつた時、スマトラ煙草栽培會社のニンホイスが、始めてデリー地方で煙
草栽培を試みて良好な成績を挙げ、それから、大資本が投下されるやうになつた。

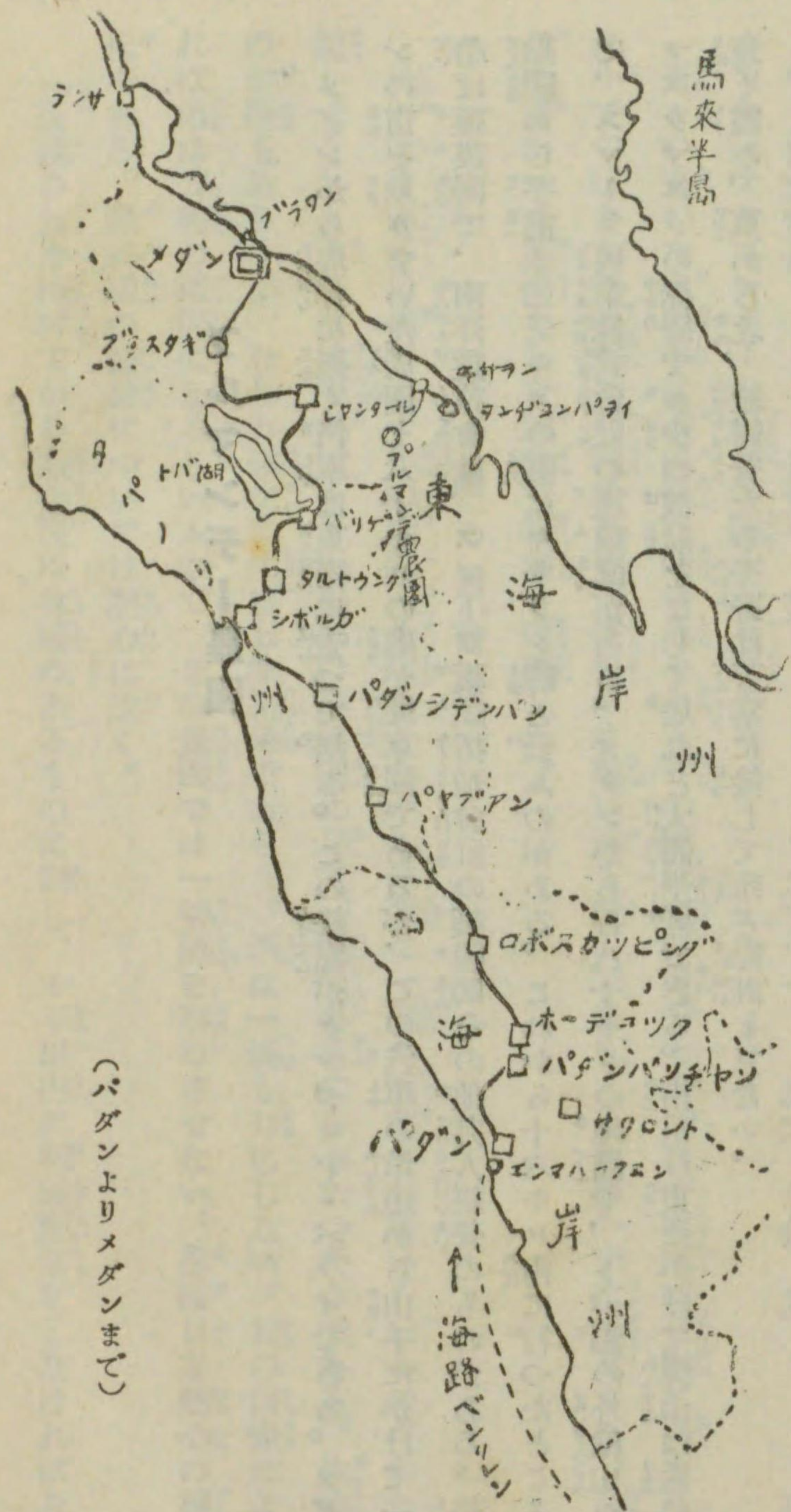
それも一寸とした動機からで、デリーに住んで居たアラビヤ人が、タバコの歐州人商社を尋
ねた際、「スマトラで出来る煙草は非常によく、他のものは到底比べものになりません。」といふや
うな話をした。そこで、調査のためニンホイスが派遣され、今より六十三年前、即ち一八六五
年に、始めて五十俵の煙草が歐州に輸出せられた。これが大評判で歐州人の賞讃を博した。それ
から四年目に、デリー煙草會社が資本金三十万盾（現在は拂込九百万盾）で創立され、その後
に幾多の煙草會社が出来て、現在の如く、密林叢々の蠻地が農園遠く開けたる煙草栽培の中心地
と變るに至つたのである。デリー會社は創立の翌年二割の配當をし、以來最低一割九分、最高十
一割三分の配當を繼續して來てゐる。

この煙草の特色は、葉が薄くて強韌であるため、葉卷の上巻葉として他の追隨を許さない特
色をもつてゐる。煙草の葉を指に巻いて、指の肉色が見える位の薄い、強韌なものである。

豪勢な社宅

岩田君は、この町は煙草會社の町で、その豪勢振りには郊外に點在してゐる社宅を觀れば最もよく判ると云ふ。成程、六十年間利益をつけた會社だけあつて、郊外に立ち並ぶ重役から雇員に至るまでの住宅は、何式だか判らないが、大は大きな小は小なりに、緑陰に包まれ涼風を迎へるに、家の前にはベランダに對して、青き芝生、美しき花園を控えて居る。

午後の最も暑い時は、鐵戸を下して午睡の夢に入り、夕刻は少し執務して、後は音楽や活動寫眞ダンスとなり、年末のボーナスに懐がふくらむなら、小さいせつこましい本國に居て、年中水浸しの土地に苦心して暮して居るよりか、どの位よいかわからない。植民地生活を希望するもの亦無理もない。しかし、これだけある住宅に運動の設備が少ない。彼等はジャガタ芋を喰ひ午睡する人種だ、と云ふ人があつたが實際無恰好に太つて居る。しかし、海外に立派な生活をして居ると云ふことは、どつちから考へても良いことである。邦人の生活も早くかう云ふ境遇に實現したいものだ。



煙草會社は煙草でも儲けて居る、が殆ど無代價同様の土地が一メートル平方いくらと云ふ値で賣れてゆくのであるから、土地會社としての利益の方が多からう。

(パダンよりメダンまで)

フルマンデー農園

メダンから海岸に近く汽車は東南に走つて居る。この終點がタンジョン・パライである。メダンの市を取りまいた周圍七八十キロの處が煙草園であるが、この汽車の沿道から山手にかけて一帯は護謨園で、南洋護謨會社、スマトラ護謨拓殖會社の護謨園その他邦人經營のものがある。終點驛から手前十二三キロの處にキサラン驛と云ふのがある。これから十六キロ南に行つたところに、スマトラ興業株式會社の護謨園がある。メダンから百八十キロの地點で、トバ湖の外輪山にマヌクマヌクの裾野で多少の波状をなして居れど大體平野である。南から東にかけて連山は遙に遠く霞み、東から北、綠巒蒼たる平野は天空に接して殆ど際涯を見ない。

地は東海岸州のアサハン管轄區に屬しフルマンデー農園と云ふ。創設は大正七年であつた。始め和蘭人の所有した居た八百英反を買ひ、それから漸次擴張して來たものである。現在は總面積

一万五千十四英反、その中舊經營法によるものが三千英反、新經營法によるものが二千三百英反である。その外にココ園三百英反、油椰子園二十五英反、シトロネーラ(香草)園二百五十英反、カカオ(チヨコレートの原料)園十五英反ある。

吾々の乗つた自動車は護謨園の間の道を永く走つて社宅の前でとまつた。社宅は花園に圍まれた小ざつぱりした最近の建物である。浴場には熱い湯も酌んである。とりあへず水浴をする。浴衣に着かへて悠揚とした氣分で晚餐を頂戴した。

ゴム園の經營法

岩田氏は南洋に來て二十年の護謨園生活をした。この間に一回の病氣もしないと云ふのだから驚く。それも前には健康地でもない馬來の護謨園に居て、開墾事業にもあたつたのである。生來の健康もあらうが、むしろ攝生に注意した結果であらう。酒は一滴も口にしない。君の信條によれば酒は万病の誘因になるといふので、この農園では一切酒を用ゐさせない。眞面目と熱心の權化である。護謨園の經營については熱心に説く。

「護謨の如き植付てから數年後に收穫のあるものに對し、十年以内に利益配當をしなければな

らぬやうな株式會社をつくることが間違ひである。

農園は經營が本位で、これが生命である。然るに多くは農園の方は從にして成るべく經費を少くし、本店事務所によくかける。事務所はテーブル一つに事務員一人で事足りる筈である。

護謨の相場は時に高低はあるが、最低四十五仙、平均六十五仙位の處を上下するものと推定するは不當ではない。若し四十仙臺に下れば、英國道路局は道路工事に使用しても充分成算があると言して居る。又三十仙臺になれば、現在護謨の生産六十五万噸の内二十五万噸は廢物ゴムを再製したものであるが、これは生産費に於て不能となり、又侮るべからざる土人ゴムも採算不能となるから、必ず六十五仙内外を上下することになる。

又、人造護謨も經費がかかるから天然ゴムより有利とは言へない。工業の進歩文化の向上に於て、護謨は世界的需要のあるものであるし、又、家具類までが硬質護謨で出来るやうになつたと云ふから、價格はさう無暗に低下するものではない。

護謨の生産は最近の試験發表によれば、生産量を千ポンドに進めることは何等疑ひなき事實である。

で、利益配當を急がず、農園の事業本位に經營さへして行けば、護謨の如きは最も永遠にして確實なものである。」

新式のゴム樹育成法

朝暗いうちに遠くの方でコボの音が聞える。苦力が起きる合圖である。コボは木をくりぬいて絲瓜のやうに上から吊るしてある。起床、食事、集合、皆これを用ゐる。

朝起きてコーヒーを頂戴して農園を一通り自動車で廻る。

この園では、アフロス試験所の成績に鑑みて芽接法と優良種の實生と兩法を採用して居る。岩田常務はこれにつき實地につき懇切に説明して呉れた。

芽接法と云ふのは、優良種の若芽を削り取つて来て、これを、育てゝある若い臺木の皮を丁字形に切り裂き、その中に封じ込みて再び皮を舊のやうに被せ、その上を細布で幾重にも巻いて置くのである。

實生は優良樹の種子を、苗圃で育てるのである。

アフロスの試験によれば、これまで平均上の部一英反の生産三百五十ポンド位のもものが、今は

八百ポンド或は千二百ポンド以上の成績を収めて居る。

選種は一本の樹で六ヶ月以上、一日五十グラム以上を産出する母樹の花粉を交媒せしめて、その種子を育成し、これを第二代の母樹とする。

この二代目優良園の中より、更に優秀なるものを交媒せしめて、三代目の優良園をつくる。かくして現在では、既に四代目の樹より優良苗木を得て、更にそれ以上の成績を得ようと努めて居ると云ふのである。

英國勢力下にある馬來護謨園では、今、現在の護謨園すら生産制限の爲めに全能力を發揮して居らないやうな情況にあるので、優良種を得て生産を増大すると云ふやうなことは念頭にない爲め、蘭領でかう云ふ試験をやつて居ると聞いても、それは單なる一つの學說一つの試験に止まるもの位に思ひ、半信半疑の間にあるものが多い。が、蘭領では既に十年前から試験に着手し、昨今に至りてはその實績毫も疑ふ餘地なきものとして、責任ある發表をして居る。又、その種子も希望に應じて何程でも配布すると云ふ。

「カイン」Coca or Cocain Plant

スマトラ興業會社では、三百英反のコカの植付をして居る。コカは一寸觀たところ萩の小さいものゝやうな形をして居る植物である。

製造法は新芽を摘んで、これを日光に乾かし再び蒸汽乾燥をし、葉と莖とを風別して、葉の部分を製品とする。製品は時日を経過すればコカイン含有量が低下するから、長く貯藏して置くことが出来ない。商品は普通一・七%のコカイン性分が引渡最低含有量の規定である。

コカイン製造に厄介なことは、長く貯藏して置けば成分が低下することである。それで、製造の方は注文を觀てやるとして、畑の方は凡そその年の注文豫想で栽培する。第一番に刈込んだ新葉が一番良い、これは十三%を含んで居る。第二、第三、第四と段々低下し、第四以下は商品に適しない。で、刈込みの時期と注文とが一致して來なければ、大なる冗費がある。

三百英反一年の生産可能量は、百二十噸であるといふ。

コカの工場を觀せてもらう。これは茶のやうに摘んだ若芽を一度天日に乾かし、次に乾燥器に入れて乾かし、これをついて細粉とすれば良いのである。